

【】(運動場での朝礼がすむと) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

[\[中学・塾用ワープロデータ教材\]](#)

運動場での朝礼がすむと、啓吉は自分の学級の先頭に立って教室にはいって行った。

びゅうびゅう口笛を吹く者や、唱歌をうたう者、教科書と首っ引きの者、復習をしてなかったと泣きそうになっている者など、まるで教室は「」。級長の啓吉は、「静粛!」という声をどつしてもかけられなかったのだが、不意に副級長の芳子が、「皆さん! 静粛にしてくださいっ!」とどなった。ちよつとの間、静かになったが、だれかが隅の方で、「すげえなあ」と「」の声をもらすと、津波のように皆がどつと笑いだし、いつまでも笑い声が続いた。啓吉はますます小さくなった。七郎が教壇に上がって、… 静力ニセヨ…と黒板に書いた。すると、また笑い声がり返ってきて、机を叩いてうたう者がでてきた。

女生徒たちの方では、「困るわねえ、男の生徒ってきらいだわ…」。とぐちぐちこぼし始めたが、やがて、芳子は何を思ったのか、「」。「教壇に上がって、…オトコノセイトキライ…と書いた。窓が開いて、ひときわ空が高く澄んでいるせいか、黄いろいジャケットを着た芳子は、輝くように美しく見えた。芳子が教壇から降りようとする、七郎が教壇へどんとん上がって行って、… オンナノセイトスキ…と書いた。皆どつと笑った。

問一 「」に入れるのに最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 鳩が豆鉄砲をくったようだ イ 蛇にみこまれた蛙のようだ

ウ 雀百まで踊り忘れずだ エ 騒々しい雑音だけだ

オ 豆がはぜたようだ

問二 「」に入れるのに最も適当な者を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感嘆 イ 賛美 ウ 不満 エ 疑問 オ 非難

問三 「」に入れるのに最も適当な者を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ぶらぶらと イ つかつかと ウ のっそりと エ こっそりと オ しずしずと

問四 「皆どつと笑った」のはなぜか。その理由を「オンナノセイトスキ」と書いた七郎の気持ちを含めて四十字以内で書きなさい。

(熊本県)

「解答」

問一 オ

問二 ア

問三 イ

問四 七郎がすかさず、冷やかしの気持ちを込めて、芳子と対照的なことを書いたから。

【】(夕暮れ近い教室で)次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夕暮れ近い教室で五、六人の小学生が放課後の掃除をしていた。机といすを全部片側の壁際に寄せてしまって、空いた床を掃き、ぞうきんがけをしてゆくのがその学校の決まりだった。少年たちは先生が検分に来てもはつきり跡が残るように、くろくに絞らないぬれぞうきんに両手をつけて、しりを高々と上げ、教室を端から端へ走って行った。一度往復するとぞうきんは真っ黒に汚れ、バケツの中はすぐ墨汁色になった。いつもはいくらゆすいでもその水が澄んでいるようになるまでふけと命じられているのだが、このころは一回床にぞうきんの跡をつければ終わりだった。進学組とそうでない組とに教室の中が分かれて以来、掃除のしかたまでがいつとはなしにそんなふうになんざいになっていた。

「エチオピア、お前の妹できないんだってな。答えられないと立ったまま泣きだしちゃうんだってな。」

ホウキを手に時々掃くまねをしながらずるを決め込んでいる副級長の長浜が言った。長浜は門のある大きな家に住む役人の息子で、やせて小柄だが鼻筋の通ったきりとした顔をしていて、いつもきちんと金ボタンの制服を着、黒い靴下に革靴を履いている少年だった。エチオピアとあだ名で呼び捨てにされた少年が自発的に進学組の課外勉強から降りて以来、彼は時折「A」「そんなふうにご意地悪く少年を嘲笑するようになっていた。聞こえないふりをして少年がぞうきんの上に四つんばいになって床を走って行くと、彼は更に言った。」

「しょうがねえよなあ、どうせお前んちのやつはみんな高等科に行くんだものな。そつだろ。」

長浜がわざと口にした高等科という一言は少年にとつてきつ過ぎた。父親に進学を拒まれて以来、いつものちゃめではしゃぎやすい性質を失って「B」としていた少年の中で何かがかつと燃えだし、少年はぞうきんを持ったまま立ち上がった。

「長浜、もう一度言ってみるよ。え、もう一度言ってみるよ。」

長浜は浅黒い端正な顔に狼狽の色を浮かべ二、三步後じさりした。(東京家政学院改)

問一「A・Bにあてはまることは次から選び、それぞれ記号で答えなさい。」

ア めけめけ イ うじうじ ウ うつつ エ ちくちく オ めくめく

問一 「少年の中で何かがかつと燃えだし」とあるが、「燃えだし」たものは何か。次から選び、記号で答えなさい。

ア 長浜にこんなふうに嘲笑される原因となった、頭の悪い妹への怒り。

イ 進学したい気持ちをおさえて、父の命令に従った、自分のふがいなさへの怒り。

ウ 自分のことだけではなく、妹まで馬鹿にした長浜への怒り。

エ 進学したいのにさせてくれなかった、父親の理解がないことへの怒り。

問三 「長浜は浅黒い端正な顔に狼狽の色を浮かべ二、三歩後じさりした」とあるが、狼狽の色を浮かべたのはなぜか三十字以内
でまとめて書きなさい。

問四 長浜の人物像について説明されている一文を文章中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。

「解答」

問一 A エ B ウ

問二 イ

問三 自分の言葉でこれほど少年が怒るとは思ってもみなかったから。

問四 長浜は門の

【】(もうほかにないかな) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「もうほかにないかな。」

大倉先生はあらためて教室を「A」見回した。私はそのとたん、「B」右手を高くさしあげた。

「あります。先生!」

心臓がとんとと波打った。五十人の級友の瞳が「C」私の上に注がれた。先生は静かに、

「須藤市太!」と、私を指名した。私は「D」息をはずませて立ち上がった。

「はい、おらとも言います」

大きく、はっきりと答えて着席すると、級友たちの爆笑が教室中につきを巻いた。私はその嘲笑に似たうず巻きの中で、はじめて自分のへまを感じた。が、一度口から出た言葉は取り返す術もない。私はまた赤くなってうつつむいていると、その時いきなり立ち上がって抗議を申し込んだ生徒がある。

「先生、おらというのは下品な言葉です。そんな言葉を使っちゃいけないと、串本先生が言われました。」

見ると、それは山本医院の二番息子の山本春美であった。山本医院は村一番の分限者で、春美は二年生の時までには級長をしていたが、三年生になってからは副級長にもしてもらえず、ひらの生徒になっていた。たぶん大倉先生がひいきをしなかつたためであろう。

少なくとも私たち生徒仲間ではそういう風評であった。級長の職権をかさにきて生徒の並び方が悪いと言って編み上げくつで「E」春美は学校中であた一人くつをはいっていた。私たちの素足をきって歩かないだけでも、皆がどんなにうれしかったか知れない。

ところで、大倉先生は春美の抗議には何の返事も与えず、そ知らぬ顔で黒板の続きに一きわ大きくおらと書き添えた。すると、春美はもう一度立って「F」青い顔のうすいくちびるを前に突き出して言った。

「先生!おらと言っではいけないのですか。」

その語調は、自分の意見を大倉先生にまで強いようとするかのように聞こえた。先生はしばらく黙ったまま、じつと春美の顔を見すえていたが、

「使っちゃよいか悪いか、そんなことをいま調べとるのじゃない。」

小さくはあるが底力のある声で答えて、分厚なくちびるをぎゅっとひきしめた。教室がしんと静まってせき一つ出なかつた。たわ

いのないもので、まったく人間というやつはたわいのないもので、さっきまで私を嘲笑していた五十人の級友は、ことごとく私の味方になったかのごとく思われた。その豹変ぶりに私はかえって憎らしさをさえ感じた。

問一 A、Cに入れることばとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア いっせいに イ ひっそりと ウ ぐるりと

エ いきなり オ おそろおそろ

問二 D「息をはずませて」とあるが、これと同じような「私」の心の動きが表現されている最も適当な箇所を、一文で抜き出しなさい。

問三 E「春美は学校中でただ一人くつをはいていた」とあるが、この説明の内容に相当する語(漢字三字)を抜き出しなさい。

問四 F「青い顔のつすいくちびるを前に突き出して」の部分から、この人物のどのような様子がうかがえるか、次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 心の中の怒りを押さえて平静をよそおっている様子

イ 心の中の得意さが隠しきれないで顔に出ている様子

ウ 心の中をつまぐ言えなくてもどかしがっている様子

エ 心の中の不満をありありと顔面に浮かべている様子

問五 「大倉先生」はどのような先生として描かれているか、次から最もよくあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

ア 生徒の発言を無視し自分自身の意見を押しつける先生
イ 生徒の感情に左右されず正しいと思うことを通す先生
ウ 生徒の役割を公平にし絶えず級長を交替させる先生
エ 生徒の間違った答えを根気強く訂正して指導する先生

(千葉県)

「解答」

問一 Aウ、Bエ、Cア

問二 心臓がとんとんと波打った

問三 分限者

問四 エ

問五 イ

【】(試験ならば即座に)次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

試験ならば即座に答えてしまえるものを、この日の(A)この質問には本当に悩まされた。答えようにも(B)私にはひとりも友達らしいものはなかったからである。

しかし、ひとりも友達がなかったと言って、私は人に馬鹿ばかにされて相手になって貰えなかったのではない。かえて私は人に畏おそれられていたのである。私は大人びた子供で学科も不出来ではなかったし、私の家は医者だということで田舎町の純朴じゆんぱくな人たちは尊敬してしてくれた。そういうわけで、小さな我々の仲間までが、私をへんに畏敬いびけいする風があった。それに私は、いつもひとりで遊んでいる無口な子供ではあったし、誰も用事もちづかの時の外には、気軽に口を利いてもくれなかったのである。それを、私はふだんはたいして不幸にも思ったのではない。しかし、今日こうして、お前の友達は誰々だと問われると、すぐに答え得る名のないのを寂しく思ったのです。そのうえ、私は先生に向かってきっぱりと友達はひとりもないと書くことは出来なかったのです。どうしてだかしりません。いろいろと考えた末で私は、教室における自分の座席のぐるり四、五人の子供の名を順々に書き並べたのです。何故かというのに、その子供たちが、(C)そういう位置に置かれた自然の関係として、自然と、最も多く私と口を利く機会が多かったからです。その時間が過ぎてしまつて、自由な時間が来た時、子供たちは今のさっきの先生の質問をさも重大な事件のように話し合っていた。彼等は皆、人々に、おれはお前のことを書いたというようなことを言い合っていた。しかし、私に向かってそんなことを言いかけた者はひとりもなかった。すると、いつものように黙っている私のところへ来て、ひとりの子供が話しかけた……

「あんだ。誰書いたんか？」

その子は快活な口調で言った。それは教室で私のすぐうしろにいた子供であった。きざくな性質で、気むすかしげな私に対しても常から最も多く口を利いていた。彼に対して私は答えた……

「おれはあんだの名を書いたんじや」

その答とともに、彼のはしゃいでいた顔は(D)一刹那せつなにがりりと変化した。しばらく無言だった彼は、やっと私に言った。……
「こらえておくれよ。のう、わあきやあんだをわすれたあつた。わあきやあ、きよつさんつれがあるさか」

三十年を経た今日、彼のその言葉を、私はそっくりとその田舎訛ちやうのまままで思い出す。そうして私は彼の「この正直な一言」(E)

今も無限の友情を見出すのです。ひょっとすると、これが私のつけた第一の友情ではないかとさえ思われるくらいです。

(秋田県)

問一 (A) 「この質問」の内容にあたる言葉を文章中から十字以内で抜き書きしなさい。

問二 (B) 「私にはひとりも友達らしいものはなかった」とあるが、それはなぜか。次から一つ選んで、符号で答えなさい。

ア 友達のいない寂しさに、仲間は気がつかなかったから

イ みんなに馬鹿にされ、相手にしてもらえなかったから

ウ 無口なうえ、医者の子として人々に畏敬されていたから

エ 学科もでき、大人びていたので仲間がいやがったから

問三 (C) 「そういう位置」とはどんなことを指しているか。文章中から見つけて九字で抜き書きしなさい。

問四 (D) 「一刹那にがりりと変化した。しばらく無言だった彼は」とあるが、このときどういふ心の変化があったと思われるか。次の文の「a」「b」にあてはまる言葉をあとのア～カから一つずつ選んで、符号で答えなさい。

「私」の答えに、「a」「自分」「私」の名を書かなかったことに「b」を感じた。

ア あわれみ イ なげき ウ 怒り

エ すまなさ オ 寂しさ カ 驚き

問五 (E)「今も無限の友情を見出す」とあるが、それはどんな友情か。次から最も適当なものを一つ選んで、符号で答えなさい。

ア ともに迷い、悩んでいく過程のなかで結ばれる友情
イ ともに謙虚さをよそおいあうなかで結ばれる友情
ウ ともに思いやる心の温かさのなかで結ばれる友情
エ ともに孤独に耐えて努力するなかで結ばれる友情

「解答」

問一 お前の友達は誰々だ

問二 ウ

問三 自分の座席のぐるり

問四 a カ b エ

問五 ウ

【】(ひよどりがわなにかかっているぞ)次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「おーい、ひよどりがわなにかかっているぞ。」

幸夫は女の子の一团のほうへ叫んだ。すると、あき子たちは川縁の細い道を駆けて、洪作たちのところへやって来た。女の子供たちはすぐわなを取り巻いた。あき子も息をつめたような表情で、ひよどりの骸を見守っていた。幸夫は体を折り曲げると、ひよどりの死体をわなから取り外す作業に取りかかった。やがて幸夫は締め木を取り除いて、ひよどりの死体を手にすると、それに目を当てながら立ち上がった。

「バタン、キュウッ」

幸夫はそんなことを言っつて、ひよどりを洪作のほうへ差し出した。洪作はそれを受け取った。ひよどりの体は氷のように冷たく、なんの張りも抵抗もなかった。世の中にこれほど柔らかい物体はないと思われるほど、それは柔らかく無力であった。

洪作は厄介なものを手渡された感じで、ただそれに目を当てていた。女の子供たちが顔を近づけてのぞぎに来た。

「これ、毛をむしって、焼いて弁当のおかずにするんだ。」

幸夫は言った。洪作は幸夫のほうにそれを返そうとしたが、幸夫は受け取らなかった。幸夫は口では人並みなことを言っていたが、明らかに自分の獲物の処置に当惑しているふうで、

「洪ちゃ、お前にやらあ。」

と、そんなことを言った。

「おら、欲しくない。」

洪作が言っつと、

「たれかにやらあ。」

幸夫は女の子供たちの顔を見渡した。洪作もいっしょに一座の女生徒たちの顔を見回したが、だれもそれを受け取ろうとする者はなかった。

洪作は突然、はげしい泣き声が起こるのを聞いた。それはなんの前触れもなしに、いきなりひとりの少女の口から出されたはげしい泣き声であった。嬰兒がときおり火でもついたようににはげしく泣き出すことがあるが、ちょうどそれに似ていた。泣いているのは

あき子であった。両の掌を顔に当て、肩を小さく波打たせながら、はげしく嗚咽していた。身も世もなく、悲嘆にくれているといった、泣き方だった。

一座の者は、突然の出来事に呆気にとられていたが、しかし、すぐあき子がなんのために泣き出したかということは理解した。そうしたこと理解させるような緊迫した空気がそこにはあり、あき子の発作をごく自然に受け取らせるようなものが、すでに用意されてあったのである。

洪作ははっとした。そしてそうしたあき子の抗議を心に痛く受け取りもし、またはなはだ迷惑にも感じた。洪作は自分がひよどりの死体を手にしていることで、あき子の非難と抗議がひたすら自分に向けられているのを感じた。

「これ返すぞ。お前のだからな。」

洪作は是が非でも、ひよどりの死体を幸夫に引き取らせようと思った。

「俺のじゃないや、洪ちやのわなだぞ。」

幸夫は二三歩後ずさりして言った。洪作は厄介なことになったと思った。洪作は一刻も早くひよどりの死体を自分の手から離したかったが、いまさらそれを地面の上に置くわけにもいかなかった。

「やらあ。」

また洪作は幸夫に言った。するとこんどは何を思ったのか、幸夫はそれを受け取ると、いきなり石でも投げるように、投球のモーションで、それを崖の向こうへ投げた。そして、

「洪ちや、行くつちや。」

そう言つと、女の子供たちの一団をそこに置いたまま歩き出した。洪作はすぐ幸夫のあとを追った。幸夫の探った解決法は必ずしも最上のもとは思われなかったが、しかし、一つの解決法であったことは事実であった。洪作は自分も早くそうすればよかったと思った。荒っぽい行為ではあったが、明らかにあき子の抗議への反発もそこにはこめられてあった。

問一 「に」あき子も息をつめたような表情で、ひよどりの骸を見守っていた」とあるが、「息をつめたような表情」をしているとき、あき子はどんなことを強く感じていると思われるか。次の1から4までのうちから最も適当なものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

- 1 幸夫たちの思いがけない成功へのねたみ
- 2 獲物が貧弱であることに對するさげすみ
- 3 目の前のひよどりの死体のむごたらしさ
- 4 まわりにいる女の子供たちのいくじなさ

問二 「一座の女生徒たちの顔を見回した」とき、洪作には何かを期待する気持ちがあったと思われるが、そこで洪作が期待したのはどんなことが。二十字程度で書きなさい。

問三 「俺のじゃないや、洪ちやのわなだぞ。」で、幸夫は、具体的には、どういうことを言いたかったのか。それを述べようとした次の文中の「ア」「イ」内にはいる最も適切なことばを、アは本文中のことばを使って十字以内で書き、イは本文中のことばをそのまま抜き出して五字以内で書きなさい。

「洪ちやのわな」ア 「だから、俺の」イ 「じゃないや。」

問四 本文中の登場人物の中に、ほんとうは困っているのに口では強がりを行っている人物がいるが、それはだれか。その人物の名前を本文中からそのまま抜き出して書きなさい。また、本文中の会話の部分で、その強がり最もよくあらわれている一文を、そのまま抜き出して書きなさい。

(香川県)

「解答」

問一 3

問二 だれかがひよどりを受け取ってくれること

問三 アにかかったひよどり、イひよどり

問四 幸夫、これ、毛をむしって、焼いて弁当のおかずにするんだ

【】（バツタ欲しい者いないか）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「バツタ欲しい者いないか。」

二人、三人近寄った。

「ちようだいな。ちようだい。」

新しく近寄った女の子が虫を見つけた男の子の後ろで言った。男の子は軽く振り返ると素直に身をかがめて提灯ていとうを左に持ち代え右手を草の間に入れた。

「バツタだよ。」

「いいからちようだい！」

男の子はすぐ立ち上がると握ったこぶしを、それ！という、ふつに女の子の前に突き出した。女の子は左の手に提げていた提灯のひもを手首に懸かけ両手で男の子のこぶしを包んだ。男の子が静かにこぶしを開く。虫は女の子の親指と人差し指の間に移っている。

「あら、鈴虫だわ。バツタじゃなくなつてよ。」と、女の子は褐色の小さい虫を見て目を輝かせた。

「鈴虫だ！ 鈴虫だ！」

子供たちはつらやましそうな声を合させた。

「鈴虫よ。鈴虫よ。」

女の子は、明るい知恵の眼をちらと虫をくれた男の子に注いでから腰こしにつるしている小さい虫かごを外してその中に虫を放した。

「鈴虫よ。」

「ああ、鈴虫だよ。」と、鈴虫を捕らえた男の子はつぶやき、虫かごを顔の真近に掲げて眺め入っている女の子に自分の五色の美しい提灯を掲げて明かりを与えてやりながらちらちらと女の子の顔を見た。

そうか？ と私は男の子が、ちょっと憎くなるとともに、初めてこの時男の子のさっきからの所作が読めた我が愚かしさを嘆いたのである。

問一 「あら、鈴虫だわ。バッタじゃなくてよ」「あ、鈴虫だよ」にこめられている気持ちを次から選びそれぞれ記号で答えなさい。

- ア 驚き・得意さ
- イ 意外さ・失望
- ウ 余裕・快感
- エ 意外さ・いぶかしさ
- オ 得意さ・軽蔑

問二 「明るい知恵の眼をちらと虫をくれた男の子に注いで」「にこめられている」「女の子」の気持ちを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が優位に立とうとする気持ち。
- イ 男の子を馬鹿にするような気持ち。
- ウ 喜びを感じながらも、軽く男の子をたしなめる気持ち。
- エ 優越感にひたろうとする気持ち。

問三 「ちょっと憎くなる」の心理を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 純粋な子どものイメージで彼らを見ていた「私」の気持ちが裏切られ、残念に思う。
- イ 子どもでありながら行動があまりにも大人びているので憎悪感を持つ。
- ウ 子どもながら計算されたあざやかな演技に一本とられたという気持ち。
- エ 特定の女の子だけを喜ばせるための演技だったと知りにくしみを感じる。

問四 この文章に描かれている「女の子」の性格を次から選び、記号で答えなさい。

ア 明朗で快活

イ 好奇心が強くうたぐり深い

ウ 冷静でつめたい

エ おとなしくひかえめ

「解答」

問一 エ ウ

問二 ウ

問三 ウ

問四 ア

【】(自分で飛び込む)次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「自分で飛び込む。」

洪作は岡の手を払って立ち上がった。そしてもう一度下をのぞいた。

海面まではさつきよりまた遠くなっている。洪作は再び座り込んだ。岡が襲いかかって来た。もみ合っているうちに洪作は中腰になった。その洪作の背を岡の手が突いた。洪作の体は飛込台から離れた。洪作は自分の体が、そうきんでも落ちていくように、ひどくみじめな固まりとなって落下していくのを感じた。何か大きな叫び声を口から出したと思うが、あとは夢中だった。小さい三角波がぶさぶさとぶつかり合っている紺青の海面が、あつという間に近づいたと思うと、洪作はその中に自分の体が突きささるのを感じた。

腹部にはげしい痛みを覚えた。それと一緒に潮の中へ沈んで行ったが、すぐまたそこからはじき返された。ひょっこりと首が海面に出た。何も見えなかった。首を出した周囲は波ばかりだった。

うわあつ！ 洪作は手をばたばたさせた。おぼれると思った。が、すぐ「」的に足だけを動かす立ち泳ぎの姿勢をとった。体は浮いていた。首を海面に出したひどく頼りない格好だが、体が浮いていることだけは確かだった。飛込台から飛び込んだはずなのに、その飛込台はどこにも見えなかった。すると、自分を海の中へ突き落とした岡の顔が、半間と離れていないすぐ近くの潮の中から浮かび上がって来た。

岡は口から海水を吐き出してから、

「岸まで泳いで行け。俺がついて行ってやる。」

「俺、だめだ。飛込台まで連れてって、おぼれる。」

洪作は必死だった。本当におぼれそうだった。

「ばか、やぐらはおめえのうしろにあらあ。」

その言葉で、洪作は夢中で体の向きを変えた。なるほど飛込台は半間と隔たっていないところにあった。洪作は、いきなり、その脚の一本につかまった。やれ、やれと思った。ここにつかまっている限りは、深い海底へ落ち込んで行く心配はなかった。

飛込台のすそにかじりついてから、恐怖感が改めて洪作をわしづかみにした。

問一 本文中の「」に最もめてはまる語を漢字二字で書きなさい。

問二 「海面までではさつきよりまた遠くになっている」には、洪作のどのような気持ちが表れているか。それを表す最も適切な単語を本文中から抜き出ささい。

問三 「洪作は自分の体が、ぞうきんでも落ちていくように、ひどくみじめな固まりとなって落下していくのを感じた」のように洪作が感じたのは、どういふことがあったからか。三十五字以上、五十字以内で答えなさい。

(静岡県)

「解答」

問一 本能

問二 恐怖感

問三 洪作は一度は自分で飛び込もうとしたが、勇気がなくて自分では飛び込めず、岡に突き落とされたから。

【】（ぼくらは先生に連れられて、臨海学校へ出かけた）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（ぼくらは先生に連れられて、臨海学校へ出かけた。太平洋の波がゆったりうねって、太陽が頭上から照りつける午後、級友たちは先生を先頭に沖を目指して泳いだ。泳げないぼくはボートで後を追った。やがて級友たちは疲れ、ボートにつかまったり、岸に向かってもどり始めたりした。しかし、先生と利彦の二人だけは、さらに沖に向かって泳ぎ続けていた。）

かれらは何に向かつて泳いでいるのか、行く手には先刻数人の級友たちがボートの周りに点在していた時と同じく、何も無い。ただ青いうねりのはるか向こう、ばやけた水平線の上に、銀色に輝く積乱雲の幾峰かがあるだけだった。

「おい。」

ぼくは大声で呼んでみた。しかしそれは二人の耳には届くはずがなく、かれらのなめらかな腕の動きは衰えの気配をみせなかった。ぼくの心は少しいらだちはじめていた。

太陽に向かつて伸び上がっている積乱雲。あれはいつもぼくの心を何か遠い思いに誘う。あの雲を見つめると、ぼくの体も心もしだいに熱くぼくなり、ぼくはそのゆるやかな動きの中で、何も思わなくなってしまう。ぼくは積乱雲が好きだ。が、今はちがう。今その雲に向かつて進んでいるのは、ぼくではなく、先生と利彦の二人だ。二人だけが潮の流れに抗して、あのばやけた水平線の上の青い空に高い姿勢をさらして光っている雲を、目指しているのだ。二人に対するねたましさの中で、ぼくのいらだちは激しくなっていく。

と、利彦の頭が波のうねりの中でひときわ高く伸び上がり、先生の頭に向かつて何か叫んだようだった。（A）ぼくはそれにこたえるように、「うおー。」と声を上げると、オールを持つ両手をはね上げて、潮流の上の光のみなぎった空間に身をおどらせていた。

夜、ぼくはみんなに取り囲まれ、昼間の無謀をからかわれた。

「勇ましいね、ネンは。全然泳げないのに飛び込むなんて。」

と先生が言った。「どうしたんだい、まったく。」

「わからん、自分で。」

ぼくは答えて笑った。が、あの時、瞬時に自分の身を襲った錯乱と、それに続く行為の意味が、自分ではよくわかっていて。

あの時、利彦と先生の体は、大きな波のつねりになぶられながら、固く結ばれていた。かれらは青いにおいをたたえて蒸れている潮の流れの中で、互いに呼び合いながら雲に向かって進んでいた。陽光の中でその親密な交情を知った時、かれらを雲からおれのほうに呼びもどすのに、ほかにどんな方法があったらう。

「ネンは陸上では、ハイジャンプでもなんでも得意だけど、水ん中じゃ全くだめなんだな。まるで屑みたいに海に浮いてるだけじゃないか。リーはその反対だし……。おまえたちはウミヒコ・ヤマヒコだよ。」

先生がそう言っただけで大きな声で笑い、しばらくしてみんなが大声で笑った。ぼくはその笑いの中で（B）だんだん気持ちが明るくなり、あの時も何かこんな感じだったなと、四月の始業式の日、先生が担任教師として初めてぼくら三Bの教室に現われた時のことを思い出していた。

「山田年彦に、山田利彦か。こいつは困ったな。」

出席簿を手にして教壇に立つたまま、先生は身長わりに小さな黒い顔に照れたような笑いを浮かべて言った。そして目玉をせわしく動かしてみんなの顔を見回していたが、やがてその目を輝かして言った。

「そっだ、音で読めばいいんだ。ネンヒコ、リーヒコ。よしこれでいこう。」

言い終わると同時に、教室じゅうの者が思わず顔を見合わせるほどの大きな声を立てて笑った。その笑いはすぐにみんなに伝染し、教室じゅうが笑い声でいっぱいになったが、ぼくは先生の。（C）白い歯並みの奥から吐き出されてくる野放図な笑い声に、なぜかほおがほてってくるのを覚え、この人は頭のよい人だなきつと、思っただけで気が晴れ晴れした。

あの時以来、ぼくは先生にネンと呼ばれ、利彦はリーと呼ばれてきたのだが、これからはまた、ヤマヒコ、ウミヒコといううちがった呼び名ももらったんだなと楽しくなり、みんなの笑い声に包まれているあいだは、昼間突然自分の心を襲ったあの何かくらくらとした気分からは、すっかり解放されていた。

問一（A）「ぼくはそれに……おどらせていた」とあるが、このような行為をとった理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア ボートに一人で取り残されているたいくつさにやりきれなかったから
イ 沖に向かって泳ぎ続ける二人のたくましさがかうらやましかったから
ウ 積乱雲を目指して泳ぐ二人の親密な交情にねたましさを感じたから
エ 潮の青いつねりに海の屑のように漂ってみたい気持ちにかられたから

問二 (B) 「だんだん気持ちが悪くなる」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア 先生のことばかりにも子供っぽい着想でおかしかったから
イ 先生が利彦とぼくを平等に認めてくれていることがわかったから
ウ みんなの笑い声で、あの時の先生の当惑した顔を思い出したから
エ もっと練習すればぼくもきつと泳げるようになると思ったから
オ みんながぼくをクラスの中心人物と認めていることがわかったから

問三 (C) 「白い歯並みの奥から吐き出されてくる野放図な笑い声」とあるが、どのような人柄を思わせるとどんな笑いか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア 落ちついた人柄を思わせる重々しい笑い
イ 明るい人柄を思わせる大らかな笑い
ウ 軽率な人柄を思わせるおどけた笑い
エ 軽薄な人柄を思わせる品のない笑い
オ 素朴な人柄を思わせる静かな笑い

問四 この文章を内容の上で二つに分けるとすれば、どこで区切ればよいか。後段のはじめの五字(ただし句読点や符号も一字と数える)を書き抜きなさい。

問五 この文章全体を通して、作者が最も描きたかったものは何か。次のア～オの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア 泳いだり談笑したりして楽しく過ごした臨海学校のようす

イ 少年たちをたくましくはぐくんでくれる雄大な海の魅力

ウ 夏の海辺で、利彦とぼくが交わしたあたたかい友情

エ 先生を慕い、心のかよいあいを得て安らぐ少年の心情

オ 少年たちの担任の先生のいかにもすぐれた人物像

(福島県)

「解答」

問一 ウ

問二 イ

問三 イ

問四 夜、ぼくは

問五 エ

【】(羊の家の近く)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

羊の家の近くに、二年上の男の子が引越してきた。中学生なみの大きな体とおとなびた顔つきを見て、おかあさんは、「こんど来た子はなんだか翁(おきな) (おじいさん) みたいだね。」と言った。羊は、おかあさんとの間では、その男の子を「翁」と呼ぶようになったが、まだその子と話をすることはなかった。

出合いは簡単だった。翁はスボンのポケットに手を入れたままゴミ箱に腰かけてしばらく観察したあと、飛んできたボールを背のびして受けとめたのを機会に、「おれにも入らしてくれないか。」と言った。六人が二塁ベースまでしかないルールで遊んでいたところだから仲間が増えるのは楽しい。出しゃばらず、投げる球が速いうえにカーブも放れる。しかも打てば庭に入らないでまっすぐに飛ぶので、素直に力の差を認めた子供たちは翁に耳を傾けた。

「あとひとりいれば二チームに分かれて試合ができるじゃないか。」

翁はそう言つと、羊の前へ大股で近づき「君も入ってくれよ。そうすりゃ都合がいいんだ。」とぶっきらぼうに誘った。それを聞いた子供たちのなかには、「羊ちゃんにはできないよ。」と言つのがいれば、「外野に立ってもらえばいいじゃないか。」と言つのもいた。

「なあ、やるつよ。」と翁はかぶせ、バットの先でコツコツと足もとの石を打ちながら、「なあやるつぜ。」ともう一度言った。そして返事を待たせてもらちがあかないと感じたらしく、調子を変えて、「よし分かった。それならちよつときで、ここに立ってバットを振ってこらん。」と言った。

羊は (A) いきなりみんなの視線にからめとられて頬が熱くなった。

「なにをぐずぐずしてんだい。ほら、こつちだよ。」

翁は肩に手をまわして連れてくると、厚紙を置いたホームベースの横に立たせてバットを握らせた。

「そんなにお尻を出っぱらさないで、もっと格好よく立ちなよ。いいかい、このボールを打つんだよ。ゆっくり投げるから、そのバットを当てるんだ。」

いざ対してみると、こんなに速くボールが飛んでくるものとは知らなかった。下手から山なりに投げられてくるボールを羊のバツ

トはかすりもしなかった。一球目、空振りして背中にまわったバットに重心をとられて倒れかけたので、二球目からは足を踏んばった。「このボールをよく見てるんだよ。眼を離しちゃいけないよ。ちゃんと丸く見えるだろう?」

四球五球とつづけるうちに羊の振るバットがいつも同じ高さなのを発見すると、翁はそこに当てるようにボールを投げた。ファール・チップだった。すかさず翁は言った。

「ほら当たった。さあ今度は思いきってかっとなばしていいよ。」

翁は辛抱強かった。仲間のひとりが、「もういいぜ、早く試合をやるうよ。」と言っても、相手を黙らせる威厳をこめて、「うん、もう少しだ。」と短く言い、ふわりふわりと繰りかえし投げた。ファール・チップまでは翁のおかげだったとしても、あとは羊の自力である。ボールをねらう眼に光が宿った。

……軟式テニスボールは円盤みたいに平たくつぶれて真正面にライナーで飛ぶと、急に丸くなってフワッと上昇し、向こうの家の栗の木に落ちた。柔らかいボールとはいえ打った瞬間の快い衝撃は、手のひらから腕を伝わって体じゅうを巡った。羊は栗の木に落ちる寸前の空中にはっと浮かんだボールが忘れられず、まだそこにあるかのように熱い眼を注いだ。

「すげえ!」

「やった、やった!」

驚いた仲間の喜びの声がボールよりも高く舞い上がり、黄色い野球帽をかぶった子は身を反らして大声で報告した。

「羊ちゃんのおばさん、羊ちゃんの振ったバットに球が当たったよ! すこい当たりだよ!」

(B) 膚のすぐ下を炎がはい、体もぶくつとひとまわり大きくなったみたいだった。見ているときには味わうこともなかった興奮である。

「それでいいんだよ。さあ、じゃんけんしてチームをつくらう。」

恥じらいと誇りと感謝が三つ巴になった羊に対し、翁は感情を節約して顔をくずしもしなかった。

問一 厚紙を置いたホームベースの横に立たせられた羊が、初めて自分からやる気を起こしたことを表している一文を、文章の中から書き抜きなさい。

問二 A「いきなりみんなの視線にからめとられて頬が熱くなった」とあるが、これは羊のどんな気持ちを表しているか。次のア、エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア うれしさと誇らしさで、じっとしていられないような気持ち。

イ とまどいと恥ずかしさで、身動きができなくなったような気持ち。

ウ 期待にこたえようと、身がひきしまり、充実した気持ち。

エ 恥ずかしさや腹立たしさと、いらいらした気持ち。

問三 (B)「膚のすぐ下を炎がはい、体もぶくつとひとまわり大きくなったみたいだった」とあるが、これは羊のどんな気持ちを表しているか。次のア、エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 恥ずかしさやうれしさを感じるとともに、ほっとして急に疲れがでたような気持ち。

イ うれしさやとまどいを感じるとともに、こういう仲間を持ったことを誇らしく思う気持ち。

ウ 恥ずかしさやうれしさを感じるとともに、自分自身を誇らしく思う気持ち。

エ 恥ずかしさやとまどいを感じるとともに、少し自信がついてきたような気持ち。

問四 この文章に登場する「翁」と呼ばれる少年は、どんな人間として描かれているか。次のア、エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア すぐれた運動能力と指導力がある。また、少しおとなびており、やや強引なところもあるが、やさしい心をもっている。

イ 豊かな心をもち、運動能力にすぐれている。また、ややあきっぱいところがあるが、やさしい心ももっている。

ウ 運動能力はやや劣るが、すぐれた指導力をもっている。また、少しおとなびており、辛抱強いところがある。

エ すぐれた運動能力をもつが、指導力はさほどでない。また、落ち着いた態度をみせ、親切なところもある。

「解答」

問一 ボールをねらう眼に光が宿った。

問二 イ

問三 ウ

問四 ア

【】（私たちの村には）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの村には、夏になると、都会の少年や少女が、毎年のように二人か三人は親たちにつれられてやってきた。彼らが、馬車から降りるのを、私たちは必ずどこかで見ていて、彼らを監視しながら、見えがくれに温泉宿までついていくのが常だった。そして彼らが、どの旅館の、どの部屋へ入ったかを見届け、（A）その少年や少女たちが村に滞在している間じゅう、私たちは興奮していた。寄るとさわる彼らのうわさはかりだった。

「さつき偵察にいったら、りんごを食べていた！」

と一人が注進すると

「うわあ！」

と他の子供たちは喚声をあげた。

「ふるへはいるらしいぞ」

そんな斥候の注進があると、私たちは村の街道を走り、溪谷の道をころがるように駆け降り、つり橋を渡り、旅館を遠巻きにした。そして、旅館の石垣をよじ登ったり、旅館の大きい椎の木に登ったりして、町からきた少年や少女たちの動静をうかがったものである。そして、彼らが少しでも、自分たちと違った遊戯をしたり、聞きなれぬ歌をうたったりすると、期せずしていつせいはやしたてたものである。それは羨望と感嘆と反抗との入り混じった不思議な感情であった。

夏が終わり、半月とか一か月とか滞在した少年や少女たちが、村を離れて帰っていく日は、私たちにはやはり寂しかったようである。そうした日の感慨は、夏休みも終わり、いよいよ秋がやってくるといふ寂しさといっしょになって、私たち山村の少年たちを、妙に孤独な感傷的な気持ちの中に落ちこませたものである。

私たちは、そうした都会の子供たちを乗せた馬車をどこまでも追いかけていった。いきをはすませ、汗を流し、無我夢中で真剣に走った。そして力つきて馬車からすてられる時は、自分の感情をそれぞれの自分の言葉に託して相手にぶっつけた。

「うおっ」と叫ぶ者もあれば、「ばかやろっ」と罵言を浴びせる者もあった。そして「またこい」とどなる者もあれば、「こんどくと石をぶっつけるぞ」と憎まれ口をたたく者もあった。しかし、それはどれもその気持ちではなかった。

素直な感情の表出であった。

そしていよいよ村に都会の子供たちがいなくなると、斥候を出す必要もなくなり、監視することもいらなくなって、少年たちはつきもののおちたような、しょんぼりした顔をした。

私は現在、私が山村の小学校に通っていたところと同じ年ごろの男の子を二人もっている。二人とも東京の小学校に通い、東京の空気を吸って生い育っている。

私はよく自分の二人の子供たちが遊んでいる姿を見守りながら、「B」と思うことがある。新宿だとか銀座だとか、東京の地名を口走り、一人で電車に乗り、一人でバスに乗っている。自分自身の少年時代とは大変な違いである。彼らは、私の眼には、私のもった恐れも、卑下も、羨望も、驚嘆もないようにみえる。

今年の夏、私は二人の男の子を自分が育った郷里の伊豆へやり、一か月をいなかで生活させた。祖父母のもとへあずけたので、二人の男の子は初めて両親のもとを離れていなかの自然の中で生活した。帰ってから二人の子供たちは、いろいろないなかの生活のことを話した。彼らは思う存分蝉をとり、カブト虫を捕らえ、魚をつり、山の斜面をすべり、谷川を泳いだようであった。食事の時など気をつけると、二人ともいなかへ行くまではもっていなかった荒々しさを、その精神にも、行動にもつけていた。言葉にもかすかにいなかのなまりがあった。

「来年いけば、ぼくたちだって負けないな」

弟の方がいって、

「負けるもんか」

兄がいった。

なんの話をしているのか分からなかったが、(C) 私には二人の少年の会話が爽快に聞こえた。何の話が訊いてみたが、二人は笑っていて答えなかった。

家に帰ってから当分の間、二人の話題は川のことばかりで、その流れの早さや深さが、専ら話題の中心になっていた。

私が少年時代に町や町の少年少女たちに頭が上がらなかったように、私の子供たちは、田舎の自然やその中を駆け廻っている少年少女たちに、やはり同じようなひげめを感じているのかも知れなかった。

(北海道)

問一 (A) 「その少年や少女たちが……彼らのつわさばかりだった」とあるが、潜在中の都会の少年少女たちに対する私たちの気持ちを最もよく表している一文を文中から書き抜きなさい。

問二 「B」に当てはまる最も適当なものを次から一つ選び、符号で答えなさい。

A なんと好奇心の強い子供たちであろうか

I なんと不思議な子供たちであろうか

ウ なんと孤独な子供たちであろうか

E なんと幸せな子供たちであろうか

問三 (C) 「私には……爽快に聞こえた」とありますが、私の気持ちの説明として最も適当なものを次から一つ選び、符号で答えなさい。

A 二人の少年は、私の少年時代と同じように未知なものになじめず、いなかでの生活にも溶けこめなかったようではあるが、いなかまりのことばを使うなどその生活を楽しそうに回想していることに安心している。

I 二人の少年が、豊かな自然の中でたくましく成長しているいなかの子供たちに対して無関心をよそおいながらも、彼らに負けまいとしてひそかに励まし合っているようすをことのほかほほえましく思っている。

ウ 二人の少年が心身ともにたくましくなって帰ってきたことに満足するとともに、少年時代の私が過ごしたいいなかでの自由で楽しい生活を私と同じように経験してきた子供たちに対してこころよく感じている。

E 二人の少年が心身ともにたくましくなって帰ってきたことに満足し、しかも、子供たちが私の少年時代と異なっているのだから、いなかでも見知らぬ人や土地に溶けこんでいるようすに好感をもっている。

「解答」

問一 それは羨望と感嘆と反抗との入り混じった不思議な感情であった。

問二 エ

問三 イ

【】（遠くから見ると診療所は）

次の文章は、父親から診療所の手伝いを言いつけられた小学生の正が、友人の啓之といっしょに出かけていき、薪運びを手伝う場面である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

遠くから見ると診療所は、町の映画館でみた「ドラキユラ」の西洋館のようだった。朽ちた原木の門から玄関までは両わきに桜がおおって、二人は青い光の中を進んでいった。道はわだちを残して、芝生がまだ柔らかくスックに余るほどだった。互いの顔が照り返しに輝いて、まだら蛇に似たくねった動きをして歯を出して笑つと歯までが染まった。

「いいね。」

「うん、いいとこだえ。」

笑いの中から弾みが生まれて、二人はその気持ちで踏み入った。かつての結核療養所だけあって庭は広かった。おおばこやすげなどの雑草がところかまわず乱れていた。そこから木々の間に見る村は、かすみの中に、いつまでもゆつたりと沈み込んでいるかと思われた。

しばらくすると、女先生が医者特有のにおいをさせて来て、男のようにかすれた口調で言った。

「御苦労さん、薪を運んでもらうからね。しっかりやってよ。」

「はいっ……」

二人はきつぱりと返事をしたが、何かさせられた気がしてこそばゆかった。女先生は、正と啓之の坊主頭を大きなあつたかい手でさすってから、裏手のくぬぎ林の見える所まで登っていった。

「あの小屋からね、しよいこもあるから頼むよ。」

そう言つて、もう一度念を押すように肩をたたいた。

一冬を越した薪は、かなり乾いていて無理をすれば一度に二束は運べた。競争したり、ときどき休んで話したりしながら昼前には終わった。

「肩がぎしぎしなるやあ……」

正たちは、右肩をぐるぐるまわして山すその道を下りながら腫を輝かした。少し風が出てくると、汗ばんだ肌にはこちよかった。

「何かくれるだろうな。」

かたわらの茎の長い草を抜いて、正のしりをたたきながら啓之は言った。

「チャンバラやつか……。」

疲れよりも 仕事を終えた爽快感が二人の体を軽くしていた。後先になってはしゃいで下ると、テラスの椅子で女先生があふれるような笑みを見せていた。

「さあ、コーヒーでも飲んで。」

二人は鼻を抜けるはじめての香ばしさに引き寄せられていた。

(宮城県)

問一 「青い光の中」を歩いていった二人の少年のようすを表した文として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 二人は芝生の上を、桜若葉に吹く風を全身に受けながら歩いていった。

イ 二人は青空のもとを、桜の花の香りに全身を包まれながら歩いていった。

ウ 二人は芝生の上を、桜若葉の照り返しで全身を染めながら歩いていった。

エ 二人は青空のもとを、桜の花びらを全身に受けながら歩いていった。

問二 「笑いの中から弾みが生まれて、二人はその気持ちで踏み入った」から読みとれる二人の少年の気持ちの変化を、次のような文で表したい。「A」、「B」に入る適当なことはを、それぞれあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

はじめ診療所を見たとき、少年たちは「A」を感じたが、二人の笑いがきつかけとなって、「B」になって庭の中に入っていった。

「A」 ア 気おくれ イ 後ろめたさ ウ あせり エ 気まずさ

「B」 ア 豊かな気持ち イ 軽やかな気持ち ウ のどかな気持ち エ おだやかな気持ち

問三 「何かさせられた気がしてこそばゆかった」とあるが、このときの二人の少年の気持ちを述べたものとして適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 女先生を驚かせるような元気な返事をしたことを恥ずかしく思った。
イ さそいこまれるままに軽々しい返事をしたことをきまり悪く思った。
ウ 女先生を感心させようとはつきり返事をしたことを誇らしく思った。
エ 思わずすなおな返事をしたことをなんとなくうれしく思った。

問四 「仕事を終えた爽快感」とあるが、文章中に描かれている二人の少年の様子のが、この気持ちが最もよく表れている部分を一文で抜き出し、初めと終わりの三字を書きなさい。（句読点は含まない）

問五 次の文の「」を補って、二人の少年に対する女先生の心情が表れている文になるようにしたい。「A」、「B」に入る適切なことばをそれぞれ五字以内で書きなさい。

仕事の前には二人の少年を「A」、仕事からもどってきたときには「B」迎えている。

「解答」

問一 ウ

問二 A ア B イ

問三 エ

問四 正たちくかした

問五 A はげまし B あたたかく

【】(ぼくの画塾に入ってきた太郎は)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(ぼくの画塾に入ってきた太郎は絵をかこうとせず、エビガニにだけ関心を示した。そこである日、川原に連れ出し、カニを追ったリコイを見たりして遊んだ。)

川原へいった日から太郎とぼくとのあいだには細い道がついた。彼はアトリエにやってくると、ぼくにびったり体をよせて、グワッシユを練るぼくの手もとをじっと眺めた。

(略)ぼくはアトリエの床に足をなげだしてすわり、まわりに子供を集めて、ヘラをうごかしながら話をしてやるのである。太郎はぼくのしゃべる動物や昆虫や馬鹿やひょうきん者の話に耳をかたむけ、よほどおもしろいと顔をあげて、そっと笑った。形のよい鼻孔のなかで鳴る小さな息の首や、さきの透明な白い歯のあいだからもれる清潔な体温など、太郎の体を皮膚にひしひしと感じながら、ぼくは彼と何度も逃げたコイのことを話しあった。

「水のなかではね、物はじっさいより大きくみえるんだよ。だけど、あいつはほんとに大きかったんだ。そうでなきゃ、藻があんなにゆれるはずがないもんな。きつとあれはあの池の主だったんだよ。」

「……………」太郎はぼくの話がおわると澄んだ眼にうつとりした光をつかべた。それをみてぼくは巨大な魚が森にむかって彼の眼の内側をゆっくりよぎっていくのを感じた。ぼくは話をしながら彼の眼のなかの明暗や濃淡をさぐって、何度もそうした交感の瞬間を味わった。そうやってぼくは彼から(A)旅券を発行してもらったのだ。画塾には二十人ほどの子供がやってくるが、そのひとりひとりがぼくにむかって自分専用の言葉、像、まなざし、表情を送ってよこす。その暗号を解して、たくみに使いわけなければぼくは旅行できないのだ。他人のものはぜったい通用を許してもらえないのだ。人形の王国を支配している子には、ぼくはときどき内閣の勢力関係を聞いてやらねばならない。この子は自分の持っているさまざまなる人形で政府をつくって遊んでいるのである。

「いまはタヌキかい？」

「いや、象だよ。」

「ダルマは隠退したの？」

「うん、こごととこちよっと人気がないね。あれは階段から落ちて骨が折れたんだよ。」

「惜しい奴なんだがね。」

さいづち頭がアトリエに出入りするとき、なんとなくぼくはそんな挨拶を交わしあって完全な了解を感じている。旅券をくれたからまもなく、太郎はぼくの話のあいだに、とつぜん。

「先生、紙。」

「いいですようになった。それが度かさなって、ぼくが、」

「おや、また便所？」

と(B)からかうと、

「やだな、先生ったら。画を描くんだよ。」

そんな軽口をきいて彼はぼくから紙や筆や絵の具皿をとっていくようになった。

(神奈川県)

問一 (A)「旅券を発行してもらった」というのは、「ぼく」が太郎からどうしてもらったことを言っているのか。次の中から最も適しているものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 絵画を教える喜びをしみじみと味わわせてもらったこと。

イ 子供の世界に入っていくきっかけを作ってもらったこと。

ウ 魚類の生態のおもしろさを共に楽しませてもらったこと。

エ スケッチ旅行のための乗車券を手に入れてもらったこと。

問一 Bの「からかつ」ということをしたのは、「ぼく」にどのような気持ちがあったからであろうか。次の中から最も適しているものを一つ選び、符号で答えなさい。

- ア 太郎のかく絵がどれもひどく幼稚なので悲しかったから。
- イ 太郎に絵をかく意欲のわいてきたのがうれしかったから。
- ウ 太郎に日常生活のユーモアの必要性を教えたかったから。
- エ 太郎の紙のむだづかいをそれとなく注意したかったから。

問三 「太郎」の性格は、画塾に入ってからどのように変わってきているか。次の中から最も適しているものを一つ選び、符号で答えなさい。

- ア よくしつけられた冷静な性格が、乱暴でだらしない方向へと変わってきている。
- イ ひとりよがりの気ままな性格が、おしゃべりで軽率な方向へと変わってきている。
- ウ 内気で他人にうちとけにくい性格が、明朗で開放的な方向へと変わってきている。
- エ 持ちまえのおおらかな性格が、穏やかで人間味のある方向へと変わってきている。

「解答」

問一 イ

問二 イ

問三 ウ

【】(子どもたち全員と学校の裏手の雑木山に出かけました)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもたち全員と学校の裏手の雑木山に出かけました。日かげの沢にはまだ汚れた雪が残っていましたが、陽だまりは枯れ葉が柔らかな熱を含み、そこを歩くときに頬に暖かみを送ってきます。子どもたちは歓声をあげ、木に登ったり、蔓にぶらさがったり、カタクリを摘んだりしました。教室にいるときは別人のようでした。(第一場面)

枯れ草に腰をおろしていると、六年生らしい女の子が寄ってきました。頬に赤い痣のあるひっそりとした感じの子でした。女の子はだまってわたしのそばにすわり、しばらく枯れ草を引き抜いては編んでいましたが、やがて「A」言いました。

「こんどの先生ア、男先生も女コ先生も、いい先生だね。」

「……………」

わたしは とつさにはこたえることができませんでした。今の今まで村や分校や子どもたちをよく思っていなかったような気がしました。わたしは小さな狼狽を押し隠しながら、女の子の名前や家の仕事のことや兄弟のことを聞きました。里枝というその女の子は、一言一言、恥ずかしがるように言い淀みながら自分のことを語りました。誰の強い方言は、わたしには耳ざわりなはずでしたが、おとなしい里枝の口からそれが洩れると、素直にわたしのからだの中に溶けこんでいくようでした。(第二場面)

先生！と「B」後ろから背中をたたかれ、わたしは思わず悲鳴をあげました。どんぐり眼の一年生の明が、眼をいつそう大きく見開き、息をはずませていました。「先生ア、おらア卒業するまで」「C」。「……………」

「どうして?」「ほだって……………」

明は後ろをふりかえりました。明をからかったらしい背の大きい男の子が朴の木によりかかり、照れ笑いを浮かべてこっちを見ていました。「兼吉君がな。ハイカラ先生などア一年で分校なんかやめて、すぐ町サ帰るって……………」。「先生はハイカラじゃないよ。」「ハイカラださア、金色の眼鏡かけてエ。」

わたしは思わず笑いました。女学校の卒業記念に、役場の書記をしていた父が買ってくれた旧式の金縁の眼鏡を、わたしは大事に使い続けていたのでした。(第三場面)

(鳥取県)

問一 「A」「B」にあてはまる最も適当なことを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 力のかぎり イ 堂々と ウ ぼつりと

エ せわしく オ だしめけに

問二 「とっさにはこたえることができませんでした。」とあるが、なぜか。最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

ア あまりにもうれしくなり、感動が強まって、ことばにならなかったから。

イ 女の子の好意的なことばに外れるような自分に気づいて、動揺したから。

ウ よく思っていなかったことが恥ずかしくなり、返すことばを選んでいたら。

エ 女の子の態度から考えて、少し間をおいたほうがいいだろうと思ったから。

問三 「C」にあてはまる最も適当なことを(共通語)を次から選んで、記号で答えなさい。

ア いたいね イ いてやるよ ウ いるはずないよ エ いてくれるね

問四 わたしと子どもたちの心のふれ合いを象徴するようなことばが、第一場面にある。そのことばをぬき出して、四字で書きなさい。

問五 子どもに対するわたしのうちとけた気持ちが、態度に表れているところが第三場面にある。その部分をぬき出して、八字で書きなさい。(句読点は除く。)

問六 作者は、子どもたちのどんな姿を何を通して描いているか。第二・第三場面を比較して、六十字以上七十字以内で説明しなさい。記述のしかたは、「初めに、……次に、……」のかたちとする。(句読点は一字に数える。)

「解答」

問一 A ウ B オ

問二 イ

問三 エ

問四 陽だまり

問五 思わず笑いました

問六 初めに、高学年の女の子里枝のおとなしい姿を、行動、態度、会話を通して描き、次に、一年生の男の子明の活発な姿を、会話や行動を通して描いている。

【】(冬の、ある土曜日の夕方です)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

冬の、ある土曜日の夕方です。毎日の停電に慣れて、早めの夕食をすますと、外のあかりをおしむように、子供たちは箸を置くなり、てんでにまた出かけようとしています。中学一年生の純は帽子をかぶり、その妹のシズはナフトルを持ち、千七の健介はもう門の外に声がしていました。ちやぶだいの上を片づけていたお母さんは、あわてたような「ア」「口で、純に呼びかけました。

「ちよっと、ちよっと純、どこへ行くの。」

純はとがめられたとも思ったのか、少し口「イ」て、ちらりと茶ダンスの上の時計を見、

「四時だよまだ、それに、今日は土曜日じゃないか。」

お母さんは一緒に時計の方を見ながら、

「もちろん土曜日さ、だから行ってもいいけどね早く帰ってきてね。」

「うん、ぼく甲文堂へ行くだけだよ。三十分もしたら帰らあ。」

それを聞くとシズが口を「ウ」ました。

「連れてって。兄ちゃんが甲文堂へ行つて三十分で帰るもんか。シズも行くよ、だから。」

すぐにお母さんの肩を持ちながら、しかし自分も本屋へついて行きたいシズは、うまく純にからみつこうとします。

「じゃあ、やめたあつと。シズなんて、うるさくて。」

「ずるいや、ずるいや。兄ちゃんなんて、いつだって一人でいいことするんだよ。」

「シズも行けばいいじゃないか、そんなら。」

「だって、一人で行くとお父さんの小父さん、変な顔するんだよ。」

「そんな顔なんか、見なければいいじゃないか。」

「見えるんだよ。買うときは、毎度ありがとつてニコニコしてるけどさ、買わないで見ていると、じろじろにじろじろだよ。」

「じゃあ行かなきゃいい。」

「だって、読みたいんだよ。ハイジがどうなったか、心配なんだもん。」

シズはある少女雑誌に連載されている「アルプスの少女」を、雑誌を買わないで、毎月本屋の店さきで立ち読みをしていました。ハイジはその物語の中に出てくる少女です。

「ね、連れてってよ、兄ちゃん。」

「いやだよ、一人で行きな。」

純は帽子をとり、ちゃぶだいの前にどかんと、力を入れて座りました。

「いじわる、おぼえてろ」

シズもそのわきにくつついて座りました。けんかをふっかけようとシズは思ったのですが、まむかいに、火ばちをかかえこむようにして座っているお父さんの顔を見ると、急に思いなおしてお父さんのそばへ立って行きました。食事中から、むっとりと考え込んでいるおとうさんの顔をのぞきこむようにして、話しかけました。

「お父さん。」

「う。」

「」「」

純がけらけらと笑い、お母さんがぶつと吹き出し、それで何となく重たかったお父さんのこきげんが、雲が散っていくようにはれってきました。しかしあたりはもううす暗くなりかけています。

問一 「ア」「イ」「ウ」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「ア」「イ」に適切な形容詞の語幹を書き入れて、「……口」という名詞にしなさい。

(2) 「口を」の後に続けて、人物の表情や動作を表すために、次に示す動詞の中から適当なものを選び、活用させて、「ア」「イ」それぞれに書き入れよ。同じものを使ってはいけない。

すへすへす とがらす しくむ 慎む 出す 割る

問二 「門の外に声がしていました。」を健介の動作としての表現に改めよ。

問三 「シズもついていくよ、だから。」のような表現技法をなんとというか。次のうちから選びなさい。

ア 反語法 イ 倒置法 ウ 省略法 エ 誇張法

問四 「」を補う会話として最も適当なものを、次のアからエまでのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 兄ちゃんとけんかしてごめんなさい。

イ 考えこんじゃってどうしたの。

ウ お父さん、連れてってよ。

エ ごきげん、いかがですか。

問五 この文章から読みとれるものを、次のアからエまでのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 生活に追われて、とげとげしくなりがちな家庭である。

イ しつけのきびしい家庭で、子供たちはおどおどしている。

ウ 母はきさくで気どりのない人柄である。

エ 純はいつもシズに言い負かされる気弱な少年である。

オ シズは甘えんぼうだが機転のきくおしゃまな女の子である。

(大分県)

「解答」

問一 (1)早 (2)イとがらし ウ 出し

問二 門の外に出ていました

問三 イ

問四 エ

問五 オ

【】(日曜だった。碧郎は朝から出かけて)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日曜だった。碧郎は朝から出かけて昼食にはいかなかった。手をつけない彼のお膳(へぜん)を気まずくしまっけてひと休みしていると、裏口がそつとあいた。直感で、はばかりあるものが来たなど、げんにはわかった。碧郎の小学校のときの友だちの一人が、「おねえさん、来てください今すぐいっしょに」と急いでいる。

「驚いちゃいけない、碧郎君が馬から落ちてね、いま大騒ぎ。(A)とにかく……」

「……死んだの?」

「いえ、馬のほうなんだ。碧郎君もあちこち擦(か)傷(いた)したけど。おとつさんじゃなく、ねえさんと呼んできてくれて言うんだ。」
げんは台所の財布(さいふ)をねじこむと駆けた。母に、「ちよつといっけてきます」とだけ残して。

土手の上の人だかりがして、まず肝(かん)がつぶれた。葉桜(はなざくら)へきらきらと陽(ひ)が光(ひ)っている。土手下の川とのあいだのわずかの空き地へ馬が横倒しになつてもがき、人々がいた。碧郎がいた。新調(しんてう)の濃緑(のうりく)の乗馬(じやうば)ズボン(ズボン)は粹(い)で、長靴(ながぐつ)はてらてらとしている。彼は青(あ)ざめた汗を流(なが)していた。白いシャツは裂(は)けて泥(どろ)まみれだった。もう少しで川へ落ちよつといつあぶないところで、脚(あし)をどつかしてしまつた馬(うま)は、跳(は)ねかえり跳(は)ねかえりしても立てないで嘸(な)いている。どうするためなのか二間(にけん)はしが斜(かた)めに置いてあるし、丸太(まると)も来ていた。借馬屋(かよひや)のおやじは馬(うま)子を連(つ)れていて、「一人(ひとり)ともつらつらしてはどなつてゐる。どうやら馬(うま)にロープ(ロープ)をかけよつといつこつらしい。げんはちよつと踏みきるよつな思(おも)いで、見物(けんぶつ)の輪(りん)から出て降りていった。

「あ、ねえさん、ごめんなさい。おれ、この馬、かわいそつなことをして……」彼はさあと涙(なみだ)をあふれさせた。

「なんだいあんたか。親(おや)はどうした。親(おや)は。」

げんはにゆつと強(つよ)くなつた。「親(おや)は親(おや)であつたにしましよつ。馬(うま)、たすかりますか。」

「なんだと……馬(うま)たすかるかだつ?」向(む)こつもにゆつと強(つよ)みがはみ出したのがわかる。

「あたし、馬(うま)たすけたいんです。獣医(じゆうい)さんどこです?犬(いぬ)の先生(せんせい)で間に合(あ)つんですか?おじさん、ごめんなさい、早く先生(せんせい)のところ教えてください。みんな私(わたし)やりますから。」

げんは犬医(いぬい)者(しや)へ碧郎(へいろう)を走(は)らせた。おやじはだいぶしすまつた。馬(うま)は横腹(よこはら)で息(いき)をし、口のまわりが、つばきだかよだれだかであぬれて

いた。命に別条はなさそうだが、もの役に立つかどうかあやぶまれた。(B)おやじの怒りには計算があることがむきだしになっていた。げんは自分の手に負えないことを悟って、そう悟れば話は単純になってくる。父は金を取られるのである。碧郎は馬をかわいそうなことにしたと言って泣いたのだ。げんはすっかりと弟を信じた。馬に乗ることは是非はたださなくてはならないが、馬をかわいそうがっていた心情は(C)げんの胸にこたえた。弟はしようのないやつではあるけれど、彼のなかには生きものへの優しい愛があると信じれば、父に金を出させるのはやむを得ないなりゆきだとも思えた。

(幸田文)「おとつと」による

(茨城県)

問一 (A)「とにかく」の……の部分にはどのようなことが省かれているか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア すぐ来てください。

イ 裏口をしめてください。

ウ おちついてください。

エ おとうさんを呼んでください。

問二 (B)「おやじの怒りには計算がある」とあるが、どのような計算があるのか。二十字以内にまとめて書きなさい。

問三 (C)「げんの胸にこたえた」とあるが、なぜ胸にこたえたのか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 弟の優しい心を守るために、父と金のことと争わなければならなくなるかもしれないと考えて、気が重くなったから。
イ 借馬屋のおやじのきびしい怒りから、優しい心の持ち主である弟を助けてやる方法が、急には思いつかなかったから。
ウ 困ったやつだと思っていた弟の、馬を思って泣く姿をまのあたりにし、その素直な優しさをはつきり見てとったから。
エ 弟の優しい心の中に、あまりにも弱々しい一面のあることを知って、期待をうらぎられたような気持ちになったから。

「解答」

問一 ア

問二 なるべし多くの金を田村はかきついでする計算

問三 ウ

・

【】(私は、世にも珍しいことをやっていたことがある)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は、世にも珍しいことをやっていたことがある。額で一匹のはえをつかまえたのだ。

額にとまった一匹のはえ、そいつを追おうというはつきりした気持ちでもなく、私は肩をぐっとつり上げた。すると、急に私の額で、騒ぎが起こった。私のその動作によって(A)「額にできたしわが、はえの足をしっかりととらえたのだ。はえは、何本か知らぬが、とにかく足で私の額につながれ、無駄に大げさにはねをぶんぶんいわせている。その狼狼のさまは手にとる」とくた。

「おい、だれか来てくれ」私は、眉を思いきりつり上げ額にしわをよせたとばけた顔のまま大声を出した。中学一年生の長男が、何事かという顔でやって来た。

「おでこにはえが居るだろう、とっておくれ」

「だって、とれませんよ、はえ叩きで叩いちゃいけないでしょう?」

「手で、すぐとれるよ、逃げられないだから」「B」の長男の指先が、難なくはえをつかまえた。

「どうだ、えらいだろう、おでこではえをつかまえるなんて、だれにだって、できやしない、空前絶後の事件かもしれないぞ」

(C)「へえ、驚いたな」と長男は、自分の額にしわを寄せ、片手でそこを撫でている。

「君なんかにできるものか」私はニヤニヤしながら、片手にはえを大事そうにつまみ片手で額を撫でている長男を見た。彼は十三、大柄で健康そのものだ。ろくにしわなんかよりはしない。私の額のしわは、もう深い。そして、額はかりではない。

「なにになに? どうしたの?」みんな次の部屋からやって来た。そして、長男の報告で、いっせいにゲラゲラ笑い出した。

「わ、面白いな」と七つの二女まで生意気に笑っている。みんなが気をそらえたように、それぞれの額を撫でるのを見ていた私が、
「もついい、あっちへ行け」と言った。(D)少し不機嫌になってきたのだ。

(注) 狼狼=うろたえ騒ぐこと。

問一 (A)「額にできたしわが、はえの足をしっかりととらえたのだ」という表現から感じとれる私(作者)の気持ちとして、最も適当なものを次のア～エから選び、符号で答えなさい。

ア はえをつかまえることができ、喜んでいる。
イ はえをつかまえたのが意外なことであり、驚いている。
ウ つかまえたはえを逃がすまいとして、必死になっている。
エ 額にできたしわが深いことに気づき、面白がっている。

問二 「B」にはいる最も適当なものを、次のア～エから選び、符号で答えなさい。

ア 半信半疑

イ 自問自答

ウ 一進一退

エ 四苦八苦

問三 (C)「へえ、驚いたな」という長男のことは、私(作者)のどのような気持ちをいっそう強めたか、答えなさい。

問四 私(作者)が(D)「少し不機嫌になってきた」のはなぜか、その理由をわかりやすく説明しなさい。

(山口県)

「解答」

問一 イ

問二 ア

問三 得意な気持ち

問四 長男の健康なからだに比べ、自分の体がすっかり衰えていることに気づき、家族の者がみんな、額をなでながら笑っているの

を見て、その衰えを思う気持ちがいっっその強まったから。

【】(ちよつとした感情の衝突がこじれて)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ちよつとした感情の衝突がこじれて、妻と互いに口をきかぬままに二日が過ぎて、具合の悪いことにカンの十三歳の誕生日を迎えてしまった。

春休みも終わりに近いし、この日家族の小旅行をしようかというのが、早くからの(A)約束であった。カンはそれを楽しみにしていて、昨日も私にどこに連れて行ってくれるのかと尋ねたのに、あいまいな返事しかしなかった。妻との感情がこじれたまま、家族旅行という気分になれるものではない。

子供らにしてみればとんだとぼちちりで、さすがに昨夜の内には 私たちの険悪な雲行きを悟ったふうで、もう今朝はカンも旅行のことは言い出さない。ケンも黙ってテニスの練習に出て行った。よほどケンを引き止めようかと迷ったが、なにか私の意識がぎこちなく縛られてしまったようで、その簡単な言葉を口にできなかった。

皮肉なまでの好天である。カンは黙っていればいるほどに心苦しくなる。昼食でケンが帰って来たときに、ようやく私は心を決めて、カンを呼んだ。

「おい、おかさんに旅行の用意をしろといえ。午後一時半の汽車で出かけるぞ。」

これは決してこちらからの和解申し入れではないぞというつもりで、カンを使者に立てた。すぐにカンは戻って来た。

「おかさんは」「と言ったよ。」

ちくしょう、「こちらの弱気を読まれたな。」

問一 (A)「約束」とはどんな約束であったと思われるか。二十五字以内で答えなさい。

問二 「私たちの険悪な雲行」の事柄は、具体的にどんなかたちとして現れているか。文章中から十字以内で書き抜きなさい。

問三 「皮肉なまでの好天である」は、なぜ「皮肉」なのか。その理由を説明しなさい。

問四 「カンが黙っていればいるほどに心苦しくなる」で、「私」はなぜ「心苦しくなる」のか。次のア～エから最も近いものを選んで、記号で答えなさい。

ア カンが母親とばかり話をして、自分を無視しているから。

イ カンが何を聞いても答えず、悲しんでいるのがわかるから。

ウ カンが不満をじっとこらえているのがわかるから。

エ カンが黙りこんで反抗的な態度をとっているから。

問五 文中の「 」に入る最も適切な言葉を次から選んで、記号で答えなさい。

ア 行きたくない イ 用意ができてる

ウ 今からでは無理 エ 勝手にしなさい

問六 「こちらの弱気」の最も適切な例を、本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

(山口)

「解答」

問一 カンの十三歳の誕生日に家族で小旅行をする約束

問二 互いに口をきかぬ

問三 家族旅行に行けそうもないのに、すばらしい行楽日になったから。

問四 ウ

問五 イ

問六 よほどケンを引き止めようかと迷った。

【】(中はどういひき目にみても)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中はどういひき目にみても、四分の入りである。女の子を連れたいおじいさん、学校をさぼっているらしい小学生、若い男たち、和服の首にナイロンのスカーフをまきつけたおかみさん、といった顔ぶれである。ベレーをかぶった絵かきらしいしゃれた身なりの男もいないではない。

この「かたばみ頭巾」というのはテレビで大当りをとったものなのだろうだが、教授は話の筋はよくわからない。いやわからないことはないのだが、芝居を見ているよりも、隣の若い男が、手にもった風呂敷包みを開けて握り飯を食べだしたほうに気をとられていた。かたばみ模様を散らした覆面の武士が、ばったばったと人を斬り殺す度に、彼はかじりかけの握り飯を手にしたまま、(A)茫然と舞台のほうを眺めていた。

何回か切り合いの場面があったので、その度に教授は熱心に舞台の上を探したが、どれが秋穂が証拠をつかむことは出来なかった。「とにかくテレビなんかだつて、多い時は、三十分のドラマで五回くらい斬られるんですからね」という秋穂の言葉の率から推定すれば、もう何度か彼は舞台の上で殺られているはずである。その度に似たのは見つけたが、必ず秋穂に違いないという特徴は認め難い。

「おのこやもむなしかるべき万世に語りつくべき名はたてずして」という歌を越は思い出していた。少々恥しい思いもないうたが、彼はこの歌が好きなのであった。その気概、その誇らしさが超源一郎のこの世で最も理解しやすい情緒であり、夢であった。しかし、(B)息子はおのこではなかった。彼は男であった。(a)「彼はいつそう深く椅子に身を埋めて、雨傘の柄を握りしめていた。

その時、舞台はかたばみ頭巾の大見栄で幕になった。やれやれとつやら終るらしい。越が体をのばした時である。まだ暗い場内の人もまばらな二階席に、ぱっとスポットライトがあてられた。つい十秒ほど前に舞台にいたかたばみ頭巾が二階席の左翼の手すりにゆうつと片足をかけてかまえていた。吹きかえに違いないのだが、かたばみ頭巾がいかにも神出鬼没のように見えて子供たちは黄色い声をあげて喜んだ。

すると二階のかたばみ頭巾は、ヤツと気合をかける手すりを起えて、ひらりと花道にとびおりた。あとは一目散に花道を楽屋へ。

その姿が消えたと思っや、スポットは再び、今度は右翼の照明ボックスに現われたかたばみ頭巾をうつし出した。この再度にわたる替玉のトリックはしかし大受けに受けた。照明ボックスのかたばみ頭巾は、またもや、「やッ！」と声をかけ、そのとたんに、ライトは消えてかたばみ頭巾の姿も見えなくなった。(b)「」

二階からとび下りたのが秋穂で照明ボックスにいたのは、酒匂基次に違いなかった。そういえば秋穂が、二人ともかたばみ頭巾になるのだ、といていたのを教授は思い出した。教授はテレビなどみたことがなかったので、二人は何か同じ主義主張をもったさむらいのグループになるのだとばかり、早のみこみしていた。しかし二人は主役の尾上なんとかが扮するかたばみ頭巾の影武者なのであった。世の中で、自分しか出来ないという技術と仕事をもて、とねがった教授に対する、それが息子の答えであった。

教授はいっそう烈しい降りになった(c)戸外へ力なく出て行った。(c)「」
「何とか生きては行くだろう。息子らも」彼はつぶやいた。(d)「」

(城北高)

問一 (A)「茫然と舞台のほうを眺めていた」のはなぜか。次のア、エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 舞台のつくりがすばらしかったから。

イ 舞台の演技にひきこまれたから。

ウ 舞台の様子が恐ろしかったから。

エ、舞台に秋穂が現われたから。

問二 (B)「息子はおのこではなかった」とはどういうことか。次のア、エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 息子は自分の息子のように思われなかったということ。

イ 息子は自分の考えているにまさる男ではなかったということ。

ウ 息子は自分の考えているような男らしい男ではなかったということ。

エ 息子は自分の考えているに劣らない男ではなかったということ。

問三 (C) 「戸外へ力なく出て行った」のはなぜか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 雨が烈しく降っていて、うっとうしかったから

イ 芝居が思ったほど面白いものでなかったから

ウ 自分が年老いてしまったから

エ 息子が自分の思ったような仕事についていなかったから

問四 この文章の主人公越源一郎は、なぜこの「かたばみ頭巾」という芝居を見に来たのか、十五字以内で書きなさい。

問五 「彼はこの歌が好きなのであった。その気概、その誇らしさが越源一郎のこの世で最も理解しやすい情緒であり、夢であった」、 「彼はつぶやいた」について、次の問に答えなさい。

1 この部分から越源一郎の性格がわかると思うが、その越が息子に期待したことを、具体的に表している部分を、二十五字以内でさがして、その部分の最初の三字を抜き出しなさい。

2、この「つぶやいた」ことから、その時の「彼」の気持ちができるが、その気持ちとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選んで、符号で答えなさい。

ア 自分の期待通りにならなかったことを嘆きつつも、息子の将来に期待を棄ててはいない。

イ 自分の期待通りにならなかったことを嘆き、息子にがっかりしている。

ウ 自分の期待通りにはならなかったが、内心は安心し、息子がやりがいのある仕事についていることを認めている。

エ 自分の期待通りではあったが、息子を認めることをてれかくしにこまかしている。

問六 「 「 (a) (b) (c) (d) にあてはまる文を、次のア～エのうちから選んで、符号で答えなさい。

ア 越はのるのると立ち上った。

イ 彼は背をかかめ、水たまりを避けて歩き続けた。

ウ 越は舞台を心にとめてはいなかった。

エ 彼の心はどうにも慰められようがなかった。

「解答」

問一 イ

問二 ウ

問三 エ

問四 息子の仕事ぶりが見たかったから

問五 1 世の中 2 ア

問六 (a)ウ (b)ア (c)エ (d)イ

【】(夜明けからかけすが鳴き騒いでいる)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夜明けからかけすが鳴き騒いでいる。雨戸をあけると、目の前の松の下枝から飛び立ったが、またもどつて来たらしく、朝飯の時は羽音が聞こえたりした。「うるさい鳥だな。」と弟が立ちかかった。「いいよ、いいよ。」と祖母が弟を止めた。「子供をさがしているんだよ。きのつひなを巢から落としたりしないよ。きのうも夕方暗くなるまで飛び回っていたが、わからないのかね。でも感心なものさ、けさもちゃんとさがしに来るんだもの」。「おばあさん、よくおわかりになるわね。」と芳子は言った。

祖母は目が悪い。十年ほど前のじん臓炎のほかに病氣らしいものをしたことはないが、若い時からの*そこひで、今はもう左眼だけがすかに見えるか見えないくらいであった。茶わんもはしも手渡してやらねばならない。勝手知った家の中は手さぐりで歩くけれども、庭へひとりで出ることはない。ときどきガラス戸の前に立っていたり、座っていたりして、掌をひろげながら、ガラス越しの日にさしに五本の指をかざして、*と見こつ見している。根限りの生命をその視力に集中している。その時の祖母が芳子は恐ろしかった。うしろから呼びたいようにも思うが、そつと遠くへかくれてしまつたのだ。

(注)　そこひ＝眼病の一種　と見こつ見して＝あれこれと見て

問一　「おばあさん、よくおわかりになるわね」には、祖母に対する芳子のどんな気持ちがかめられているか。次から選びなさい。

- 1 目で見たように言ったので感心している。
- 2 かなり目が見えているらしいので喜んでいいる。
- 3 見えるはずもないのにとひにくつている。
- 4 あて推量でものを言うのでとがめていいる。

- 問一 「その時の祖母が芳子は恐ろしかった」で、どうして芳子は「恐ろしかった」のか。その理由を、次から選びなさい。
- 1 ガラス越しの日ざしに五本の指をかざして見ている祖母の姿や動作が、あまりにも異様で、気持ちが悪かったから。
 - 2 根限りの生命をその視力に集中している祖母のようすを見て、人生のはかなさ、むなしさを感じとったから。
 - 3 目の不自由な祖母をかわいそうだと思っていたのに、その祖母が、完全に失明してしまったと思っただから。
 - 4 衰えていく視力に逆らうように必死に指をかざして見ようとしている祖母の姿が、異常なほど真剣だったから。

問二 この文章の表現上の特色として最も適切なものを、次から一つ選びなさい。

- 1 接続語が多く、情景がたくみに展開されている。
- 2 観察が鋭く、登場人物の気持ちがあくまで詳しく説明されている。
- 3 簡潔な表現のうちに微妙な心理が描かれている。
- 4 漢語が多く、登場人物の動きが力強く表現されている。

(新潟県)

「解答」

問一 1

問二 4

問三 3

【】(越後の春日を経て今津へ出る道を)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いている。母は三十歳を越えたばかりの女で、二人の子供を連れていく。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、くたびれた同胞二人を、「もうじきお宿にお着なさいませ。」と言つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引き摩るようになつて歩いているが、それでも気が勝つていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思い出したように弾力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐甲斐しい出立ちをしているのが、誰の目にも珍しく、又気の毒に感ぜられるのである。道は百姓家の断えたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜っているために、好く固まつていて、海の傍のようにくるぶしを埋めて人を悩ますことはない。

薫ぶきの家が何軒も立ち並んだ一構えがはその林に囲まれて、それに夕日がかつと差している処に通じ掛つた。

「まああの美しい紅葉を御覧」と、先に立つていた「A」が指さして子供に言った。

子供は「A」の指さす方を見たが、なんとも云わぬので、「B」が云つた。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね」「C」が突然弟を顧みて云つた。「早くお父様らしいらっしゃる処へ往きたいわね」

「姉さん。まだなかなか往かれはしないよ」弟は賢しげに答えた。

「A」が諭すように云つた。「そうですね。今まで越して来たような山を沢山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かないのだよ。毎日精出して大人しくあるかなくては」

「でも早く往きたいのですもの」と、「C」は云つた。

問一 この文章に登場する人物は何人か。

問二 「」部分A・B・Cにあてはまる会話の人物を書きなさい。

問三 この文章の季節はいつ頃か。春・夏・秋・冬で示せ。またその季節を表す語句を本文中より漢字二字と三字で二つ抜き出しな

さい。

問四 この文章の背景となっている土地はどこか。本文中の語句を用いて十四字で示せ。(二松学舎大附高)

「解答」

問一 四人

問二 A 母、B 女中、C 姉

問三 秋、紅葉、秋日和

問四 越後の春日を経て今津へ出る道

【】(泥の下のこと考えたら)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「泥の下のこと考えたら、働く気力がのうなつてもうたよ。田んぼは泥かぶつてわえや。今年こしは一粒の米もとれやんで。」
「そつよの。」

「せつかく肥やした田アも、泥でわえや。来年かて、再来年さいらいねんかて、元のとおりになるやどや分からん。戦争が終わつたのに、なんでこんな目エに遭あわならんのやろ。」

青年の目は暗く、輝きがなかった。それは巨怪な泥との闘いに全く疲弊した表情であった。たしかに庭先から見渡す限りには泥海が広がっている。この間まで青々と若い稲が風にそよいでいた田園が、たしかにこの泥海の下に永遠に没してしまつたかに見える。見はるかす新町は、かつては宮原村の栄華を示す文化的な集落であつたのに、ここから見てもやはり泥の廃虚はいきよだ。青年が希望を失つのも無理はなかつた。川の水は、いまだに濁り続けている。それはもう昔のように青く澄むことはないかという疑ぎ慎しんを人々に抱かせていた。あらためて見回せば(A)千代の心もすくむような光景である。

だが千代は目め簞たての底をたたくと、晴れやかな声をあげた。

「(B)あんた見る場所が違つてるで。あれを見てみい、あれを。山は泥をかぶつてエへん。」

千代の指さすかたには、穏やかな山なみが広がつていた。幾世代も昔からかかつて頂上まで切りひらき、牢固ぶつこな石がきを築きめぐらしたみかん山が、地上の洪水こうすいも泥の襲来もまるで知らぬ顔で、緑の葉を茂らせて健在であつた。流木も、泥も、水さえも山をおかすことはできなかつたのだ。

「家が流されたかて、田アがつぶされたかて、山があるさかい有田はだいじょうぶなんや。わたしとこの山かて、あんたとこの山かて、木一本倒れてることやない。わたしもあんたらに負けんみかん作るさかい、あんたも今年またええみかん作りなあ。」

千代は見えていた。青年の表情が明るさを取りもどし、目が再び輝き始めるのを。青年のくちびるは強く一文字にひき結ばれていて。彼は泥の中から立ち上がると、かたわらに倒れていたシャベルを取つて、ものも言わずに泥に突きさし、もつこに泥を移す作業に取りかかった。

それを見守りながら、千代は自分のからだの中にも若若しく力がみなぎつてくるのを感じていた。わたしもまだまだ生きるのだ、

生きることができるとだそう新しく、思った。

(有吉佐和子)「有田川」にみる

目簾・もっこ……ここでは、ともに泥運びに使っている道具。

有田・和歌山県にある地名。

問一 (A)「千代の心もすくむような光景」のうち、田園と新町のよつすを、本文中のことはを使い、の字数の範囲内で書きなさい。

新町

田園

問二 (B)「あんた見る場所が違うてるで」とあるが、千代は、青年の目を何に向けさせようとしたのか。本文中に使われている四字のことは抜き出しなさい。

問三 本文中の「家が流されたかて、田アがつぶされたかて、……。あんたも今年またええみかん作りなあ。」は、だれが話したことが。

問四 本文は、どんな場面(登場人物の心情を含む)であるか。百字〜百二十字でまとめよ。

(岐阜県)

「解答」

問一 泥海の下に永遠に没してしまっただかに見える

泥の廃虚となった

問二 みかん山

問三 千代

問四 洪水で田んぼが泥海の下に没し、働く気力を失った青年に、千代は「みかん山があるからだいじょうぶだ。」とほめます。そのことはで青年は明るさを取り戻し、作業を始める。それを見て千代もからだの中に、若々しく力がみなぎってくるのを感じている場面。

【】(一匹のウスバシロチョウが)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一匹のウスバシロチョウが道案内をするようにぼくの目前をとんでいた。道が折れまがると、またもや蝶チョウはこちらにいらつしゃいというように、道につれてふわふわと漂たゆってみせた。たしかにそれは漂たゆっているというのが当たっていた。透明な大気がその軽いからだをささえ、あるかないかの風がすこしずつ彼女をはこんでいった。

「(A)おいおい、ウスバシロチョウ。あんまりのんきすぎやしませんか。」と、ぼくは胸のうちでつぶやいた。「今だからいいようなもの、ここにいる人間は昔はちよっと残忍な男だったんだぜ。おまえの同類を数知れず殺ころしたんだぞ。」

この冗談は数秒後に事実となってあらわれた。灌木かんぼくのかけから、ひとりの少年が捕虫網をかざして(彼の腰に三角罫がついているのをぼくはとっさのうちに見てとった)いきなりとびだしてきたのである。最初のおそろしい網のひとふりは、いささか手元が狂くるって、蝶はかるうじてその下をかくくった。いくらおとりしたウスバシロチョウでも、驚かされたときはかなりはやく飛翔とっしょうすることができると。それなのに目のくらんだ蝶は逃げさるうとして、いたずらにひとところを円を描いてとびまわった。追いかげざまに少年はあせって網をふりおろした。二度、三度、そのたびに蝶は奇跡のように身を守った。というより、少年の手つきがあまりにも未熟であったのだ。それは見ているももどかしかった。(B)昔の衝動がぼくを駆かつた。はせよって、少年の手から捕虫網をひったくり、片手でかるく網をふった。うまいぐあいに、空高く舞いあがるうとしていた蝶の姿は編網あみこのなかに消えていた。

ぼくは羽をいためないように注意ぶかく蝶をとりだし、その胸をおしながらうしろを見かえた。このあたりには珍しい、さつぱりした身なりの、中学に入りたてくらいの年齢の少年であった。彼はほとんどあっけにとられて立ちすくんでいた。だが、その何も知らぬ澄みきった瞳まなこには、あきらかに驚嘆おどろきのいろがうかがわれた。

「どつちもありがとう」「彼はおすすおすと、さしだされた蝶をつげとって、パラフィンの三角紙にしまいこんだが、獲物はどつちも少ないようであった。」

「どんなものが採れた?」とぼくは尋ねてみた。(C)少年は目をあげて、ちよっとためらって、それから思いなおしたように、語尾を口のなかでぼかすように言った。

「テングチョウと。……ミヤマチャバネセセリ……」

ぼくには少年の気持ちがよくわかった。まったく趣味のちがう人たちにむかって、七面倒な昆虫しんちゅうの名前なんか口にして何になるう。せいぜいいぶかしげな沈黙か、こころさい好奇心をひきおこさせるだけにすぎない。ぼく自身、かつてどれほどいやな思いをしたことだろう。テングチョウってなんだね……どれどれ、なんだ、ふつうの蝶々じゃないか。そしてせっかくの採集品の鱗粉りんぷんでもはがされるのが落ちなのだ。

ぼくは少年の危惧きんをなくするように、なにげない調子でこう言ってやった。

「ヒメギフチョウは？ こころにはかなりいるはずだよ。」すると見る見る、彼の瞳には新鮮な喜びがあがってきた。見ていてそれは快かった。

問一 (A)の「おいおい、ウスバシロチョウ……のんきすぎやしませんか」と「今だからいいよつなもの……殺戮したんだぞ」という言葉づかいは、「ぼく」の蝶に対するどんな気持ちがおめられているか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 警戒心もなく飛んでいる蝶を脅迫する気持ち

イ 大空をのびのび飛んでいる蝶をうらやむ気持ち

ウ 人間を無視するように飛ぶ蝶を非難する気持ち

エ 人なつこく飛んでいる蝶への親しみの気持ち

問二 (B)「昔の衝動」とはどのような衝動か。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 蝶を見ると追いかけて捕らえずにはいられない衝動

イ 困っている人を見ると手助けせずにはいられない衝動

ウ 美しいものを見ると手に入れずにはいられない衝動

エ 蝶を追う人を見ると腕前を示さずにはいられない衝動

問三 (C) 「少年は目をあげて……語尾を口のなかでぼかすように言った」とあるが、この時、「ぼく」は、少年の気持ちなどをどのように受けとめたか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 見知らぬ人となれなれしく言葉をかわすべきではないな。しかし、返事をしないのも失礼だし……。

イ 蝶の名がよく分らないからあまり言いたくないな。しかし、答えないわけにもいかないから……。

ウ 専門的な蝶の名を言ってもどうせ分かってはもらえない。しかし、言わないわけにもいかないし……。

エ 採った蝶の種類が少ないので、言っと笑われてしまいそうだ。しかし、黙っているのも変だから……。

問四 作者が本文を通して特に表そうとしたものは何か。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 蝶に導かれて「ぼく」が見いだした、少年のひたむきで純真な心。

イ 蝶をなかだちとして生じた、「ぼく」と見知らぬ少年との心の交流。

ウ 行きずりの少年によって呼びさまされた、「ぼく」の少年時代への夢。

エ 美しくもはかない蝶によって浮きぼりにされた、人間の醜いすがた。

(栃木県)

「解答」

問一 エ

問二 ア

問三 ウ

問四 イ

【随筆人生】

【】(ぼくは毎年、秋もおそくなって)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは毎年、秋もおそくなって、自分の家の花壇が荒れてくるのが楽しみである。そろそろ自分も、人生のなかばを通りこして落とすべき葉を落とし始めているせいかな、今年あたりは、(A)かえって荒れた花壇が好きだと言いにくくなってきた。

こうして夏から花の終わっていく姿を見てみると、三日なり五日なり、実にうらやましいほどの美しさを見せて咲いてから、あっさりとはびらを落とすのもあるし、花びらがかつ色になっても名残りおしそうにいつまでもくっつけているのもある。

人間は化粧をすることを覚えてから、自分の盛りを一刻でも長引かせる工夫をおこたらない。むしろそのために苦勞して老い込んでいくのではないかしらと思うことがある。

ぼくは女の方々でも、無理に若々しくよそおっている姿を見ると、花びらを「花を思い出してしまふ。けれども、秋から冬にかけての花壇には、花はなくても、それ以上に美しいものがある。その枯れていく茎や葉や、その先にわずかにかぞえられる実まで含めて、全体に、夏の盛りには見られない落ち着きと、何かしら(B)深い知恵を感じさせるものがある。

そして(A)それはまた人間にさまざまなことを教えてくれる。(C)美しく咲いている花ばかりを見ている人、満月の夜ばかり夜空をながめる人は、自分の盛りがすぎて、なお、(イ)そのみに執着をもって、盛りをすぎた自分に美しさを発見することがない。むつかしいことなのかも知れないが、りこつなはずの人間が、この点ではひどく愚かなるうばいをしてるように思われない。

問一 (A)「言いにくくなってきた」とあるが、それは筆者のどんな心情を表しているか。

問二 「」部分に入れる適切なことば(十二字)を、本文中から抜き出しなさい。

問三 (B)「深い知恵」とは何か。あなたの考えを書きなさい。

問四 (ア) 「それ」はどんな内容か書きなさい。

問五 (C) 「美しく咲いている花ばかりを見ている人、満月の夜ばかり夜空をながめる人」とは、どんな人なのか。わかりやすく説明しなさい。

問六 (イ) 「それ」は何をさしているか。

「解答」

問一 自己弁護のように聞こえはしないかとおもはゆく、気がひける。

問二 いつまでもくっつけている

問三 それぞれの季節の試練や喜びの中を生き続け、深められたいのちの美しさを知ること。

問四 秋から冬にかけての花壇の美しさ。

問五 ものの外見の美にとらわれて、深い内面の美に気づけぬ人。

問六 自分の盛り

【】(ゆづべ、私は、仕事が手につかぬままに)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ゆづべ、私は、仕事の手につかぬままに、次女があこがれている「窓の開く汽車の旅」の思い出にふけた。私は、受験生時代から二度目の学生生活の前半ごろまで、窓の開く普通列車にしか乗ったことがなかった。妻を初めて郷里へ連れ帰ったときも、それから何年か後に都落ちをしたときも、夜行の普通列車であった。その翌年の春、再起を志して単身上京したときも、やはり夜行の普通列車であった。

真夜中に、どこかのちいさな駅で、ことりととまる。浅い眠りから覚めて窓を上げてみると、郷里ではまだ遠かった春が微風に乗って流れ込んでくるがあった。だれもないホームのさくの外から枝をひろげている桜が満開で、夜明けにはまだだいぶ間があるというのに、もったいないほど花を散らせているのをみたこともある。

また、いつかの春の夜、どこかの駅から乗り込んできて私の前の座席に着いた中年の女の人が、窓を上げると、外のホームには、下は五つぐらいの男の子から上は小学校六年生ぐらいの女の子まで、同じ兄弟姉妹らしい五、六人の子供らがいて、「父ちゃんに、体に気をつけてってな。」「母ちゃんもかせひかねよ。」「などと口々に言い、母親も、「あいあい、盆には父ちゃんと帰ってくつから。みんなけんかしねよに留守をしてれや。」「と答え、発車のベルが鳴ると、突然、ちやめな男の子が指揮棒を振るまねをして、子供らは低い声で、「蛍の光」を合唱しはじめた。

母親はびっくりして笑い出し、つきにはあわて気味に、

「やめれ。やめれたつたら。」「と子供らを軽くぶつまねをしているうちに汽車が走り出し、ホームの灯が流れ去って外が暗闇になると、母親はちいさく舌打ちして窓を閉めたが、ふいに、その窓ガラスに額を強く押し当てて、すすり泣きはじめた。

あの夜の子供らの「蛍の光」と、母親の額が窓ガラスにたてたこつとという鈍い音は、まだ私の耳のなかにある。

今年の春は、窓の開く夜行列車を乗り継いで帰ろつか？

次女と一緒に、仔猫のような顔をして窓から春の匂いを嗅ぎながら……。

問一 作者の郷里を本文中から推察して、次のア～エの中から選び、その符号で答えなさい。

ア 長崎県 イ 兵庫県 ウ 千葉県 エ 青森県

問二 母親が夜行列車に乗って行く目的を、次のア～エの中から一つ選び、その符号で答えなさい。

ア 盆に帰ってくる父親を迎えに行くため

イ 先に行っている父親と旅行をするため

ウ 父親と生活を共にしながら働くため

エ 病気になった父親を看病するため

問三 子供たちと別れる場面での母親の心情に最も近いものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号で答えなさい。

ア 別れを悲しむ様子もない子供たちのあどけなさにあわれみを感じ、悲しむ思いである。

イ 周囲に気がねをしながらも、いじらしい子供たちとの別れの悲しさに耐えられない思いでいる。

ウ つらい別れなのに、しきりにはしゃぐ子供たちの考えのなさを周囲の人に恥じる思いでいる。

エ 子供たちの別れの歌にうろたえて、しみじみとした別れができなかったことを悔む思いでいる。

問四 夜行の普通列車に寄せる作者の思いに最も近いものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号で答えなさい。

ア 人々の喜びや悲しみなど、さまざまな思いを乗せて走る夜行の普通列車になつかしさと愛着を感じている。

イ 失意のころのにがい思い出がまつわる夜行の普通列車に、悲しみとも喜びともつかぬ複雑な感情を寄せている。

ウ 桜の散る春の夜の光景から、ほのぼのと青春の日を回想して、夜行の普通列車に郷愁を覚えている。

エ 母と子の暗い別れをしみじみと思い出し、時の流れとともにすたれ行く夜行の普通列車に哀惜の情を寄せている。

(大分県)

・	問一	問二	問三	問四	「解答」
	エ	ウ	イ	ア	

【随筆家族】

【】(晩年、父が婦人雑誌の詩の選をしていたときだった)次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

晩年、父が婦人雑誌の詩の選をしていたときだった。他の仕事もあり、詩の選の方は、今日の夕方までが締切りだったので、ぎりぎりになっていたらしい。

こんな時に限って、前から電話もなく、突然これという用事もない人が来て、何時間もしずにかけて、父を相手に動かないことがよくあったが、こういう人には、はっきり玄関で、今日は忙しいからと断ればよいと思ったのだが、それをするのがとてもつらいらしかった。

(A)その日、父はいつもよりせかせかと朝昼兼用の食事をした後、それまで神経的に何か考えていた顔を、祖母の方に向けて、「今日は忙しいから、もしA君が来たら別の日に来てもらってくれ」と言って、「a」「二階に上がって行った。その時、いつもよりやせて、骨ばかりのようになつる姿が、私の目に残った。

私は、(B)できるだけ父をそっとしておいてあげたいと思い、急にこんな父を見るに耐えられなくなって、何もわからないくせに、階段にいる父を追いかけてゆき、「ア」と頼んだ。父は階段の途中で振り返ると、

「何、葉子が何をするのだ。」と言った。

「だいたいよいのだけでも、私が選んでおけばそれだけ早くできるから……。」

私が言い終わらないうちに、父はいつになくはっきりした強い語調で、

「葉子にそんなことができるものか。」と、かっと怒ったように言ったかと思うと、「b」「階段を上がって行ってしまった。

私は、父の「葉子になんかできるものか」という言葉が耳に残り、胸をふさいで、自分の詩に対するあさはかな考えを大変恥ずかしく思った。

昼過ぎ、案の定、A氏がやって来た。玄関でお手伝いさんが応対しているらしかったが、困ったような顔で、

「奥さま、先日の方がどうしても先生に会いたいとおっしゃるのですが……。」

と訴える。祖母は、

「忙しいから今日は会えませんかとはっきり言いなさい。」と強く言うのだった。するとまた「c」「玄関に行って、今度は半分泣き

へそをかいて来て、

「何日なら会えるか聞いてくれとおっしゃるのです。」と言っ。

祖母は玄関からずつと離れた茶の間の中廊下に突っ立ったまま、困って「いやだねえ」とお手伝いさんと相談しているのである。私は思いきって、父につげに二階に上がって行った。たばこのにおいと、煙でむんむんする中に、父は行儀よくきさんと座っていて、机や畳いっぱい原稿が散乱していた。父は私の足音と様子で、(C)それと察したのか、一目私を見ると、さつき私を怒った時はうって変わって顔色を変えて、私の言葉を緊張して待っているのだった。

「この間の方が、どうしても会いたいと言って帰らないけど、どうするの。」と言っ。

「お父さんのこと、なんて言ったのだ。」と父は真剣に言った。

「今日は忙しいから会えませんでしたの。」と言っ。

「居ないとは言わないだろうね。」と念を押すのだった。うなずいてみせると、それで父は、やっと安心したような顔になったかと思っ、早足で階段を下りて行ってしまった。

(注)

父＝萩原朔太郎。明治～昭和。詩人。詩集「月に吠える」などがある。

問一 場面の变化や時間の経過を考えて、この文章を三つの部分に分ける場合、第一の部分を『印』(つらいらしかった。(までとすれば、第二の部分はどこまでか。第二の部分の終わりの五字)句読点は含まない)を抜き出して答えなさい。

問二 文章中のa、cに入れるのにそれぞれ最も適当な語を、次のア～オの中から一つずつ選び、符号で答えなさい。ただし、一つの語を二回以上用いないこと。

ア どんどん イ ゆったりと

ウ ずっと エ すくすくこと

オ すくと

問三 (A)に、「その日、父はいつもよりせかせかと朝食兼用の食事をした」とあるが、その日に限ってそのように「せかせかと」食事をしたのはなぜか。その理由に当たる一文を文章中から見つけて、初めの五字を抜き出して答えなさい。

問四 (B)に、「できるだけ父をそっとしておいてあげたい」とあるが、この言葉には、「父」に対する「私」のどんな気持ちがかがえるか。一語で答えなさい。

問五 文章中の「ア」に入れるのにふさわしい「私」の言葉を、この場面の状況を考えて、十五字以内(句読点を含む)で答えなさい。

問六 (C)に「それと察したのか」とあるが、「父」は、「私」が何をにつげに来たと察したのか。十字以内で答えなさい。

問七 文章中の「父」は、どんな性格や人柄として描かれているか。次のア～カの中から適当なものを二つ選び、符号で答えなさい。

ア 物事にこだわらずおおらかなだ。

イ 仕事にきびしい。

ウ 気が強くわがままで。

エ 正直で気が弱い。

オ 客がきらいでいつも避ける。

カ 怒りっぽく乱暴だ。

(大分県)

「解答」

問一 しく思った

問二 a オ b ア c エ

問三 他の仕事も

問四 いたわり

問五 私にも手伝わせて下さい。

問六 A氏が来たこと

問七 イ、エ

【】（お前たちの母上の遺言書の中で）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分はお前たちに与えられた一節だった。もしこの書き物を読む時があったら、同時に母上の遺書を読んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに会わない決心を翻さなかった。それは病菌をお前たちに伝えるのを恐れたばかりではない。またお前たちを見る事によって、自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸び行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を、恐れたのだ。幼児に死を知らせる事は無益であるばかりでなく、「」だ。葬式の時はお前たちにつけて楽しく一日を過ごさしてもらいたい。そうお前たちの母上は書いてある。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」とも詠じている。

母上が亡くなった時、お前たちはちょうど信州の山の上にいた。もしお前たちの母上の臨終にあわせなかったら一生恨みに思うだろうとさえ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に強いて頼んで、お前たちを山から帰らせなかった私をお前たちが「」だと思つ時があるかも知れない。今十時半だ。この書き物を草している部屋の隣にお前たちは枕を列べて寝ているのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の齢になったら、私のした事を、すなわち母上のさせよつとした事を価値高く見る時が来るだろう。

問一 「自分の心」を具体的に表現している部分を原文の中から抜き出して書きなさい。

問二 「恐れたのだ」の主語を原文の中からそのままの形で抜き出して書きなさい。

問三 、 にそれぞれもっともよくあてはまる漢字二字の語を書きなさい。ただし、 は自分で考え、 は原文の中から抜き出さなさい。

問四 の「私のした事を、すなわち母上のさせよつとした事」とはどんな事が、十五字以内で答えなさい。

問五 中の「じの」「の」と同じ用法の「を」その上の「一」をすじととまじ、原文の中から抜き出して書きなさい。

(早大高等学院)

「解答」

問一 死んでもおまえたちに会わない決心

問二 それは

問三 有害 残酷

問四 母親の臨終に会わせなかったこと

問五 心の破

【】(小さいころ、母はよく、谷の奥へ私を連れて行って)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小さいころ、母はよく、谷の奥へ私を連れて行って、藁一枚ぐらいしかない小さな田の畦にすわらせ、自分は胸までつかる溼田で苗を植えていた。この谷は暗くて、一日に陽が三時間ほどしかささなかつた。村でもきわめて貧しい谷であった。そんな谷の口に私たちの家があった。谷には畑もあつた。そこで、母は芋や大根を作つた。ここへ行くのに、深い川が一つあつた。土橋が架かつていたが、大水のたびによく流失したので、母はよく橋普請をした。自分だけの働く谷だから、村の衆に頼める工事ではない。宮大工の父がその日は必ずどこから帰ってきて、山から丸太を二本伐つてきて、狭い川にさし渡し、その上へ栗材の口を並べて、土を積むと、私たち兄弟にも踏ませて赤土の固い土橋にした。一年ほどすると土橋は古ぼけてわきに草が生え、草の下に、栗材の切り口が白く並んだ。また、これが古くなると、栗材は腐つて、のそくと橋の裏は椎茸がいつぱいだった。母はこれを穫つて私たちの弁当の菜にしてくれた。母は、一家の収穫のための谷田へ渡された橋を、その生涯に何度架けただろう。おそらく十回ぐらいは架けたと思う。いつ架けても、この橋は丸太の上に土の盛られた、椎茸の実る橋であつた。

私は、九歳でこの母に別れた。京都の寺へ小僧に出たからだが、故郷のことを思うと、(A)母の架けていた橋がまぶたに浮かんだ。今日も、それは浮かぶ。ささやかな実りのために。母が心尽くして架ける橋、命の橋であつた。だから、あの橋はあれだけ粗末にできているのに、美しかったのだらう。

科学文明が月旅行を予測させるほど進み、日本の道路に架け渡される橋も皆コンクリートで、東名高速や、他のハイウェイを見てもわかるように、巨大である。道路を、鉄道を、川を、谷をまたいで、レジャーに急ぐカー族のためにある、このコンクリートの橋も、大勢の工夫たちの力を集めて造られた。この工事が、青森や秋田から農閑期を利用して出かせぎに来た若者たちの(B)土の手によつて造られていることを思えば、やはり、文明の架橋も、裏には椎茸こそ生えないが、働き手の哀話は尽きないように思う。

ふるさとの谷の土橋に椎茸がまた生える季節がやってくる。(C)それを汽車に乗って、見に行くのが、私のささやかな生きがいの一つである。

(鳥取県)

問一 (A)「母の架けていた橋」と内容のつえから対比されていることを、文中の後半から抜き出して、五字で書きなさい。

問一 (B) 「土の手」とはどのような手か。最も適当なものを次から一つ選んで、符号で答えなさい。

ア 土によこれた手 イ 土をたがやす手

ウ 土をいじる手 エ 土に生きる手

問三 (C) 「それを汽車に乗って、………一つである」とあるが、なぜ「ささやかな生きがいの一つ」といえるのか。「それ」のさす内容にふれながら、六十字以上七十字以内で説明しなさい。文の終わりは「………から。」で結ぶこと。や、は一字と数える。

「解答」

問一 文明の架橋

問二 エ

問三 椎茸の生える季節に、母の架けたふるさとの谷の土橋を思い、それを見ることは、母の労苦に感謝することにもなり、自分の明日へのはげみにもなるから。

【隨筆社会】

【】（仲間は何しているの）

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

仲間は働いているのに、このうす笑いを浮かべた男だけは、いつこうに他を顧みることなく、子どもっぽい仕事を飽かずに続けている。もし、この大学生にアルバイトに来ているという自覚があるならば、アルバイトとはいったいならう。

「あれは、なんだろうね。」

と、わたしはあこで、庭を示した。

相変わらずその大学生は、熊手で空気を切っていた。

「そんなのよ。この暑さに長ズボンをはいて、なんでしょうあの格好は。」

雑巾ぞうじん片手に、妻が小声で応じた。

「まるきり退屈だが、そうかといって、こんな低級な労働で、体力を消耗する気にはならないね。まあ、お前さん達は働け。おれの関係したことはない。こうしていれば、自然に時間は経つだろうが、しかし、この退屈さはどうしたものかな。」

ゆるんだ口もとから、そんなつぶやきがもれてきそうな感じだったが、いかになんでも、そのうち仲間の動きに加わるだろうとわたしは思った。

わたしはその青年を気にしなくなかった。芝生の泥どろをかきのけるような仕事は、アルバイトとしても興味あるまいと同情できたからだ。柱時計が十時を指すのを見て、わたしは庭へ下りた。彼らが到着してから一時間経っていた。

池の端にしゃがみこんでいる菜っ葉ズボンの背後から声をかけた。

「いったい君は、手伝いに来てくれたのか、遊びに来たのかどっちなのだ。第一、ああして働いている君達の仲間に悪いとは思わな

いかな？ 遊びに来たのなら、帰ってもらうかな。」

わたしはできるだけ言葉を平静に、立ち上がる彼と対峙たいじして言った。わたしの視線をやや避けて、彼は黙っていたが、やがてまた、手にした熊手を振りはじめた。

植木屋のT君が、わたしを呼びに来たのは昼過ぎの一時だった。

いったん寮へ帰ったアルバイトの代表二人が庭に待っていて、何か話があるということだった。出ていくと、代表の一人はぎっぎの葉っぱズボンの青年で、「みんな、これから浜へ泳ぎに行きたいが、午後からの作業を中止してもさしつかえないか。」という事だった。

熱い手のひらで、やにわに腹部から胸のあたりまで、さかなでされたような感覚が、わたしの口をゆがませた。

「はあ、来たな、くずめ……」

とわたしは思った。きたならしいやつだと思った。これが自由というものならば、彼らに何一つ言つべきことはなかった。

「どうぞ、お出かけください。」

彼は労賃を請求した。丁君と半日分の計算をして家にはいりかけると、彼は百円足りないと呼びかけた。軽蔑くろくというのはこつこつものである。あらためて地面に書いて計算させ、金を払ってやった。

相手もそれ以上言い出さなかったし、わたしも必要な言葉だけが口にしなかった。一種言いがたい暗さを、わたしの心に残すことまで満足したのである。この青年らは肩を並べて帰って行った。

「大丈夫のかな、おれたちの住んでいる国は。」

そついう不安が、しばらくわたしの心底にわだかまって離れなかった。

問一 「子どもっぽい仕事」は、具体的にはどのような仕事か。

問二 「熱い手のひらで、やにわに腹部から胸のあたりまで、さかなでされたような感覚」の感覚を一言で表すとすれば、どんな言葉が適當か。漢字二字の熟語で答えなさい。

問三 「これが自由というものならば」について、アルバイトの学生たちにとって、自由とはどのようなものであったと考えられるか。三十字以内で答えなさい。

- 問四 (1) 学生が足りないと言った百円を「わたし」はどうしたのか。記号で答えなさい。
イ 学生の要求どおり、百円余分に与えた。
ロ 学生の要求した百円は与えなかった。
(2) そう考えられる理由を三十字以内で述べよ。

(関西学院高)

「解答」

問一 熊手を振り回しているだけの仕業

問二 不快

問三 自分の気分のままにやりたいことだけをやる自己中心的な生き方

問四 (1) イ (2) 相手の要求に従うことで強い軽蔑の気持ちを表しているから。

【】(国鉄電車も、十一時に近くなると)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国鉄電車も、十一時に近くなると、すいてくる。

東側の乗客の背をあたためたためた午前の日が、西側の客の膝あたりまでさし込んで、大半の吊り革が、揃って体操でもしているかのようになり、のんびりと左右に揺れる。

自動式のドアが、その幅なりの日さしの中に、舞い立つほこりを浮き上がらせ、何人かの人々の乗り降りか済むと、再び電車は駅を滑り出た。

するとその時、少しもった音色で、「ジリ、リ、リ、リ」と、ベルが鳴り出した。

車内の人たちの眼が、すぐそのありかを探り出して、そっちへ向く。

中央の席で、ずっと居眠りをつづける、学生服の青年の膝に、ふるしき包みがのせてある。

眼ざまし時計は、その中で鳴り出し、まだ鳴りつづけているのだが、当の大学生は、たった今正気に返ったばかりで、「あれっ」といった驚いた表情で、素早く左右を見まわし、それからすぐ、頭の上の網棚もつかうがった。

すべて、二、三秒に足りない動作でしかなかったが、自分の膝の上で鳴っているのだと、学生が気づくまでに、人々を腹から笑い出させるだけの、あわてぶりであった。

場所ちがいで鳴り出した、眼ざまし時計の正直すぎる働きも、人々の微笑をさそったのだが、

「しまった。僕のふるしきの中で鳴っているんだって。」そんな気恥ずかしさで、ふるしきの上から、あわてておさえにかかった学生の顔が、いつそう人々の笑いを明るくしたものにした。

小柄で、まるで憎げのない顔立ちだった。まぶしそうな眼で、笑っている人々をチラリと見てから、腰をもじもじさせ、ちょっと顔を伏せた様子が、大人でもなく、子供でもない、無邪気な大学生といった感じであった。

斜め向こうの、若い女客などは、時計が鳴り終わってから、なおおかしさがこみ上げてくるらしく、身をこごめるようにして、忍び笑いをこらえていたのだから、大学生がもじもじするのも無理はなかった。

大学生は、電車がスピードをゆるめ出すと、窓の外を振り返り、ふるしき包みをオーバーの小脇に抱えて席を立った。

「どうも、具合が悪い……。」といった格好で、S 駅へ降りた後ろ姿が、笑いものにした人々の心に、かすかな悔いのようなものを残したが、実は そんな心配はいらなかった。彼は、S 駅で降りなければならぬ用事があつたのだ。だから、彼の眼ざまし時計は、思わぬ役目を果たしたことになる。

(静岡県)

問一 「少しこもった音色」はどついう音か。次から選び、記号で答えなさい。

A やつと聞き取れるほどの澄みきつた音。

I 人込みの中でもかすかに聞こえる、軽やかな音。

ウ 広い範囲に鳴りわたる、さわやかな音。

E 響きをおさえられた、やや重い感じのする音。

問二 「あわてておさえにかかった学生の顔が、いつそう人々の笑いを明るくしたものにした」で乗客の笑いをいつそう明るくする前に乗客に笑いを生じさせた原因となつたのはどつうなことが。二十五字以内で書きなさい。

問三 「そんな心配」はどつうな心配か。その内容を三十五字以内で書きなさい。

問四 「だから、彼の眼ざまし時計は、思わぬ役目を果たしたことになる」とあるが、眼ざまし時計の果たした思わぬ役目により、学生はどつうなことができたかを書きなさい。

- 問五 本文では、学生はどんな人物として描かれているか。次から選び、記号で答えなさい。
- ア 人騒がせなことをする、不愉快な人物。
- イ 恥ずかしいと感じない、図太い人物。
- ウ 子供らしさも残る、好感の持てる人物。
- エ 落ち着きのある、大人っぽい人物。

「解答」

問一 エ

問二 眼ざまし時計が場所違いで鳴り出したこと。

問三 自分たちが笑ったので、学生が途中で降りたのではないかということ。

問四 目的の駅で降りること。

問五 ウ

【隨筆自然】

【】(ケヤキの美しいのは)

次の文章を読んで、あとの問いに答よ。

「1」ケヤキの美しいのは、ことに若葉が黄みがかつて萌え出るところである。まわりの空まで、新鮮な色あいを映すほどである。並木の道を歩く子どもも老人も若い女性も、顔がその色あいにつつまれてかやいて見える。そのため、まわりの家も樹も薄暗く沈んで、ケヤキをひきたてているように見えるのである。やがて新緑となり、深緑になるのに長い日時を要しない。伸びざかりの少年少女のように速やかに万緑に調和していく。

「2」夏は、道いつぱいに濃い木陰をつくって、涼風を誘ってくれる。ふりあおぐと、日の光を通したり、屈折させたりしながら葉をゆりうごかして、道ゆく人々に大自然のリズムを緩やかにおくってくれる。長めな枝がしなやかだからだろうか。たとえ大風にあたって、大ゆれにゆれても、枝を折るようなへまなことはしない。

「3」秋、葉が色づくのをいそがないように見える。秋の小鳥たちやオナガやヒヨドリたちと遊びほつけて、色づくのをわすれているのかもしれない。晩秋、大風におそわれると、黄色の紙ぶきのように、風に身を任せて、壮大な風景を繰り広げるのである。まったくみごとな散りかたをする。諦めがいいというよりも、おぼしめしのままに大地にかえっていくという感じである。

「4」冬のケヤキの姿は美しい。ことにケヤキのうしろにまつ赤な大きな太陽が落ちていくところが好きだ。夕焼けが上空へ広がると、細い枝の先までまっ黒に描き出される。太い枝も幹も、ほどよく、光沢のある深い黒色を帯びてくる。落日がまったく沈みきって残照を背景にしたときの黒色がいちばん美しい。そんなとき、かぼそくこみあっている枝がゆれているのを見とめることがある。ケヤキの生気だろうか。遠い春をまねくケヤキのいのちを思わないわけにはいかないのがある。

(福岡県)

問一 次の各文のうち、ケヤキを人間に見たてて表現しているのはどれか。記号で答えなさい。

ア ケヤキが新緑になり、深緑になる。

イ ケヤキが黒色に描き出される。

ウ ケヤキが色づくのをわすれている。

エ ケヤキが大ゆれにゆれている。

問二 「冬のケヤキのすがたは美しい」とあるが、この表現にならって、春のケヤキの美しさを、「春のケヤキの（ ）（ ）は美しい」と述べるとすると、（ ）（ ）にどんな語を入れたらよいか。適当な語を、春のケヤキの美しさを述べている段落中から三字で抜き出して書きなさい。

問三 「ケヤキのいのちを思わないわけにはいかない」は、筆者が、なにがどうなっているのを見て表現した言葉か。なにがどうなっているに当たる語句を、文章中から七字で抜き出して書きなさい。

問四 次のアの俳句とイの短歌に表されているケヤキのそれぞれの美しさは、文章中のどの段落のケヤキの美しさと共通しているか。それぞれ段落番号で答えなさい。

ア 樺二十余大緑陰をなせりける

イ 落ち葉せし樺の幹をつたひゆきわれのまなこは空に浮かびぬ

「解答」

問一 ウ

問二 色あい

問三 枝がゆれている

問四 ア「2」イ「4」

【】(私は今住んでいる熱海の住まいの)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は今住んでいる熱海の住まいの裏山の中腹に小さい掘つ建て小屋の書齋を建てた。狭い場所、窓の前はすぐ急な傾斜地なので、用心のため、低い四つ目垣を結び、その下に茶の実をまいた。ゆくゆくは茶の生け垣にするつもりだが、それは何年か先のことなので、今年は東京の百貨店で買った幾種類かの朝顔の種をまいた。夏が近づくとそれらが四つ目垣に絡みはじめた。反対のほうに地面をはうつるがあると、私はそれを垣のほうにもととしてやった。

毎朝、起きると、出窓にあぐらをかいて、たばこをのみながら、景色を眺める。そしてまた、すぐ目の前の四つ目垣に咲いた朝顔を見る。

私は朝顔をこれまで、それほど美しい花とは思っていなかった。一つは朝寝ぼけで、咲いたばかりの花を見る機会がすくなくあったため、多く見たのは日に照らされ、形のくすれた朝顔で、その弱々しい感じからも私はこの花をあまり好きになれなかった。

「A」この夏、夜明けに目ざめて、(B)開いたばかりの朝顔を見ると、私はそのみずみずしい感じを非常に美しいと思うようになった。カンナと見くらべ、セラニウムと見くらべて、このみずみずしい美しさは特別なものだと思った。朝顔の花の生命は一時間が二時間とっていいだろう。私は朝顔の花のみずみずしい美しさに気づいたとき、なぜか、不意に自分の少年時代を思い浮かべた。あとで考えたことだが、これは少年時代、すでにこのみずみずしさは知っていて、それほどに思わず、老年になって、それをたいへん美しく感じたのだらうと思った。

母屋から話し声が聞こえてきたので、私は降りて行った。その前、小学校へ通う孫娘の押し花の材料にと考え、瑠璃色と赤と小豆色の朝顔を一輪ずつ摘んで、それを上向けに持って段になった坂路を降りていくと、一匹の虹が私の顔の周りをさく飛び回った。私はあいているほうの手で、それを追ったがどうしても逃げない。私は坂の途中でちょっと立ち止まった。と、同時に今まで飛んでいた虹は身を逆に花の芯に深く入って蜜を吸いはじめた。丸みのある虎斑の尻の先が息でもするように動いている。しばらくすると虹は飛び込んだときは反対にやや無器用な身振りで芯から抜け出すと、すぐ次の花に……そしてさらに次の花に身を逆さにして入り、ひととおり蜜を吸うと、なんの未練もなく、どこかへ飛んで行ってしまった。

虹にとっては朝顔だけで、私という人間はまったく眼中になかったわけである。(C)そういう虹に対し、私は何か親近をおぼえ、

たのしい
愉しい気分になった。

問一 「A」にあてはまる最も適当なことは次のア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。
ア そうして イ そのうえ ウ すなわち エ ところが

問二 (B) 「開いたばかりの朝顔」の美しさを表していることは()形容詞()を、文章中からそのまま抜き出して、六字で書きなさい。

問三 (C) 「そういう虻に対し、私はなにか親近をおぼえ、愉しい気分になった」とあるが、「私」は虻のどのような点に親近をおぼえたのか。次から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア まるで人間のように朝顔の花の美しさを味わっているようにみえたこと。

イ 朝顔の蜜がほしいとなったら、ただそのみに没頭していること。

ウ いったん狙ったら、最後まであきらめずに執念ぶかくこだわりつづけること。

エ 自分の目的をはたしたら、少しも朝顔に未練をのこさないこと。

「解答」

問一 エ

問二 みずみずしい

問三 イ

【】(母から聞いた昔の生け花の話である)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

母から聞いた昔の生け花の話である。

花は出来上がり的一步手前で生けなければならなかったのだそうである。生けた時に全部出来上がっていたら、その時から花は崩れてしまう。(A)

出来上がりの余地を残して、あとは花自身に任せて出来上がらせる。明日の午後に客を迎えるための花だったら、ちょうどその時刻に出来上がって、絶頂の勢いにあるように生けなければならぬ。そのためには間の抜けたすぎ間を花のために作っておいてやらなければいけない。

これはしかし容易なことではあるまい。無責任な突き放しでは覚束ない。藤なら藤、牡丹なら牡丹、花の伸び咲く速度の計算が必要となる。この計算のためには口から自然を観察しておかねばならぬ。こうなると生け花は花や枝の単なる編集ではないことになる。(B)

事実母の生けた花は、当座物足りなく、しかし翌日あたりになれば形を整えて勢いがつよくなったものだった。(C) 小さなつばみだったものが枝頭一点の光彩となったときに、それが全体へのアクセントとなり、ぐっと引きしまってなるほどと合点せられたことが多い。しかし未来に対する計算とか用意とかいうものは、性急な、あまりに性急な現代ではおそらく不必要とされるだろう。何事も即座主義の世の中では通用する生け方ではないに違いない。(D)

あとは花に任せる。だから母は自分で生けた花をいかにも楽しそうに自分でながめたものだった。任せたかぎりにはもう自分の生け花ではないとして、その成り行きを楽しむのは「な精神である。この精神のゆえにその楽しみは天真の清潔なものになって、さらに奥深く楽しめるといわけなのだ。しかしこんなこともはや現代では歓迎されぬだろう。

こうして生けた花がやがて絶頂を極める。それから勢いが衰える順だが、その衰えを見せはじめると母は何の躊躇もなく取り捨てるのだった。私などの目からみるとまだ鑑賞に堪えるものなのである。しかし母はそのたびに、衰えを人の目にさらさせるのは情なしだといった。

何もかも現代には不向きな母の時代の華道の中で、あるいはこの最後のものだけが喝采されるかもしれない。思いきりのよさは

似ているのだが、しかしこれくらい似ないものもないかもしれぬ。

問一 次の文を本文中に入れるには、(A)～(D)のうち、どこが最も適当か。

大げさないい方をすれば、自然の生命と生け手の呼吸とを合致させることだともなるだろう。

問二 「」にあてはまることは、次のどれか。

ア 批判的 イ 健全 ウ 謙虚 エ 科学的

問三 「その衰えを見せはじめると母は何の躊躇もなく取り捨てる」には、花に対する母のどっぴいっ気持ちさが表れているか。

ア 冷淡 イ 愛情 ウ 嫌悪 エ 軽蔑

問四 現代で、「あるいはこの最後のものだけが喝采されるかもしれない」のはなぜか。文中の語句を用いて三十字以内にまとめて書きなさい。ただし、書き出しは、「この最後のものだけは、「から始めること。()。ち。も一字に数える。()

問五 母は生け花に対して、どっぴいっことを最も大切だとしているか。

ア 花に任せる。

イ 花の伸び咲く速度を計算する。

ウ 自然を観察する。

エ 衰えはじめるとすぐ取り捨てる。

問六 筆者は母の話を書くまでは、生け花をどっぴいっものと考えていたが。文中の語句を用いて二十字以内にまとめて書きなさい。

()。ち。も一字に数える。()

- 問七 筆者は、母の生け花をどのように考えているのか。
- ア 母の生け花には、現代人のだれもが認める新しさがある。
- イ 母の生け花は、たいへん複雑で、ゆとりを感じられない。
- ウ 母の生け花には、現代が見失ってしまった大切なものがある。
- エ 母の生け花は、あまりに合理的で、豊かさが感じられない。

(長崎県)

「解答」

問一 (B)

問二 ウ

問三 イ

問四 この最後のものだけは性急で即座主義の現代の世の中に表面上はあっているから

問五 ア

問六 生けたときには全部出来上がっているもの

問七 ウ

【】（私は庭の木を眺めている）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は庭の木を眺めている。いや、枝についた一枚の葉を見ている。今は、その葉は美しい緑に、夏の陽を受けて輝いている。私は、その葉が、まだ、小さな芽として初めて私の眼に触れたころを思い出す。

それは、昨年の冬の初めであった。今の葉のある場所には、乾いた茶色の葉が付いていたのが、枝を離れて散り落ちていった時である。そこに、まだ小さな固い芽であったおまえが、みずみずしい生命を、宿して誕生していた。

寒い風が吹き、雪の降る日があったが、おまえは黙々として春を待ち、徐々に充実した力を内に蓄えていく。ある朝、小雨がやむと、点々と真珠の玉が枝に並んで光っているのが見える。それは、芽生えの一つ一つに雨水がたまっていたのである。芽のふくらみが進んできたのを感じた。春はもう間近である。

ようやく春が来る。芽の開く時の喜び。しかし、あの、地上に散っていった葉は、今は朽ち果てて土に還っていく。

おまえは、すすくと伸びて初夏の陽を明るく透かす若葉となる。生命の充実を感じるとともに、その柔らかい葉が虫に侵されやすいのも、この季節である。幸いにおまえは無事に夏を迎え、今、仲間とともに青々と繁り合っている。

私は、おまえの未来をも知っている。夏の盛りになると、葉蔭ではアブラゼミが騒がしく鳴きたてるだろう。しかし、台風が過ぎるころになると、ヒグラシやツクツクボウシの、どこか淋しげな歌声に変わる。涼しくなる。蝉の声が聞こえなくなって、こんどは、根もとの方から虫の合唱がしめやかに秋の夜の興を添える。

おまえの緑は、なんとなく疲れた色合いになってくる。やがて黄ばみ、茶色になって、寒い雨の中につなだれている。一夜、風が雨戸を鳴らすと、翌朝、おまえの姿は、もう、枝には見られない。ただ、その跡に小さな芽が付いているのを私は見いだすだろう。その芽が開くころ、地上に横たわっているおまえは土に還っていくのである。

これが自然であり、おまえだけではなく、地上に存在するすべての生あるものの姿である。一枚の葉が落ちることは決して無意味ではなく、その木全体の生に深くかかわっていることがわかる。一枚の葉に誕生と衰滅があつてこそ、四季を通じての生々流転が行われる。

問一 筆者は、なにを「おまえ」といつているか。また、「おまえ」ということばには、筆者のどんな気持ちがこめられているか。

問二 真珠の玉というのは、なにが、どんな状態にあることを表しているか。文章中のことばを用いて書きなさい。

問三 この文章は、木の葉の過去・現在・未来の状態を四つ組み合わせて構成されている。その順序を、次のア～ウの記号で書きなさい。

ア 過去の状態 イ 現在の状態 ウ 未来の状態

問四 この文章で、筆者は、葉を観察することによって、どんなことを感じとったか。次のア～エの中から最も適切なものを選び、記号を書きなさい。

ア 木の葉の生々流転の姿は、他の生きものにはみられないもので、一枚の葉の誕生と衰滅は、その木全体の生命にかかわっている。
イ 木の葉の生々流転の姿は、すべての木に共通しており、一枚の葉の誕生と衰滅は、その木全体の生命にかかわっている。

ウ 木の葉の生々流転の姿は、すべての生きものに共通しており、一枚の葉の誕生と衰滅は、その木全体の生命にかかわっている。

エ 木の葉の生々流転の姿は、すべての生きものに共通しており、一枚の葉が落ちることは、その木全体の衰滅にかかわっている。

(広島県)

「解答」

問一 枝に付いた一枚の葉、親しみ

問二 雨水が芽生えにたまっている状態

問三 イ、ア、イ、ウ

問四 ウ

【】（私はよく旅行をするほうで）

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私はよく旅行をするほうで、遠く北極圏を越えたラブランドで、真夜中にも沈まない太陽を見たことがある。それは実に神秘的な光景であった。全く人間を拒絶するような荒れはたものさびしい風景で、私の心を強くひくものがあった。しかし、それは描かなかった。私が北欧の旅で白夜の情景として描いたのは、スウェーデンのボスニア湾に臨む入江の岸边と、フィンランドの湖沼地帯での、見渡す限り針葉樹の森と湖が続く風景であって、人間の住み得る地帯である。

私が好んで描くのは、人跡未踏といった景観ではなく、人間の息吹がどこかに感じられる風景が多い。しかし、私の風景の中に人物が出てくることは、まず無いと言ってよい。その理由は、私の描くのは人間の心の象徴としての風景であり、風景自体が人の心を語っているからである。

私は古い小さな町が好きである。その家の壁には、何代もの人々の体温がしみこんでいる。その町の人の生活には、人間らしいゆとりが保たれているのを感じる。ドイツの古都などでの窓辺にも美しく花を咲かせているのを見るが、それは外を通る人への親しい挨拶のことばである。家の中から見ると、花はそれぞれ外の方を向いてしまい、通りから眺めたほどの美しさは見られない。また、窓そのものの造りにも楽しい工夫が見られる。

私が常に作品の題材にしたり、随筆に書いているのは、清澄な自然と素朴な人間性に触れての感動が主である。なぜなら、現代は文明の急速度の進展が自然と人間、人間と人間とのバランスを崩し、地上の全存在の生存の意義と尊さを見失つ危険性が高まってきたことを感じるからである。平衡感覚を取りもどすことが必要であるのは言うまでもない。清澄な自然と、素朴な人間性を大切にすることは、人間の暴走を制御する力の一つではないだろうか。人はもっと謙虚に、自然を、風景を見つめるべきである。それには旅に出て大自然に接することも必要であり、異なった風土での人々の生活を興味深く眺めるのもよいが、もっと身近な、たとえば、庭の一本の木、一枚の葉でも心をこめて眺めることが大切である。そうすることによって、根源的な生の意義を感じ取ることができるであらう。

（熊本県）

問一 「何代もの人々の体温がしみこんでいる」とあるが、筆者は「古い小さな町の家」を見てどのように感じているのか。次から選び、記号で答えなさい。

ア 先祖代々受け継がれてきた、あたたかみのある人々の心や生活の歴史などがうかがわれるように感じている。
イ 何代も昔から生活の苦勞に耐えぬいてきた人々の、たくましい生き方が今も伝わっているように感じている。
ウ 昔から、窓に花を飾るなど他人に対して気をつかってきた人々の苦勞のあとがしのばれるように感じている。

問二 「平衡感覚」とは何を感じとる感覚か。文中のことは抜き出して書きなさい。

問三 この文章で述べられていることと一致しているものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 北欧の旅で見た針葉樹の森と湖が続く風景には、人を拒絶する美しさがあり、私は強く心ひかれた。
イ ドイツの古都の家々の窓辺に咲く花のように美しく生きることが、人間にとって大切なことである。
ウ いろいろな風景を見てきたが、多く私の絵の対象となったのは人間の生活が感じられる風景である。
エ 生きることの意味や生命の尊さを感じとるためには、身近な自然をよく見つめることが大切である。
オ 身近な自然を興味深く観察するのは大切であるが、風景そのものが人の心を語ることはありえない。

「解答」

問一 ア

問二 自然と人間、人間と人間とのバランス

問三 ウ、エ

【】（海を見つめていると）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

海を見つめていると、夕暮れは音もなくやってきた。今まで雲間隠れに光の束を海に投げ込んでいた太陽が、ようやく顔を出したかと思うと、それはもはや、水平線すれすれになっている。空にからまった光の糸をたくり寄せながら海にしみ込むように沈んでゆくと、海は飲み込んだ太陽と溶け合って紫色になり、次第に空とも海とも区別のつかぬ 暗やみとなっていく。

人が行くのか影が行くのか、はっきりと区別のつかぬほどやみが濃くなってくると、海辺に面したホテルの部屋部屋から明かりが漏れてくる。波打ちぎわに建つホテルのレストランには、日没とともに戸外のテーブルの上をろうそくの明かりをともす。

騒音の町に住んでいるならば、このような光景は恐らく日常生活に無縁のものに違いない。事実、無縁であった私は、その風景が単なる風物でなく、まさしく現実の生活の中に息づいていることが不思議な気さえした。自分の生活のこれほど身近に海があると感じたことはかつてなかった。

海は私が大人になるにつれて遠ざかり、見えなくなった。そして湾は急速に汚れた。子供のころ見た海を見ようとすれば更に車で何時間も走らねばならない。潮風の香りは薄れて、生暖かい人間のおいと工場のおいが吹きすぎるだけになり、日常生活からいつの間にか海が近いという感覚はなくなってしまった。

毎年、元日にN山へ登ることを恒例にしていたのも、海からの日の出を見ながら目的地に向かう感激を楽しみにしていたからでもあった。それが、海岸が埋め立てられ、団地が建ち並び、高速道路が走るようになると、便利にはなったが山へ登る道のりも味気なくなつた。いわゆる余韻とでもいうべき心のふくらみを感じる風景が、コンクリートの中に埋め込まれてしまったかのようと思えた。

この町はまだそういった機械文明につかりきつてはいない。町の人もそんな文明を拒んでいるようなところがある。だからまだ「」。潮風のおいも焼きたてのせんべいのように香ばしい。しかし残念ながら、それゆえに若者は出て行かねばならない町なのである。ここに工場ができ、町が潤えば、海が遠ざがることを人々は知っている。若者が出ていかなければならない町は、この町ばかりではない。しかし皮肉なことに、そういうところであるゆえにまだ豊かな自然が残っている。

二つのものを同時に手にすることが困難なことは天の摂理ではある。人間はどちらも手に入れようと知恵をしばらくねばならない。「。こればかりはどちらも捨てがたい。人間は果たしてどんな答をだせるというのだろうか。」

やみの中で小さくつぶやき続ける波の音が聞こえる。

- 問一 本文中の「」の中に入れることばとして、最も適切なものを、次の1～4のうちから1つ選び、その番号を書きなさい。
- 1 海が騒音の中にある
 - 2 人間は海と無縁である
 - 3 海が人間の側にある
 - 4 人間は海を遠ざけている

- 問二 本文中の「」の中に入れることばとして、最も適切なものを、次の1～4のうちから1つ選び、その番号を書きなさい。
- 1 光と海
 - 2 知恵と感覚
 - 3 潮風と風景
 - 4 自然と文明

問三 本文中に、筆者が今来ている町とは違った場所での、自分の体験や考えなどを述べている部分がある。それはどの段落から始まっているか。その段落のはじめの三字を書きなさい。

問四 本文中に「暗やみとなっていく。」とあるが、「このことばの主語はどれか。それを文中からそのまま抜き出し、書きなさい。

問五 本文中に、潮風のおう町を訪れ、海を身近に感じながらも、なお、満たされない筆者の心情が擬人法を用いて表現されている一文がある。それを抜き出し、その文のはじめの三字を書きなさい。

(福岡県)

「解答」

問一 3

問五
やみ

問四
海は

問三
海は

問二
4

で、三十、四十の後になっても大勢^{おほい}子供がいれば、きつとすなっ子、ひがみっ子、不器量^{おろ}っ子のそばへ行つて相手になつてやる気持ちなのはうそではなかった。(D)「けれどもねこではこのしまつであつた。子供のときからの、長い、あわれなものの弱いものによせる心ではあつたが、それも結局は、いい加減な中途半端^{ちゆうつはんぱん}なものだったとしか思えない。そりゃそうなはずだ、愛されない恨みのうえに根をおろしてかろつじて・そう、ほんとにかろつじてだ・もつた愛情などは、しょせん平等なおおらかな愛とは言えないのだ。だめだなあと嘆息しながら、何十年の経て来た時間を考える。

問一 「A」にどんなことを入れたらよいか、次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア どっかりと

イ じつと

ウ ぼつんと

エ ちゃっかりと

問二 (B)「ふと」がかかるのはどの部分か。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア きらいかけて、

イ するのだろうか、

ウ 解せないものがある、

エ 気がついた。

問三 (C)「性質のただけだし」とあるが、ねこのどのようなありさまをさしてこいつにしているのか。本文中からそのありさまが述べられている部分を二十五字程度で抜き出して書きなさい。

問四 (D)「けれどもねこではこのしまつであつた」とあるが、これはどんな意味を表しているのか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 人間に対してはあわれなものの弱いものに愛情を注いできたつもりだが、ねこに対してはできなかった。

イ 自分の娘に対しては愛情を注いできたつもりだが、その他の人間やねこに対してはそれができなかった。

ウ 他の動物に関しては飼育に自信をもっていたが、ねこに関しては年輩の獣医師に注意されてしまった。

エ 人間の子供を愛することにはまだ自信がもてないているが、小ねこを愛することには自信がわいてきた。

- 問五 この文章で筆者が最も強く表したい気持ちは次のどれか。ア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。
- ア 二匹の小ねこをもらってきたが、うまく飼うことができなかったことを悔いる気持ち。
- イ 年輩の獣医師に教えられて知った、小ねこの正しい飼育の心得を、みんなに知らせたい気持ち。
- ウ 小ねこを飼ってみて知った、自分の人間的いたらなさを、しみじみと反省する気持ち。
- エ あわれな小ねこによって呼びおこされた、何十年も前のあわれな自分を、なつかしむ気持ち。

(栃木県)

「解答」

問一 ウ

問二 エ

問三 人が手を出すとうなり声をあげて物の下へ逃げこむ

問四 ア

問五 ウ

【】(孤独のゴリラとして知られているザーク)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(孤独のゴリラとして知られているザークという名のゴリラのことを描いた作品の一部)

ゴリラは、青いリンゴをかじっていた。

つややかに光る黒い毛におおわれたそのからだは、思いのほかの美しさだった。濃い紫とも、深い紺ともみえる影が、その毛の動きのうちに、チラチラしていた。ときどき開くたびにみえる口のなかで、真紅な色、鮮烈な印象なのである。彼は、前にたつ人間をろくに見もしないで、さささつと、リズムカルに歩いたり、つくられた木の株に腰をおろして、空を眺めながら小首をかしげたりした。

平日のまひるま、動物園の中に散らばっているのは、ほとんどがおとな。「孤独の女ゴリラあらわる」と私も威張ってザークの前にたつてみたけれど、ザークはこちらを、見てもくれない。その、空を見上げる彼のきれいな目をみると、そしてそのあかい口にかまれている青いりんごをみると、秋の明るさが見たいそう清潔である。

私は、ザークのように純粹ではないから、とてもザークの話相手にはなれない。彼は敏感で、へんな発音で名を呼ばれるとソツポをむくそうだ。彼は 私の及びもつかない高いところで、きよらかな歯をむきだして、すっぱいりんごを食べている。その無頓着な彼のありさまに、うれしさがこみあげる。久しぶりに、美しい生き物を見たような気がして、私は、心からほえんでしまった。彼こそまことの孤独の王者である。

人間に微笑があることをく人間にのみゆるされた美しきことだと、私は長い間考えてきた。ところが、七年ほど前に、ある八十歳余のご老人から微笑は人間の欺瞞のもとと教えられて、びっくりしてしまった。私はやっと微笑が悪徳でもあることを知った。そういわれてみれば、私の微笑はいやらしかった。私は自分の微笑が信じられなくなり、それまでの生きかたをかえりみてみじめな思いをした。

「私はいつも、ほほえもうと思いつながら、ほほえみきれない。」といつていらしたその孤高の老人は、さきごろ交通事故で亡くなられた。人間への愛深さがために、ついに微笑しなかつたためらしい人のひとりであった。真の愛なくして、微笑のみいたずらに多い私を痛烈に知らされたことへの感謝はじつに大きい。しかし、人間の女である私は、とてもザークのような目で虚空のみ見つめ

て暮らすことができない。みずからは、濁った微笑をつつしんではいても、やはり、あたたかな人の微笑にすっぱり包まれない。そういつ甘えを心に蔵しているかぎり、ついものほしそつに、ほんとの微笑をきよるきよる求めることになる。人にほえんでももらいたくて、見苦しいみだれをみせてしまう。

ザークに、そんなあさましさはない。

彼はなににも、甘えていない。

(島根県)

問一 「孤独の女ゴリラあらわると私も威張ってザークの前にたつてみたけれど、ザークはこちらを、見てもくれない」には筆者のどのような気持ちがあらわれているか。次から選び、記号で答えなさい。

ア ザークは人間を見ることがより空を見ることのほうが好きなのだという気持ち

イ 人間の孤独は暗いものだが、ゴリラの孤独は明るいという気持ち

ウ ザークは私の孤独など問題にもしていないのだという気持ち

エ ゴリラの孤独を理解しようとしたが理解できなかったという気持ち

問二 「私の及びもつかない高いところ」とあるが、筆者の感じとっている「高いところ」とは何をさすと考えられるか。次から選び、記号で答えなさい。

ア ザークの目の位置

イ ザークの心境

ウ ザークの清潔さ

エ ザークの愛情

- 問三 「美しい生きもの」とあるが、筆者はザークのどのような点を美しいと思っているのか。次から選び、記号で答えなさい。
- ア 鮮烈な印象の口
- イ 空を見上げる目
- ウ 彼の敏感さ
- エ 彼の無頓着さ

- 問四 「人間の女である私は、とてもザークのような目で虚空をのみ見つめて暮らすことができない」には筆者のどのような気持ちがあらわれているか。次から選び、記号で答えなさい。
- ア 人間の女としての宿命を感じている。
- イ 人間とゴリラとの距離を感じている。
- ウ 自分が男でないことに憤りを感じている。
- エ ザークにつらやましさと反感を感じている。

問五 「彼はなににも、甘えていない」のようなザークの姿について、最も簡潔にまとめて表現しているところを文章中から十字以内で抜き出して書きなさい。

「解答」

- 問一 ウ
- 問二 イ
- 問三 エ
- 問四 ア
- 問五 まことの孤独の王者

【】（私はなにかにつけて大塚さんのまねをした）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私はなにかにつけて大塚さんのまねをした。大塚さんが男の子のような言葉を使うので、私も、「しやがった」などと言った。そう言つとなにか急に強くなったような気がするのだ。学校の帰りに、野原の草を分けてひき蛙かまを探す。見つけた蛙を手でつかむことも、大塚さんに軽べつされまいという一心のためにやってのけた。そうして私は少しずつ、こわがらなくなり、恥ずかしがらなくなり、学校は楽しいものになっていったのだ。

教室で私は、大塚さんの前の席に座っていたが、よく手を後ろへまわして大塚さんのひざ小僧をくすぐった。退屈になるとそれをやる。あるとき、大塚さんがくすぐったがつて笑い出したので、先生が怒った。

「大塚、なにを笑っているのか。わけを言いなさい。」

私はギョツとした。大塚さんの一言で、私も一緒に立たされることになるだろう。しかし、大塚さんは言った。

「昨夜、弟が言ったネゴトを思い出して、おかしくなったからです。」

「授業中にそんなことを思い出す奴がいるか。」

大塚さんは叱しつられ、私は助かった。

私はそのときほど大塚さんがえらいと思つたことはない。また、そのときほど自分を恥ずかしいと思つたこともない。たいていの女の子は、自分を叱られるような目にあわせた相手をかばつたりはしないだろう。大塚さんのそのときの男らしさ（？）は、私に友情というもののありがたさを教えてくれたような気がする。

大塚さんは、私の人生の最初の友だちだ。私は大塚さんによつて変わった。小学校を出て以来、私たちは離ればなれになったが、大塚さんは今でも私の胸から消えない。

友だちは吸収しあうものだ。いいものも悪いものも一緒に貪婪たんぱんに吸収し、自分がないものを補い肥える。そんな吸収のない友情は、長い人生の中では消えていってしまうものである。

問一 「私はそのときほど大塚さんがえらいと思ったことはない」のような気持ちになった理由を具体的に書きなさい。

- 問二 「友だちは吸収しあうものだ」とあるが、「私」が大塚さんから吸収したものは何か。次から二つ選び、記号で答えなさい。
- ア 慎重に行動しようとする心
 - イ ものこを深く追求する心
 - ウ 寛大でものこにこだわらない心
 - エ ものおじしい強い心
 - オ 真実をつらぬこうとする心

問三 この文章で筆者の言いたいことは何か。次から記号で選びなさい。

- ア 真の友情とは、お互いに吸収し合うことだ。
- イ 真の友情とは、おたがいにまねをし合うことだ。
- ウ 真の友情とは、お互いにかばい合うことだ。

「解答」

問一 すぐに私とは関係のないことを言って、自分が叱られる原因を作った私をかばってくれたから。

問二 ウ、エ

問三 ア

【】（今年のお正月は）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今年のお正月は、アメリカ製のビニールだこ・ゲイラカイトが大流行だった。正月の子どもの遊びとしては古典的なこあげも手づくりから輸入品へと奇妙な変貌をとげたわけで、手づくりに親しんだ親の世代には、いささか衝撃的だったはずだ。

ぼくもそのひとりで、おもちゃ屋の店頭にこれみよがしに飾られたゲイラカイトに、ひそかに反感を抱いていた。が、小学二年の長男は、暮れのうちはやばやと九百円のビニールだこを買い、去年までの屈辱をいっきにはん回しよつとはかった。いままで毎年彼のたこはくるくる回って墜落するか、走りまぐる彼の足がとまると同時に静かに落下するかで、ちっともうまく上がらなかった。しっぱの長さやバランスについて、口うるさくケチをつける父親を、うらめしそうに見上げていたものだ。

今年こそ、と思ったのだろう。「おれはやらないからな。」という父の声を無視し、「これはしっぱなんかいらんだぜ。」と、得意だった。ぼくは、黙って魚釣り用のリールを貸してやった。はじめての大成功に夢中になって、糸で手を切るのは必定だったからだ。

米航空宇宙局（NASA）の技師が設計したと伝えられるゲイラカイトは、力学的にも完璧なものらしく、大した風もないのに、事実よく上がった。糸を全部出さきって、巻きもとせず泣いている子もいたし、糸の先を自転車にしばりつけて、羽根つきの仲間入りをしている「A」派もいた。

しかし、古い世代はつい手づくりの郷愁に足をとられてしまう。千円前後のたこを買って、それで上がらなかったら詐欺ではないか、たこなんてものは、ひこをけずり紙をはって、自分で作るからこそ値打ちがあるのだ。いや、買ったものにせよ、重心を整えたり、しっぱの長さを工夫したり、その子なりの創意を生かせるのが、この遊びのよさだったのではないか。

けれども、子どもたちの冬休みが日一日と残り少なくなっていくころ、ぼくはふと、そんなことはどうでもいいと思って、自分のこだわりを捨てた。

毎日子どもたちは、来年はもつ家が立ち並んでしまつかも知れない空き地へかけて行って、何時間も冬の青空を見上げてすごした。彼らは口々に、糸の引きがどれほど強かったか、自分のたこがどのくらい小さくなったかを、興奮して語ってきかせた。ぼくの表情に不信の「B」を読みとると、「じゃ、もう一回やってみるからさ、おじさんもおいだよ。」すでに星の出はじめた冬空に、子ども

もはまだ未練を残していたのだ。

彼らは久しぶりに空を見上げたのだった。空そのものと「C」をやってきたのだ。その興奮は、やはり正しいし、大切なものではないか。

やがて彼らの一部は、ビニール製にあきたらなくなって、自分でたこを作るようになるかも知れぬ。が、そうならないとしても構わない。子どもがいま、新しい体験に心をふるわせているのに、それが自分たちのかつて体験した興奮と幾分異質だからといって、それを理由に文句をつけるのはおとなの傲慢であろう。

手づくりの大切さが喧伝された昨年、一昨年のお正月に起こらなかったたこあげブームが、ビニールだこで達成されたのは、とても象徴的なことだと思う。おとな主導のブームは「D」にすぎず、子ども文化における真の熱狂は彼らの「E」にのみ基づいている、という意味で。無理にたてまえをふりかざすより、本音の側に加担する方が自然だし爽りも多いのではあるまいか。

問一 「今年こそ」の後に省略されている叙述を、文中の他の一部分を抜き出して補え。ただし、その初め・終わり各四字で示すこと。

問二 A、B、Cの「」のを補つのに最適の語を、次のうちから選び、記号で答えなさい。

- A ア 無精^{ぶしやう} イ 多情 ウ 発展 エ 余裕 オ 積極
- B ア 声 イ 形 ウ 色 エ 目 オ 光
- C ア ならめっこ イ つなひき ウ 話し合い
- エ 力くらへ オ がまんくらへ

問三 たこあげ遊びに関して、筆者の、息子^{むすこ}に対する父親としての愛情は、どのような行為に読みとることができると思つか。本文をそのまま抜き出して二箇所示せ。ただし、それぞれ、初め・終わり各六字(句読点も字数に含む)で示すこと。

問四 「自分のこだわり」とあるが、筆者の「こだわり」は、何に起因して起こっているか。文中の表現に即して三十字以内）句読点も字数に含む）で答えなさい。

問五 D、Eの「」を補つのに最適な語を、それぞれ文中から選び出せ。

（東海高）

「解答」

問一 （初め）（去年まで）（終わり）（回しよう）

問二 A エ B ウ C イ

問三 1（初め）しっぽの長さ（終わり）ケチをつける

2（初め）ぼくは、黙っ（終わり）してやった。

問四 その子なりの創意が生かせる手づくりだこへの郷愁から。

問五 D たてまえ E 本音

念であるといつてよいであろう。いま、ホテルのロビーの男の子は母親によってそうした言語慣用へと引き寄せられていったのであった。

問一 A「海がそばへ来る」という表現を、せつ子は、どのように思っているか。次から選り記号を書きなさい。

A せつ子は、男の子が、せつ子の注意を引くために、大げさに表現している、と思っっている。

I せつ子は、男の子が、自分の感覚で海を見ており、波の感じをよく表現している、と思っっている。

U せつ子は、男の子が、実感をもとにして工夫をこらし、じょうずに表現していると思っっている。

E、せつ子は、男の子が、海と波との区別をしていないのは残念だ、と思っっている。

問二 B「漣つわ、波よ、波が来たのよ」とあるが、筆者は、母親らしい婦人がなぜこのように言っただと考えているのか。説明の部分に、具体的に述べてあることばを用いて答えなさい。

問三 C「せつ子なる人物の感慨」とあるが、せつ子の気持ちを最もよく表している表現を、小説の部分から十字以内で抜き出して書きなさい。()。も一字とする()

問四 D「男の子のことばが成人の世界のことばへと」修正「されていく」とあるが、説明の部分でこれと同じことを述べた部分がある。その初めと終わりの三字ずつを抜き出して書きなさい。

問五 E「海は、たとえば津波の時でもなければ『そばへ来る』ものではなく」に述べられている海の意義特性を、筆者はどのようにことばにまとめて表現しているか。説明の部分から抜き出して書きなさい。

問一 イ

問二 母親らしい婦人は、波はやってくるもの移動するものであるが、海はやってくるもの移動するものではないと常識的に考えているから。

問三 少しがっかりした

問四 (初め) 男の子 (終わり) いった

問五 マイナス移動性

【論説人生】

【】（幸福については二つの考え方がある）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幸福については二つの考え方がある。「ア」、幸福を外的な条件に求めるものと、内的な状態とするものと。客観的と主観的、物質的と精神的と言ってもよい。すべての幸福論はこの二つの立場に要約される。

幸福とは外的なもの、単に精神的なものではなく物質的なものである。私たちはこの考え方を決して軽蔑（けいけつ）することはできない。幸福は精神的なものであると言って物質的な幸福をゆるがせにすることは、自らをあざむくことであるのみならず、精神的な幸福をも失うことになる。着る物、食べる物、住む所があることは幸福である。健康に恵まれ友達に恵まれることは幸福であり、これに反してそれを欠くことは不幸である。これは、あたりまえのことだが、案外認められていないように思われる。

「イ」、この外的な幸福を固定的に考え、これがなければ幸福ではないと考えると大きな誤りに陥ることになるだろう。健康であることは確かに幸福だが、病気の者が必ず不幸だとは限らない。たとえ身体は丈夫でも気持ちが安らかでないならば幸福とは言えないし、たとえ衣食住が十分でなくても、平和な気持ちで暮らしている人は幸福である。この点で、幸福は、「ウ」、気持ちの持ち方にあるというのにはやはり本当だ。自分で、自分は不幸だと思っている人は不幸であるし、自分は幸福だと思っている人が幸福なのである。人はあることによって苦しめられるよりも、そのことについて抱く自分の考え方によっていっそう苦しめられるものだ。健康を害したり物質的な不自由によって不幸であるよりも、それらを不幸だと考える考え方によって人はいっそう自分を不幸にするものである。

幸福を単に物質的なものと考えて、幸福を外に求めている限り、私たちの欲望は強まり不満はやむことがない。現に恵まれているささやかなもののなかに私たちが喜びを見出すならば、そこには大きな幸福があるに違いない。

問一 本文中の「ア・イの中に入れることはとして、最も適切なものを、次の1～5のうちからそれぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。

- 1 たえば
- 2 あるいは
- 3 けれども
- 4 したがって
- 5 すなわち

- 問一 本文中の「ウ」の中に入れることばとして、最も適切なものを、次の1～4のうちから1つ選び、その番号を書きなさい。
- 1 内的な状態に左右されるのではなく
 - 2 外的な条件に左右されるのではなく
 - 3 内的な状態が優先するのではなく
 - 4 外的な条件が無視されるのではなく

問二 「ゆるがせにする」とあるが、このことばの意味として、最も適切なものを、次の1～4のうちから1つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 物事をいいかげんに取り扱うこと
- 2 物事がゆるやかに変化すること
- 3 物事を大切に考えて受け入れること
- 4 物事がゆれ動いて不安定なこと

問三 「幸福を外に求めている」とあるが、これと同じ態度・考え方を表しているものとして、最も適切なものを、次の1～4のうちから1つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 客観的条件には恵まれなくても平和な心を保つ
- 2 衣食住などについて欲望を持ちつつける
- 3 現在ある物質的条件の中にもささやかな喜びを持つ
- 4 病気の人が必ずしも不幸だとは限らない

問五 「自分は不幸だと思っている人は不幸である」とあるが、これと同じ文の組み立ての文を、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 夕日が沈み星は美しく輝き始める
- 2 南側の建物がぼくたちの学校の講堂だ
- 3 新しい生徒が四月には入学してくる
- 4 友達が貸してくれた本はおもしろかった

問六 本文のまとめとして、最も適切なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書きなさい。

- 1 幸福は内的な状態を言うのであって、自分の考え方次第で幸福になったり不幸になったりする。
- 2 幸福は外的な条件に求めるもので、これを軽視することは、精神的な幸福をも失うことになる。
- 3 幸福には物質的な面も大きい、その人の心の持ち方によっては、ささやかなもののなかにも幸福がある。
- 4 幸福には精神的、主観的な面が大きいので、私たちの欲望は限りなく、不満はいつまでもやむことがない。

(福岡県)

「解答」

- | | | | | |
|----|---|---|---|---|
| 問一 | ア | 5 | イ | 3 |
| 問二 | | | | |
| 問三 | | | | |
| 問四 | | | | |
| 問五 | | | | |
| 問六 | | | | |

【1】（「ピュロンの豚」という有名な話がある）

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「1」「ピュロンの豚」という有名な話がある。昔ピュロンというギリシャの哲学者が航海をしていたところが大きな嵐が起こって、船は山のような大波にもちあげられるかと思うとまた波間に沈み、乗っている人達は生きた心地もなく、あわてふためき、帆柱にしがみついたり泣き叫んだりした。「A」その船には一匹の豚がいて、豚はいくら船が揺れて今にも沈みそうになっても少しもこわがらず、平気でいつものように鼻をならしていた。哲人ピュロンは、この豚を見るがよい、と言って周囲の人達をたしなめ励ましたということである。どうにもならない事柄に対していたずらにこわがったり嘆いたりすることは不幸を一層大きくするばかりであり、豚に劣ると言われても仕方がない。

「2」しかし人間は豚ではなく、豚以上のものだ。いたずらにおそれたり嘆いたりするのは愚かだが、船は必ずしも沈むとは限っていない。かと言って沈まないとも限っていない。してみれば豚のように何も知らないで落ちついていいることは本当の幸福ではない。豚とは異なる人間は、おそれると共にまた理性と意志によって恐怖の対象を取り除く力をもっている。人は、努力をしないで、いたずらに嘆くとき豚に劣り、自然や運命を自分の力で克服できる点で豚にまさっているのである。そして、あわてたり、いたずらに心配したりするだけでは正しい判断をすることができないし、逆にまた、現実の事態と取り組んで一生懸命に努力していれば、いたずらに泣き叫ぶこともないだろう。

「3」幸福は物質的条件にあるのではなく心のもち方にあると言っても、それは何も努力せず、何も考えず、豚のようになれという意味ではない。「B」「いくら考え、いくら努力してもどうにもならないこともある。しかしほんのわずかな努力もはいりこみ得ないほど困難な事態というものはほとんどないと言ってよいのではあるまいか。どうにもならないと言いながら、それを怠惰の口実にしている場合が多いのではないだろうか。諦めは一見幸福に似ているが、実はこれほど幸福から遠いものはない。外的な条件を一步一步幸福に近づけてゆく努力、この努力の中に、内的な幸福が既に生まれているのである。

「4」私達をとりまく不幸は多い。それを数え出したら限りがないだろう。だがその前に立ちどまって、まるで自分だけが不幸であるかのように、自分が何か悲劇の主人公でもあるかのように、自分の不幸を誇張して考えることはやめようではないか。自分の不幸を誇張することは不幸を一層大きくするのに役立つに過ぎない。不幸はいたずらに嘆くべきものではなく克服すべきものであ

り、私達の「C」はそのために「E」であるのである。

問一 A・Bに最もよくあてはまるものを、それぞれ次の各群の中から選び、記号で答えなさい。

A ア つまり イ したがって ウ すると エ ところが

B ア だから イ それとも ウ もちろん エ たとえば

問二 「豚はいくら船が揺れて今にも沈みそうになっても少しもこわがらず、平気でいつものように鼻をならしていた」という豚の様子について、筆者はどう考えているか。筆者の考えを表す一文を「1」「2」の段落から抜き出し、その文の初めと終わりのそれぞれの五字を示せ。

問三 「現実の事態」とあるが、このことばと置きかえても文の意味が同じになる五字のことばを「1」「2」の段落の中から二つ抜き出しなさい。

問四 「C」にあてはまる語句を次から選びなさい。

A 運命と現実 イ 幸福と運命 ウ 理性と意志

E 意志と現実 オ 幸福と理性

問五 筆者が最も強く述べようとしているのは、次の中のどれか。一つ選び、記号で答えなさい。

A どんなに努力しても解決できないような困難な事態は、この世の中にはないということ

I 外的な悪条件のある時こそ、ピュロンの豚のように心の平静を保つことが大事であるということ

U 幸福は現実の事態を切り開き、不幸を克服する努力をしなければ手にはできないということ

E 人間は努力次第で幸福になれるのだから、物質的なものを幸福の条件に考える必要はないということ

(宮城県)

「解答」

問一 A エ B ウ

問二 してみれば福ではない

問三 恐怖の対象、自然や運命

問四 ウ

問五 ウ

【】(悲しみは長く喜びは短い)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

悲しみは長く喜びは短いということをだれでも知っている。人間は憂いには同感しやすく、陽気な気分には同化されにくいのがふつうである。人の苦しみに接して、自分も相手とともに悲しむのは至ってやさしいことで、同情ということばが相手の苦しみをともにするという語義であることから理解がつく。しかし逆の場合、相手が喜んでいる状態において、自分も彼と一緒に喜ぶというのはやさしいわざでない。新聞の上で孤児の身の上の記事などを読めば、私もはやく同情して「A」「しまうものであるが、だれそれが苦勞の末に幸福な境涯に入れたという記事の場合には、高々それでよかったとつなすく安堵の気分をでないし、ことによれば少々の羨望や嫉妬の気持がまざるかもしれないのである。自分の友が展覧会ではじめて賞をつけてうれしがっているとき、そのそばの自分が「よかった、よかった」と彼のために喜んでやることは「く自然に」力(できるけれども)、「ほくもうれしくて仕方がない」と(B)言えるほど彼と同じ喜悅の状態になることはむずかしい。そうしたことはを言えたとしたら、たいていは愛想作りのため、表情の方はそのことばにそぐわぬ(C)動じないものにちがいない。友の憂いに(K)憂えるだけでなく、彼の喜びをもとにわかつてる人は最上の友である。

このように人が苦しみや悲しみの状態にあれば、自分が優越な安心な位置を占め(D)られるから、それで相手に対してゆとりをもって(K)悲しめるわけであり、先方が幸福になればその逆の嫉妬の気持になるのだという解釈がある。しかしこの場合のように利己的な態度と、同苦同歎の場合とは模様が別である。自分が優越した位置にあって相手に悲しんでやるのは憐れみであって、彼とともに悲しむ同悲とはちがう。憐れま(E)れるということとは当人にとって屈辱である。憐れまれるよりは、(F)憎しみを(K)うつける方がましだと思ふ人もいる。

精神医学の領域で次のような事実がある。事業が左前になったり、重い病をして長いこと欠勤したあと再び出社してから、思うように部下を掌握できなかつたりして、精神的に打撃をつけたのが動機となってひどく気が沈み、長いこともとに戻らないことがある。「ものごとを何でも悲觀的に」(G)考えるようになってしまいました。哀れなことはかり眼につくのです。新聞に親子心中がでるともつたまらなくなってきました。電車のなかでみすばらしい母がいて、可哀そうで可哀そうで……自分もああなってしまふのじゃないかとみじめな気持で一杯になって、手で顔をおおいたくなってしまう。」

このように何か不幸な経験があったのをきっかけに気が沈んで、苦しみと悲哀にばかり感じやすくなることは非常に多い。ところで逆に何かよきこぼしい知らせが入った場合はどうかというと、むずかしい入学試験に合格したとか、宝くじが思いがけなく当たったとかのように、実生活上ではこれ以上の吉報がそうあるものでないと思えるような状況が発生した場合、「手の舞い足の踏むところを知らぬ」精神状態となる。すなわち反応的に急激な喜悅の状態が発生したわけである。けれどもこの強い情緒は急速にしまつてしまつたもので、もつと長びいて愉快であればよいものをと残念なほど消えるのははやい。吉報が入つたために、うれしくて幾日間もつづけて躍りまわっているといったことは、想像しただけでもありえない。

したがって他人の喜びに同感するのがむずかしいのは、他人の幸福にはがまんがならないという「G」的な心に由来するのではなくて、「H」の喜びさえたちまち去つてしまうことをおもえば、本来悲しみは長く喜びは短いものなのだとあらためてわかる。

問一 「A」に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

A 身につまされて

I 身を入れて

ウ 身のほどを知って

E 身になって

オ 身もふたもなくなつて

問二 (B)の「言える」は可能動詞である。(カ)(キ)(ク)(ケ)(コ)の中から可能動詞を一つ選び、記号で答えなさい。

問三 (C)の「動じない」とは、何に対して動じないというのか。五字以内の文中の語句で答えなさい。

問四 (D)「られる」と(E)「れる」を文法的に区別せよ。

- 問五 (F) 「憎しみをうつける」者(自分)と、先方との優劣関係は、次の中のどれが最も適当か。記号で答えなさい。
- サ 先方が優越した位置にある
 - シ 自分が優越した位置にある
 - ス 先方と自分が対等の位置にある
 - セ 自分・先方ともに優越した位置にある

問六 第三段落と第四段落では、ある原因によって気が沈んだり(これを「甲」とする)、喜悅の状態になったり(これを「乙」とする)する事例があげられているが、「甲」の及ぼす影響と「乙」の及ぼす影響の最大の違いは何か。甲と乙の記号を用い、三十文字以内で書きなさい。

問七 「G」に入る最も適当な熟語(漢字二字)を、文中より選んで書きなさい。

問八 「H」はだれのことか、書きなさい。

「解答」

問一 ア

問二 ク

問三 彼の喜び

問四 D 可能の意味の助動詞「られる」、E 受身の意味の助動詞「れる」

問五 シ

問六 甲は長いこととに戻らず、乙は残念なほど消えるのがはやい

問七 利己

問八 自分自身

・【】(羞恥心という言葉は)

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

羞恥心という言葉はさまざまの場合に、さまざまに解される。ごく普通に恥ずかしがり屋というふうに受け取ってもいいが、私は「ここでは「はにかみ」の心としてとりあげたい。むしろこれも問題で、(A)、自分の本心を言いたいとき、心が臆して、他人に追従したことが言えない場合がある。自分のそういう臆病を弁護するために、「はにかみ」は大切だと言つたら、これは一種の」と言っていていいだろう。

私はまず、「露骨なもの」に対する それは嫌悪の情だと解したい。この露骨なものも、人によって受け取り方がちがうが、齒に衣を着せず、自分の思っていることを言うことは大切だし、それを露骨と思いちがいはなるまい。

(B)、そういうときでも、自己宣伝や自己誇示がそこに入ったらおしまいである。人々の拍手を得たいために、いわば大向こうをねらって、痛快そうな言葉を吐く人がいるが、この場合はだれだって見えずいた「露骨さ」がいやになるだろう。

たとえすばりと言つときでも、自分はけんそんな心を持ち、もしやまちがっていないかと、反省を一方に忘れない、そこに私の言う「はにかみ」がある。朔太郎は「塩のようなもの」と言っているが、一種の辛い自己抑制と言つてもよい。自分の心の中に、控え目な「恥ずかしがり屋」を一人住まわせておいて、つらい思いをしながら、その上で 齒に衣を着せずに発言するならば、その言葉にはじめて味が出てくるだろう。

(山口県)

問一 文章中の(A)、(B)に入る最も適当なものを、次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ まさか ウ すなわち

エ たとえば オ そのうえ カ したがって

問二 文章中の「」に入る最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 道徳 イ 悪徳 ウ 美德 エ 高德

問三 「それ」は、何をさしているか。文章の展開に注意して答えなさい。

問四 「自分はけんそんな心を持ち、」を比喩的に表現している部分を正しく書き抜きなさい。

問五 「齒に衣を着せずに発言する」とはどういう意味か。文章中の言葉を使って説明しなさい。
(山口県)

「解答」

問一 (A) (E) (B) (ア)

問二 イ

問三 「はにかみ」の心

問四 自分の心の中に、控えめな「恥ずかしがり屋」を一人住まわせておいて

問五 自分の思っていることをすばじりという。

【1】（人生の意味なら）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

人生の意味なら、わざわざ旅に出なくても探求できるではないか、と思われるかもしれませんが、たしかに、本を読んでも、友だちと話し合っても、ひとり黙想しても、人生の意味は探求できません。私たちの毎日は、日々人生の探求と言ってもいいでしょう。けれど、そのような探求心を日常生活が鈍らせてしまうのです。勤め先のオフィスで、喫茶店で、デパートで、歯医者待合室で、自宅の居間で、だれが人生の意味について考えつつつけられるというのでしょうか。いや、日常生活は人生の意味を忘れさせる世界だと言ってもいいのです。

だから芭蕉は旅に出たのです。芭蕉の時代には、テレビも、ゴルフも、タイム・レコーダーもありませんでした。深川の芭蕉庵にわび住まいして句作に余念のない毎日でした。にもかかわらず、わが庵いほにいる生活は、やはりそれなりに日常の習慣をつくりだします。そして、習慣化した日常生活というものが、人生の探求心を麻痺しびさせてしまうように彼には思えたのです。芭蕉は旅人になることによって、探求者になりました。

「A」、蕪村は逆でした。彼は日常の世界で探求者になることによって、旅人でありつづけようとしたのです。日常の雑事とたたかいながら。

もし、旅人と探求者が同じ人間の姿だと言つならば、旅に出なくとも、毎日の生活の中で人生を探求することによって、旅人たりうるはずです。旅に出られなかった蕪村は、日常生活の中で自分をみつめつづけることによって、旅人になりました。

旅人とはだれか。私は、旅人とは、「B」と思います。なにも旅に出る必要はありません。自分が月日の中のひとりの旅人であると気づいた瞬間、彼は旅人になるのです。反対に、いくら見知らぬ山河をさまよっても、自分が人生の旅人であるという自覚を持たないかぎり、彼は旅人ではありません。（C）この意味で蕪村は芭蕉におとらぬ旅人だったと私は思うのです。いや、彼は旅に出られぬだけに、芭蕉よりも、もっと苦しい旅人ではなかったかと思えます。

（沖縄県）

問一 文章中の「A」にはいるべき語を、次のア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア むろん イ ところが ウ つまり エ まして

問二 文章中の「B」には、筆者の旅についての最も言いたいことがある。そのことを次のア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア 自分が人生の旅人であると自覚している人間のことだ。

イ 自分がいつも旅に出たいと思いつづけている人間のことだ。

ウ 自分が旅にあると自覚して、すぐれた俳句を作る人間のことだ。

エ 自分が見知らぬ山河をさまよい、旅をつづける人間のことだ。

問三 (C)で「この意味で蕪村は芭蕉におとらぬ旅人だった」とする、その理由は何か。次のア～エの中から一つ選び、符号で答えなさい。

ア 芭蕉は実際に旅に出ることで、すぐれた作品を生み出したのに、蕪村は自宅にあって、豊かな想像力ですぐれた作品を創造したから。

イ 芭蕉は自分が旅をよむ俳聖であると自覚したのに、蕪村は平凡な才能で俳句作りに身をやつしている文学者だと自覚していたから。

ウ 芭蕉は人生の探求心が麻痺するのを恐れて旅をつづけたのに、蕪村は人生の探求心を保ちつづけたと自負していたから。

エ 芭蕉は旅人になることで、人生の探求者になったが、旅に出られなかった蕪村は日常生活の中で人生の旅人と自覚しつづけたから。

「解答」

問一 イ

問二 ア

問三 エ

【】(いかにも平凡な、ありふれた感想でありながら)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いかにも平凡な、ありふれた感想でありながら、折にふれては誰しもその感を新たにせざるを得ないといったことばがある。「月日のたつのは早いもの」ということばなど、古来何千何万回となく人の口の上についていながら、時として痛切にその感をいだかせられることばがある。中国でも昔から時の速さを、「光陰矢のとし。」と言っている。現代の人間が時の経過を実感するのは時計の針の動きによってであるが、時計の最も原始的なものは日時計であり、古代人が時を感じるのは日影の長さによってであった。それを端的に表したのが光陰という語である。中国の有名な詩の一節に、「少年老いやすく、学成りがたし。一寸の光陰軽んずべからず。」とあって、人生の老いやすさを嘆いている。西洋の諺にも、「A」と言っているが、まことに学問・芸術に志した者にとって、その道の高遠なことにくらべて人間の一生はあまりに短いものであった。みずから「無能無芸にただこの一筋につながる」と言って俳諧一筋を生命とした芭蕉も、この嘆きをくり返したにちがいない。「B」の冒頭に、「月日は百代の過客にして、行き交う年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老いを迎ふるものは、日々旅にして、旅を栖とす。」と言っているのは、李白の、「それ天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客にして、浮世夢の」とし。「を原典としているが、芭蕉はここにどまることなく、移り過ぎて行く時を実体として捉え、その推移の中に安住の地を見い出すという一つの悟りを示している。この、旅をすなわち人生の姿と見たことばの通り、芭蕉はこの後数年にして、元禄七年冬、「大阪の旅寓御堂前の花屋の裏座敷において、「C」を最後の句として生涯を終えている。門弟の日記によれば、芭蕉は重態の病床にありながら、「寝ては朝雲暮煙の間をかけり、さめては山水野鳥の声に驚く」風雅への執着を自ら嘆じたといふ。

問一 「A」「C」に最も適するものを後から選んで記号を書きなさい。また、「B」には適する書名を書きなさい。

A イ 歳月人を待たず。

ロ 学習に老齡なし。

ハ 芸術は長く、人生は短し。

ニ 月の照っている間に草を乾かせ。

ホ ローマは一日にして成らず。

C イ 塚も動けわが泣く声は秋の風

ロ 病む雁の夜寒に落ちて旅寝かな

ハ いざさらば雪見にこるぶとこるまで

ニ 旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる

ホ 白菊の目に立てて見る塵もなし

問二 次は、「老いやすさ」、「この」の文法的説明である。「内に適当なことはをそれぞれ補って、これを完成せよ。

は、「」を基本形とする」「活用 of 動詞の」「形に」「」を基本形とする」「詞から転成した」「やすさ

という」「詞が複合して一語になった」「詞である。は」「詞で」「」という語にかか

(東海高)

「解答」

問一 A 八 B 奥の細道 C 二

問二 (順に) 老いる・上一段・連用・やすい・形容・名・名・連体・ことば

【論説思索】

【】（毎年、暮れになると）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（ ）は段落の番号

毎年、暮れになると本屋さんの店頭で日記帳が山積みされ、そしてそれが、けっこう売れてゆく。日記帳を買って、三日坊主で終わる例も少なくはないだろうが、それを勘定にいれても、全国で数十万人の日本人が規則的に日記をつけているはずなのだ。後世の史家にとって、二十世紀の日本人の生活を再構成するための材料は、ふんだんに作られているのである。しかし、そもそも、なぜ人は日記というものをつけるのだろう。へつに後世のために日記をつけているわけではない。後世の人が、現代人の日記を利用することはあるが、それはかれらの勝手というものであって、現在のわれわれは、かれらのために日記をつけているわけではない。いったいなにが人間に日記をつけさせるのか。

ひとことでは、それは、たぶん変化の感覚、とでも名づけるべき特殊な感覚によるものである。きょうはきのうと違い、またあすもきょうと違うであろう、という日々の経験の感覚……その感覚がきょうという日に特殊な意味を与える。きょうという日に特殊な意味が与えられた瞬間、きょうを記録しておこうという欲求が生まれる。言いかえれば、日記というのは、日々が変化としてとらえられたときはじめて成立するのだ。

「私日記」の成立が比較的新しいこともたぶんその点と関係する。多くの人々にとって、（ア）毎日、かなり同質的なものであった。たとえば多くの農民にとって、（イ）きょうはきのうのことくであり、あすもきょうのことくであるだろう、という予想のもとに存在しつづけた。ウ（毎日同じようなことのくり返しである以上、へつに、この一日が特殊だ、などという感覚のはいりこむ余地はない。人間がそういう（エ）同質的時間の中に生きているかぎり、日記をつけようという気分なんかでてこないのである。日記は、個人の人生が変化に富み、可能性に富んだものとしてとらえられたときにはじまるものであった。

実際、歴史的にみても、西洋の場合ルネサンス期、日本でも、同じルネサンス的な室町時代に日記の傑作が作られはじめている。それは、社会と人生が揺れ動きはじめた時代であり、きょうという日が、まったく特殊な意味をもちはじめた時代であった。そこでは、人間は、貪欲とんよくにこの「特殊」を記録しないではいられなくなっていたのである。

はなしはべつだん歴史的考察にかぎらない。こんにちのわれわれの生活の中でも、日記への衝動が、変化の感覚と関係しあつて

いることを、われわれ自身がよく知っている。多くの人は、少年時代から青年時代にかけて日記をつける。それは、青春が変化と可能性にみちているからだ。きょうはきのうと違う、そしてあすはきょうと違うだろう、と青年たちは考える。かれらにとって、日々の成長は実感によってとらえることのできる性質のものなのだ。かれらは、日記をつける衝動をおさえることができない。しかし、青年時代が終わり、ある程度まで人生の揺れはがせばまってくると、人は日記をつけなくなる。単調な生活のくり返し、そこでは変化への期待もなくなるし、むしろ変化を避けようというメカニズムさえ働く。それを(オ)生活の「安定」という言葉で、われわれは呼ぶ。そして(カ)安定期にはいった人間は、もはや一日一日を「特殊」とは思わない。日記を書く習慣はそのときでばったりと絶えてしまう。

問一 文章全体の構成から考えて、段落を二つの段落に分けるとすれば、どこで分けるのが最も適切か。後半の段落の最初の三字を書きなさい。

問二 段落に〈存在しつづけた。〉とあるが、存在しつづけたのは何か。次の1〜4の中から最も適当なものを選んで、その番号を書きなさい。

- 1 日記
- 2 人々
- 3 毎日
- 4 農民

問三 文章中のA〜カに共通する意味を考え、それと同じような意味を持っている語句を文章中の他の部分から抜き出して、十字以内で書きなさい。

問四 この文章によれば、人間はなぜ日記をつけるようになったのか。その理由として、次の1～4の中から最も適当なものを選んでその番号を書きなさい。

- 1 書き残した日記を後世の人に利用してもらいたいから
- 2 人生が変化と可能性に富むものとしてとらえられるから
- 3 社会に対する歴史的考察を必要としはじめているから
- 4 青年時代には変化を避けようという意識が強く働くから

(茨城県)

「解答」

問一 しかし

問二 3

問三 単調な生活の暮らし

問四 2

【1】（人間は考える葦である）

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。

人間は考える葦である……たしかにそう思います。私はそうでありたいと思います。けれど、はたしてそうだろうか。時として、私は、パスカルのことばに疑問をいだきます。逆ではないのか、と。人間は考えない葦なのではないのか、と。考えるという作業は、パスカルのような天才にとっては楽しみであったかもしれないが、私のような凡人にとっては、このうえない苦しみだからです。私は、できることなら考える苦しみから逃れたいものだと思います。何も考えることがなくてポカンとしていたら、さぞ楽しいだろうと。（第一段落）

「「、」の瞬間、まてよ、と思います。一生涯、ポカンとしていたら、はたして楽しいだろうか。やはり考えこんでしまうのではなからうか、と。こうして、いつの間にか、私はとりとめのない考えに誘いこまれていくのです。（第二段落）

考えることは苦しい。けれど、考えないということも決して楽しくはなさそうです。というわけで、楽だけれどもむなし無思索の生活と、苦しいけれどもながしの満足がある思索生活と、人間は、この二つの生活の間をさまよっているのではないのでしょうか。その意味で、私は、人間は「考える葦」というより、「風にそよぐ葦」だという気がしてなりません。（第三段落）

むろん、考えるといっても、考える対象は無数にあります。将棋の次の一手を考えるのも考えることですし、日曜日どこへ遊びに行こうかと思案するのも考えることにちがいません。デパートでどんな柄の洋服を買おうかと迷うのも、テレビのクイズ番組に出て解答するのも、考えることだといえないことはありません。けれどパスカルが人間の偉大さの証明とした「考え」というのは、もつと本質的な思索のことです。人間とは何か。自分とは何か。生きるということとはどういうことか。人生の価値とは何か……。つまり、人間の、自分の生き方にかかわった問題についての思索です。そして、そのようなことを考えることは、あれこれ選んで買物をするとか、ヒントを出されてクイズを解くとかいうようなことは本質的にちがうように思います。ですから、つい、そのようなむずかしい考えから逃げだしたくなってしまうのです。そんな問題を、いったい、どうやって考えたらいいのか見当がつかないからです。（第四段落）

しかし、私は、一日のうち、ほんの短時間でもいいから A 考えてみたいと思っています。「「、」の考えがへたな考えで休むに似ていてもです。そして、おそろくとりとめもないであろうさまざまな考えを、できればそれが逃げないうちに B 書きつけて

「解答」

問一 イ ウ

問二 (初め) 考えるという (終わり) だからです

問三 楽だけれどもむなし無思索の生活と、苦しいけれどもなにがしかの満足がある思索生活と、人間はこの二つの生活の間をさまよっている

問四 人間の、自分の生き方にかかわった問題

問五 (初め) 私のような (終わり) からです。

【】(言葉は知っているがその実物を知らない)

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

A 言葉は知っているがその実物を知らないということがある。もし、実物を知っているならば、その物に関するいろいろなことが言えるであろうし、それに基づいて、またいろいろのことを考えることができる。

B しかし、例えば、ホトトギスという言葉だけしか知らない私には、初夏の風物として詩歌に詠まれたこと、一瞬にして鳴きすぎるなどいくつかのことを思い出す程度で、それ以上のことを考えようとすると、堂々巡りか、それを離れて初夏の感覚をいろいろ連想するかである。頭の中だけで言葉を考えるということは、言葉の含んでいる内容を思い出すだけのことであって、思考の袋小路である。発展のしようがない。

C 今、私が「春」と「秋」という言葉について考えると、大体次のような内容が思い出されてくる。

春 のどか 明るい 華麗 新鮮 柔らかい けだるい 可憐

秋 さびしい わびしい 哀れ はかない 澄む さわやか

このような内容は、これまでの読書や教育や生活体験からいつの間にかできあがったのであろうが、とにかく私の頭の中にある「春」「秋」の言葉の感じは右のようなものである。

D とところで、私が春なり秋なりの俳句を作ると仮定しよう。詩人でない私は、現実のありのままの体験や実感をそのまま言葉で伝えることほできそうもない。むしろ、言葉で考えて、「春はのどか」で「秋はさびしい」という固定観念で現実を割り切ってしまうのである。つまり、現実がどうであろうと、右にあげた内容のどれかに現実をおしあてて、見事な月並みの俳句を制作するかと思われる。事実よりも言葉が先にあり、言葉によって事実を解釈してしまうのである。

E このような思考態度は、有識者層の間にもしばしば見られる現象のようである。例えば、日本では外国の学説や理論が実に鋭敏に導入され、それが直ちに日本の諸現象に適用される傾向が少なくない。明治以来の特殊な事情からであるが、借りてきた学説や理論によって、日本の現実を分析し解釈する。そして、多くの場合、その公式にあてはまる事実だけが取り上げられ、あてはまらない事実は見捨てられる。理論こそ絶対であって、事実はそれを証明する材料にすぎないかのようである。事実に基づいて理論を組み立てるのではなく、理論が先にあって、事実をそれにあてはめていくやり方ともいえよう。これは前に述べたことと同じで、言葉に

よる思考の典型的なものである。

F これでは日本の現実について新しい発見をすることもできなければ、独自の問題を解決することもできそうもない。

(秋田県)

問一 「それ以上の……連想するかである」を比喩的に表現した言葉はどれか。文章中から六字で抜き書きしなさい。

問二 「有識者層の間にもしばしば見られる現象」について、筆者のとらえ方をまとめた形で述べている部分を見つけ、二十五字(句読点も字数に数える)で抜き書きしなさい。

問三 この文章で、次の段落はそれぞれどんな働きをしているか、後から最も適当なものを一つずつ選んで符号で答えなさい。

(1) Cの段落は

(2) Eの段落は

A 前の段落と同じ観点から、要旨をいつそう強めている。

I 具体的な説明であるが、要旨とのかかわりは最も弱い。

ウ 話題を変えて、前の段落と対照的な考えを述べている。

E 例をあげて、前の段落の根拠となる考えを述べている。

問四 この文章の立場から考えた望ましい思考態度は次のどれか、一つ選んで符号で答えなさい。

A 実物や事実よりも言葉の持つ固定観念を大切にすること

I 言葉による思考の典型を大切にし問題の解決を図ること

ウ 実物や事実をよく知りそれに基づき思考方法をとること

E 学説や理論を分析してそれを証明する方法を考えること

「解答」

問一 思考の袋小路

問二 理論が先にあつて、事実をそれにあてはめていくやり方

問三 (1) イ (2) ア

問四 ウ

【】(「ことばを知らないから」文章が書けないと言う人がいる)

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

「ことばを知らないから」文章が書けないと言う人がいる。この場合のことばとは彙語^ゴを指^さしていると考えていいだろう。使つことのできる語彙の量は、たしかにひとりひとりの人間によって異なっている。外国語を話したり書いたりするときに、私の感ずるものかしさはもっぱら私の語彙のまずしさからくるものだと思う。その語彙は単なる単語の数だけを意味しているのではなく、いわゆる言いまわしと呼ばれる表現の技術をも含んでいる。

「A」「語彙の量が多ければ、それだけで文章が書けるものだろうか。「B」そうなら、私たちは身近に大部の辞書さえもつていれば、たちどころに名文をもせるといふことになりかねない。語彙の量に対して、語彙の質というものもあると私は思う。知識として知っているだけでなく、ことばのひとつひとつをどれだけ自分の経験によって、たとえ自らそれと意識していなくとも、定義し得ているか、とれだけことばの意味の深さを自分の身につけているか、それが語彙の質ということである。

ひとつひとつのことばには、辞書的な意味に加えて、ひとりひとりの人間の経験によって与えられた意味がある。ひとつのことばの後に他のことばをつなげて、私たちが文章を作ってゆくとき、その文章を独自のものにするのは、辞書的な意味であるよりむしろ、そういう個人によって与えられた意味の深さであると言えないだろうか。

「ことばを知らないから」文章が書けないという言いかたには一面の真理がある。しかしたとえ語彙の量は少なくとも、その語彙が質としてゆたかであるとき、すばらしい文章の生まれることも少なくないということを、私たちはたとえば名もない人々の話したことや書いたものによってよく知っている。「ことばを知らないから」書けない文章とは、けっきょく自分にふさわしくない文章、まねごとの文章にすぎない。どんな人間にも、書ける文章と書けない文章がある。書けない文章を書けないと知ることが大切だ。

(新潟県)

問一 「A・B・Cに最もよく当てはまることばを、次のア～カのうちからそれぞれ一つずつ選び、その符号で答えなさい。

ア だから イ だが ウ まして エ むしろ
オ もし カ まさか

問二 「『ことばを知らないから』文章が書けないと言う人」には、文章を書くうえで欠けている面があると筆者は考えている。

この文章全体を読んで、その欠けている面として最もよく当てはまるものを次のア～エのうちから一つ選び、その符号で答えなさい。

ア 大部の辞書をひいて語彙の量をふやす努力。
イ 語彙には量と質の二つの面があることの認識。
ウ 多くの文章から表現の技術を学びとる工夫。
エ 表現の経験を繰り返し返そうとする積極的な態度。

問三 「書ける文章」とはどんな文章か。六十字以内で書きなさい。

「解答」

問一 A イ B オ C エ

問二 イ

問三 たとえ語彙の量は少なくとも、ひとりひとりの経験によって身につけた深い意味の言葉で書かれた自分にふさわしい文章。

【】(酒を造るには)

次の文を読んで、後の各問いに答えなさい。

酒を造るには、材料を仕込んで寝かせて発酵をまつ。頭の中でこういふ新しい酒を造ることができれば、それは発見になる。それに対して、いくつかの酒を混合してつくるのがカクテルである。バーテンは自分で酒を造るのではない。他人のつくった酒を混ぜ合わせて新しい酒を造る。酒そのものを造る創造と比べて、いかにも未梢的である。(a)、さきには、地酒を造れ、カクテルはいけない、ということを書いた。しかし、カクテルを頭から酒でないときめつけてしまつのも鬱屈な話である。カクテルも「つくり方」によってさまざま「」が出る。酒を造るのが一次的創造ならば、カクテルを作るのは二次的創造、調理による創造となる。ナマのまま食べるのがもっともつまみというものもある。いるにはあるが、(b)、たいてい何らかの調理を加える。こういふ営みが人間の文化を築いてきたのだ。

社会が複雑になると、創造の様式も昇華される。無から有を生じるような一次的創造が容易でなくなり、一次的創造とならんで二次的創造が重視されるようになる。(c)、たとえば、デザイナーという職業が確立した。服装においても、生地がものをいう和服のようなものもあるが、素材よりデザインで勝負する洋服のようなものでは、デザイナーの地位はきわめて高いものになる。料理は今のところ、まだ、和服に似たところがあって、材料のよしあしで勝負がきまることが少なくない。もっとも発達した料理では素材もさることながら、「」がものをいう、洋服のようなものに近くなると考えられる。加工に創造を認めるならば、カクテルのおもしろさが肯定されるだろう。カクテルを作る芸が地酒を造る術と比べて、かならずしも低いものではないこともわかるはずだ。料理に関心の高まっている現代はカクテル文化を特色としているといってもよからう。現代における知的生活は、(A)思考のカクテルを求める生活である。それがたんに模倣に終わらないところが、これまでと違ったところである。

すぐれたカクテルを作るにはどうしたらよいか。現在の教育はそれを教えようとしている。(B)麦からビールをつくるのはどうするのかはほとんど教えない学校だが、これまででできたものもその名酒を紹介することにはじつに熱心である。ただ、学生はその(C)名酒のレットル集めで満足しているというところがあった。ところが、にわか創造が問題になり出したのである。(D)酒のセールスマンのようなことをしていた教育に、本ものの酒を醸造してみようといってもできるわけがない。それで、知的創造としてカクテル作りを教える。しかし、かならずしも満足すべき程度には達していない。料理に比べてもなお相当遅れている。

(東海高)

問一 (a) (c) には、それぞれどのような語を入れるのがよいか。次の a・b・c の組み合わせのうち最適なものを選んで、符号で答えなさい。

- ア それに・・それでも・・そのまま
- イ それに・・そして・・それでも
- ウ それに・・それで・・そして
- エ それで・・それゆえ・・それなら
- オ それで・・それでも・・そして

問二 「」・ に入れるのに最適な語を、それぞれの語群から一つずつ選び、符号で示しなさい。

- ア 失敗 イ 個性 ウ 調子 エ 結果
- ア 生地 イ デザイナー ウ 調理 エ 創造 オ 知名度

問三 (A) 「思考のカクテルを求める生活」は、どのような生活か。次のうちから最適なものを選んで、符号で答えなさい。

- ア たくさんある考え方を混合し、その組み合わせの楽しさを知的に探し求める生活
- イ 自分のあるこれの考え方を混ぜ合わせながら、自分独自の考え方を生み出す生活
- ウ 歴史的試練に耐えて洗練された欧米人の合理的なさまざまな考え方を重視する生活
- エ 今ある種々の考え方の一つ一つを味わいながら、多様な味わいを楽しむ生活
- オ 現存する各種の考え方を比較検討し、そのなかから新しい考え方を生み出す生活

問四 (B) 「麦からビールをつくる」は、どのようなことの比喩か。文中の十六字の語句をそのまま抜き出して答えなさい。

問五 (C) 「名酒のレットル集め」がどのようなことの比喩かを考えて、次のうちこれと合致するものには、しなないものには×の記号を記しなさい。

ア 例えば、文学作品の学習で、先生や批評家の意見を参照し、自分なりの評価を下そうとするような学習法。

イ 例えば、教科書に出てくる歴史の年号や歴史的事項を、繰り返し練習して正確におぼえこむような学習法。

ウ 例えば、理科実験で、先生の口述による学習とともに、自ら追実験したり、応用実験を試みるような学習法。

エ 例えば、英語の学習で、よいと聞く参考書を数多く買い求め、それらを広く読み取り消化するような学習法。

六 (D) 「酒のセールスマンのようなことをしていた教育」は、「ここではどのような教育をいうのか。次のうち最適なものを選んで、符号で答えなさい。」

ア 博識の宣伝にばかりうつつを抜かす教育。

イ 教育の本質を離れ、営利を第一とする教育。

ウ 既成の権威ある知識を切り売りする教育。

エ 有名大学受験の実をあげるためだけの教育。

「解答」

問一 オ

問二 イ ウ

問三 オ

問四 無から有を生じるような一次的教育

問五 ア × イ ウ × エ ×

問六 ウ

【論説読書】

【】(読書の方法として、多読がいいか、精読がいいか)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(A・Bは段落を示す記号である。)

A 読書の方法として、多読がいいか、精読がいいかは古来論のあるところで、一概には言えない。青年時代は精神の彷徨期だから、あれこれと手当り次第に多読する傾向が強い。それは当然でもあれば、頼もしくもある。ある程度多読を経なければ、人間として大きく成長しない。わが国心臓外科の権威S博士は、若い門下生たちに向かって、「寝る前二、三十分でいいから、医学に全く関係のない本を毎晩欠かさず読みなさい。一生のうちに大へんな読書家になれる。それは医者として以上に、人間として成長するための大事な修業である。」と教えておられるという。

B しかし、雑然たる読書の弊は、とかく散漫な頭脳を作り易いことだ。それは多読というより、「乱読の害」といふべきものであろう。求めるところのある多読は、多々ますます弁するが、無方針な乱読は、益より損が多い。性急で落ち着きを失った今日の社会では、あまりに精読の習慣が薄れているように思われる。時弊を背景に、あえて二者択一を言つならば、私は多読を多少犠牲にしても、精読をもっと奨励したい。われわれはいかに努力しても、短い一生に読める本の量はしれたものだ。世界古今の名著のうち、文字通り「」を出さない。たまたま出会った少数の良書との因縁を大事にして、そこから多くの栄養を摂取する方が賢明であらう。それはあたかも約四十億の世界人類、一億に余る日本国民中、偶然交わり得た周囲の知己朋友を大切にせねばならぬのと同様である。

問一 「」に入る適当な語を、次のアからエまでのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ あえて ウ かなり エ 少しも

問二 「」に入ることばとして、最も適当なものを、次のアからエまでのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 牛耳を執る イ 九牛の一毛 ウ 牛歩 エ 九仞の功を一簣にかく

問三 B段落中には、読書によって得られる価値を、暗示的に言い表したことがある。それを抜き出して書きなさい。

問四 文章を通して、筆者が最も強く主張することは何か。三十字(句読点を含む)以内で書きなさい。

(滋賀県)

「解答」

問一 ア

問二 イ

問三 栄養

問四 多読も大事だが、良書を精読する習慣を大切にしていきたい。

【1】（このころは“知的生活”が流行している）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「1」このころは“知的生活”が流行している。衣食足って礼節を知るといふ。いまの世の中が衣食足っているかどうかわからないが、教養の本を読む人がふえたのは、豊かになった証拠である。結構なことだ。

「2」ところが、結構でないこともある。えらい人の書いた文章が申し合わせたように難しい。一度読んだくらいでは、何を言おうとしているのか、わからない。

「3」悪文ではないか、と思うが、めったなこととは言えない。お前はこんなものがわからぬのか、とやられるおそれがある。何とかわかるうとして読むのだが、どうもはつきりしない。ひょっとすると、自分の頭は本当に悪いのかもしれない。そんなこと、人に気取られては大変だ。人には

“ さんの はすごいなあ ”

というようなことを言う。何がすごいかはつきりしないから安全である。相手も心得たもので、

“ そう、すごい。まったく ”

と相づちを打ってくれる。

「4」 こういうことを繰り返していると、だんだん難解な文章に鈍感になってくる。慣れというものは恐ろしいことはない。文章はやさしい方がいい。 氏のようなわけのわからぬのは困る。そんなことを言う人間がいると、頼まれもしないのにO.Oさんの肩をもって、君、ああいう文章でなくちゃ言えないってこともあるんだよ。何でもやさしく、やさしくってのは、読者をバカにする思想だ……などといきまぐよつになる。

「5」 こういうのを末世といふ。いまはその末世である。

「6」 えらい人の書いた文章はどこか冷たい。不必要な漢字がのたうちまわっている。いちばん情けないのは、一度読んだだけでは意味がとれないで、外国語みたいに、同じところを二度も三度もなぞってみなくてはならないこと。声を出して読むと舌をかみそうになる。

「7」 一度読んでわからないくらいだから、おもしろくないのは当たり前かもしれない。お経の文句かなんかなら別だが、普通の文

章は、おもしろくなくてはつまらない。 書く人は読む人にもっとサービスしてもらいたい。

問一 「ほんなことを」結構なことだ」というのか。「1」の段落中から、具体的に述べている一続きの部分（十五字以内）を抜き出して答えなさい。

問二 「1」「2」とはどいうことか。「3」の段落の内容をまとめて、四十字以内（句読点を含む）で答えなさい。

問三 「書く人は読む人にもっとサービスしてもらいたい」とあるが、この場合「サービ」するとは具体的にはどいつすることか。十五字以内（句読点を含む）で書きなさい。

問四 段落についての次の問いに答えなさい。

(一) 「1」～「7」の段落のうち、話の展開のうえからは欠けてもよいと思われる段落を一つ選び、段落の番号で答えなさい。

(二) 「2」の段落において、この段落の趣旨を最もよく表している文はどれか。その文の最初の三字を抜き出して書きなさい。

(三) 「2」の段落とほぼ同じ趣旨を、別な表現で述べている段落はどれか。段落の記号で答えなさい。

(島根県)

「解答」

問一 教養の本を読む人が増えた

問二 文章が難しくてよくわからないのに、わかったようなあいまいな態度をとること

問三 わかりやすい文章を書くこと

問四 (一) [5] (二) えらい (三) [6]

【】(読書家とか、読書法とかいう言葉があり)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読書家とか、読書法とかいう言葉があり、読書の楽しみとか、読書の嗜好^{たしな}みとかということを経験では言い、私もまた、疑うところもなくそういう言葉を使っている。そして、その読書という言葉では、読むことそれ自身が目的であり、その効果としては教養ということを経験しているのであって、精神的な快楽が伴うものである、物質的利用価値に直接転用することは邪道である、というような了解がいつのまにか成立しているようだ。そしてそういう読書を楽しんでいる人が読書家であるというのだが、しかし、どうしてそんな限定をしなければならぬのであろう。物質的利用価値のために読むのがわるいのか、そんなのは読書といえないのか、どうしてそういう読書家を読書人として数えないのか。というところ、どうもそれは、読書は心の糧^{かた}であるといふふうに、精神を豊かにするものを喜び、その反対の物質的利益を喜ぶのは、いやしいことだ、心の養いを持っていないものは下等だと考えることを我々人間は昔から教えられているからではないかと思う。(ア)

物質的利益を伴わない快楽は純粹で高雅であるという考えは、aおそろく、多くの物質的利益、たとえば金銭上の損得に替算^{かえり}する知識は、とかく、純粹な心の喜びをもたらさない、というよつな、人間一般の経験から、生まれたのであろう。そういう「ろ」]なものも高雅であるという感じ方をわれわれは根強く持っている。透^すき通った水とか、晴れわたる青空とか、楽音とかいうものは純粹で、何となしに、まさりもののある水や空や音などに比べて、清らかな快い感覚をもたらすという生理的潔癖から来る思想かもしれない。(イ)

いま私は、生理的潔癖から来る思想かも知れない、と書いたが、学者たちは純粹ということを経験、どう説明するのであるかと思ひ、私の持っている書棚^{しよたな}に何かを扱っている本はないかしらと、あさり、たまたま誰かの本を発見してその本を耽読^{たんてき}して(いま)こを書きながら自分で思うには、なかなか純粹感の原理を説明した本などあるものではない、と苦笑しているのだが(わが知識を増して満足したとする。その限りにおいて、その書を楽しんでいる私は研究者であり読書家であるのだが、それは実は明日の学校での講義に必要な知識を準備しているのだということになると、私は研究者ではあるけれども、読書家ではなくなってしまう。変な話だ。無目的な知識を得るための読書をするのではなくては読書家とはいえない。(ウ)

そんな窮屈な話はない。われわれは定義に従って本を読んでいるのではない。本を読むのが好きだから読むのだ。何故好きかと

いうと知識がふえるのが嬉しいからだ、また、本の中には楽しいことや有益なことがたくさん書いてあるからだ。そういうことを目指して読む人が読書家だといってはいけないのか、と反駁したくなる。

問一 全文の組み立てを考えて、前後二つの部分に分けるとすれば、前半の部分の終わりはどこか。最も適当なものを文中の(ア)～(ウ)から選びなさい。

問二 文中のa、「おそらく」はどの部分にかかっているか。最も適当なものを次の(ア)～(エ)から選びなさい。

(ア) 金銭上の損得に替算しつる知識は、

(イ) 純粋な心の喜びをもたらさない、

(ウ) 人間一般の経験から、

(エ) 生まれたのであろう。

問三 文中のb「」に入れることはとして最も適当なものはどれか。次の(ア)～(エ)から選びなさい。

(ア) 有益 (イ) 経験的 (ウ) 純粋 (エ) 物質的

問四 文中のc「それ」は何をさしているか。最も適当なものを次の(ア)～(エ)から選べ。

(ア) 生理的潔癖から来る思想

(イ) 純粋ということ

(ウ) 説明

(エ) 私の持っている書棚

- 問五 文中のd「窮屈な話」は、なぜ窮屈なと形容しているのか。最も適当なものを次の(ア)～(エ)から選びなさい。
- (ア) 明日の講義に役立つ読書の話だから
 - (イ) せまい目的を持った読書の話だから
 - (ウ) 定義にとらわれた話だから
 - (エ) 純粹感の原理を説明した難しい本の話だから

- 問六 次の(ア)～(エ)の文の中から、筆者の考えに最も近いものを選びなさい。
- (ア) 物質的利益を伴わない快楽は純粹で高雅であるとはいえないのではないか。
 - (イ) 無目的に読むのでなければ読書家とはいえないのではないか。
 - (ウ) われわれは生理的潔癖から来る思想を持っているとはいえないのではないか。
 - (エ) 読書を物質的利用価値に多少転用しても、必ずしも邪道であるとはいえないのではないか。

- 問七 全文の要旨にふさわしい「題」を次の(ア)～(エ)から選びなさい。
- (ア) 読書家とは何か
 - (イ) 読書法とは何か
 - (ウ) 読書の経験
 - (エ) 読書のすすめ

(京都府)

問七 ア
問六 エ
問五 ウ
問四 イ
問三 ウ
問二 エ
問一 ウ
「解答」

【論説文化】

【】（ああ、日本人は何と幸福な民族であったことだろう）

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

ああ、日本人は何と幸福な民族であったことだろう。自己の安全に、収入の大部分をさかねばならなかった民と、安全と水は無料で手に入ると信じ切れる状態に置かれた民と、……私は、ただ溜息ためいきが出てくるだけである。だが、余りに恵まれるということは、日本人がよく言うように、「過ぎたるは及ばざるがごとし」で、時にはかえって不幸を招く。深窓に育った令嬢や、過保護の青少年は、何かちょっとしたことに出会つと、すぐに思いつめてしまう。大学受験に失敗して自殺したなどはその典型的な一例であるうし、いわゆる一家心中も、多くはこの部類に入る。ユダヤ人などは、もし思いつめていたら、とうの昔に、一家心中ならぬ民族心中をやらねばならなかったであろう。考えてみれば、太平洋戦争の末期における「一億玉碎」の主張は、思いつめた「民族心中」の思考かも知れない。余りに恵まれた民族が、古今未曾有の事態に接した場合、こうなつても不思議はあるまい。

新聞紙上のいわゆる「人生相談」や「女性相談」は、日本人の考え方・生き方を、個々の事情に即して述べているだけにきわめて興味深い。そのどれを読んでも、ユダヤ人ならこう答えたであろうと思われる解答はない。たった一つだけ、まさにユダヤ人の解答そのものと思われるのがあつたので、それを述べておこう。これは、発明研究家のT氏がS新聞に書かれていたことである。氏のもとには、発明に関して指導や助言を求める多くの手紙が来るのだが、ある日、何をまちがえたか「女性相談」の手紙が舞い込んで来た。そこで氏は、自分の任でないとことわりつつも、次のように返事をされたという。「どんな珍案・愚案でもよいから、これが解決案だと思つ案を三十ほど書いて送れ。その中から、これが良いと思われるものに、印をつけて送り返してあげよう」と。その返事は来なかつた。しかし大分たつて、すべてのことが解決したという礼状が来たという。

私が非常におもしろかつたのは、これがまさにユダヤ人の生き方だからである。ユダヤ人にとっては、明日がどうなるか絶対だれにもわからないので、明日の生き方は、全く新しく発明しなければならないのである。生き方を発明するのも、機械・機具を発明するのも原則は同じで、可能な案をまず立てねばならない。そしてその案の中から、珍案・愚案を一つずつ消して行き、最後に残つたもので生きねばならないのである。しかし、（A）日本人には、こういう生き方が必要なわけがなかつた。そこで、思いもよらぬ事態にはじめて接すると、「思いつめて」「しまわざるを得なくなる。しかしユダヤ人なら、アウシユヴィッツでいくら思いつめてもはじ

まらない。そこで、どんな珍案でも愚案でもよいから提出して、何とか生きる道を探そうとする。「シオニストが三人寄れば五つ政党ができる」と、なくなった前イスラエル首相エシユル氏は言ったが、諸君がテル・アヴィヴの町をちよつと散歩すれば、まるでつかみ合いでもしそうな勢いで、文字通り、口角アワを飛ばしているユダヤ人に出会うであろうし、キプツをのぞいてみれば、もつともすこい議論に出くわすであろう。そこで日本の新聞などには、イスラエル共和国は小党分立だから政情不安定だなどと書かれる。しかし、イスラエル共和国の内閣の寿命をお調べになれば、おそらく世界で最も安定した政府の一つだと言わざるを得ないのである。ユダヤ人がいかに大声で論じても、だれも、少しも「思いつめて」「いないのである。議論とは何十という珍案・愚案を消すためなのである。絶対に、「思いつめた」自案を「死すとも固守」するためでないことは、各人自明のことなのである。

(B)ここに大きな差がある。

問一 (A)「日本人には、こういう生き方が必要なわけがなかった」のはなぜか。その理由を、文中の表現を利用し、文末を「から」とまとめて、三十字以内で書きなさい。

問二 (B)「ここに大きな差がある」の「大きな差」とは何と何の間にある差なのか、最も適当なものを次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 議論している者同士の間

イ 思いつめているかいないかの間

ウ 日本人とユダヤ人との間

エ 珍案と愚案との間

オ 機械の発明と生き方の発明との間

問三 「ユダヤ人の議論好きは有名である」という文を、文中の最も適当な場所(文と文との間)に入れたい。前の文の終わりと次

の初めの、それぞれ六字（句読点などは含まない）を引用して、その場所を示しなさい。

問四 この文章を読んで、五人の生徒が感想を述べた。文章の要旨を最も正しく読み取っているものを、次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 島国である日本に住んでいるとふだん気がつかないが、隣の国と地続きの外国に比べると、日本は平和で安全なことが、しみじみとありがたく思える。

イ 何か困難に出あった時に、いろいろな案を出してその中の最良の方法で処置していくことが、我々の日常生活にとってとても大事だと感じた。

ウ 二千年の昔から、ユダヤ人は、アウシュヴィッツで受けたような迫害を受け続け、民族の考え方が変わってしまったのだろう。気の毒に思う。

エ 議論というものはよい案を出すためのもので、自案を固守したり思いつめたりすると、よい考えが出にくいものだということがよくわかった。

オ ユダヤ人に比べると、日本人は恵まれていたために困難にあつと思いつめてしまい、対策に冷静さが足りないことが一つの特徴だとよくわかった。

（国学院）

「解答」

問一 安全と水は無料で手に入ると信じ切れる状態におかれていたから。

問二 ウ

問三 探そうとする～シオニストが

問四 イ

【】(数年前のことになるが)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

数年前のことになるが、私は米国人の言語学者T氏と東京で親しくなった。彼はもともとはアメリカ・インディアンの言語を専門に研究していたが、終戦後の日本に、軍人として駐留していたこともあって、最近では日本語の歴史や方言にも興味を示しはじめ、遂に奥さんと三人の娘をつれて東京にやって来たのである。奥さんはイタリア系の人で、小学校の先生をしている。

彼は古い日本家屋を一軒借り、畳に座蒲団、冬は炬燵に懐炉、そして三人の娘を日本の学校に入れるという、一家あげての見事な日本式生活への適応ぶりだった。或る日、アメリカの学者の習慣として、彼は多くの言語学関係の友人知人を、家に招待した。まずイタリア風のイカのおつまみなどで、カクテルを済ませた後、別室で夕飯ということになった。一同が座につくと、テーブルには、肉料理やサラダなどが並べられ、面白いことに、白い御飯が日本のドンブリに盛りつけて出されたのである。(A)

畳の上に座っていること、白い御飯であること、T氏たちが日本式生活を実行していることなどが重なり合って、一瞬私は、この御飯を主食にして、おかずを併せて食べるのだという風に思ったらしい。(B)

目の前の肉の皿を取り上げて、隣の人に渡そうとしかけた時、私はT夫人がかすかにとまどったような気配を感じた。(C)

間違ったかなと思った私は、御飯は肉と一緒に食べるのか、それとも御飯だけで食べるのかと尋ねると、夫人は笑いながら、先ず御飯を食べて下さいと言う。(D)

私はその時、はっと気が付いた。この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲティと同じく、スープに相当する部分なので。(E)

食事というものは、いろいろな条件に制約された、文化という構造体の重要な部分である。何を食べるか、食べてはいけないものは何かといったことに関して、どの国の食事にも、さまざまな制約や規則が習慣として存在する。

カトリック教徒は金曜日には獣肉を食べないし、イスラム教徒は、豚肉を不浄なものとして決して食べないというようなことは、誰でも知っている有名な事実であろう。

しかしこのように何かを食べてはいけないという「1」な規則は、外国人にも比較的判りやすい。ところが自分の国の食物と同じものが、外国の食事の中にありながら、その食物と他の食物との関係が、自国の食事の場合と違うという、つまり(1)(同一の食

物と食事全体における価値が、文化によって異なるときに、難かしい問題がおきるのである。

白い米の飯は、日本食の場合には、食事の始めから終わりまで食べられる。というよりは、米飯だけを集中的に食べることは、むしろいけないこととされている。おかずから御飯、御飯からお汁と、あちこち飛び廻らなければ、行儀が良いとは言えないのである。そこで米の飯と他の食物との、日本食における関係は、「2」「3」であると言えよう。お汁に始まり、香の物に至るまで、米を食べてよいのである。

ところが、食事の一段階ごと、一品ずつの食事を片付けていく、「4」「展開方式の性格の強い食事文化もある。西洋諸国ではこの傾向が強く、イタリアの食事も例外ではない。ここでは穀類や米の料理などは、ミネストラと称して、本格的な肉料理が始まる前に、済ませてしまうのだ。

私がドンブリに盛られた白い御飯を見て、おかずも一緒に食べようと思った失敗は、日本の食事文化に存在する或る項目を、別の食事文化の中に見出したため、これを自分の文化に内在する構造に従って位置づけ、日本的な価値を与えようとしたことが(二)原因なのであった。

文化の単位をなしている個々の項目(事物や行動)というものは、一つ一つが、他の項目から独立した、それ自体で完結した存在ではなく、他のさまざまな項目との間で一種の引っ張り合い、押し合いの対立をしながら、「5」に価値が決っていくものなのである。

自分の文化にある文化項目(たとえば或る種の食物)が、他の文化の中に見出されたからといって、直ちに(三)それと同じものだと考えることが誤りなのは、その項目に価値(意味)を与える全体の構造が、多くの場合違っているからである。

問一 1〜5には、次のア〜ケの中のどれを入れるとよいか。符号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア | 主観的 | イ | 相対的 | ウ | 通時的 | エ | 暗示的 | オ | 同時的 |
| カ | 客観的 | キ | 明示的 | ク | 並列的 | ケ | 絶対的 | | |

問二 右の文章には、次の一文が抜けている。文章中の符号(A)～(E)のどこに入れるのが最もよいか。符号で答えなさい。
はたして、それは油と香辛料で料理した、一種のピラフのようなものだった。

問三 (一)「同一の食物と食事全体における価値が、文化によって異なる」について、この部分の具体的な例になっている一文を、これより前から選び、そのままの形で書きなさい。

問四 (二)に「原因なのであった。」とあるが、何の原因になるのか。漢字二字で答えなさい。

問五 (三)に「それと同じものだ」とあるが、「それ」とは何か。十五字以内で書きなさい。

問六 右の文章を次のように要約してみた。「3」には、右の文章から適当な語を選んで書き、他は、後のア～キの中から選び、符号で答えなさい。

私たちが「1」文化に、しかも限られた「2」で接するときは、個々の文化要素を統括する(個々のものを一つにまとめる)「3」がつかめることは稀であり、多くの場合、自分が出会う一部、または「4」な実例を一般的に「5」してしまふ傾向がある。しかもこの一般化は、必ず自分の文化構造に従って行われるということが問題なのである。

- ア 縮小 イ 他人 ウ 範囲 エ 異なった
オ 同じ カ 拡大 キ 特殊

(國学院高)

「解答」

問一 1 キ 2 オ 3 ク 4 ケ 5 イ

問二 (E)

問三 この御飯は、イタリア料理では、マカロニやスパゲティと同じく、スープに相当する部分なのだ。

問四 失敗

問五 自分の文化にある文化項目

問六 1 エ 2 ウ 3 規則 4 キ 5 カ

【】(西洋では、あなたの育った生活圏では)

次の文章は、欧州のある学者の問いかけに答えたものである。これを読んで、後の各問いに答えなさい。(文頭の1〜5の数字は、段落番号を示している。)

1 西洋では、あなたの育った生活圏では、「自然」と「文化」とはたがいにむきあった対立者同士です。人間は自然をこわし、おきかえ、再構成し、人工物にかけて「文化」を生みだすことに努力してきました。「芸術」とは語義からして人工であり技術であつて、かたく、きびしく、ゆるぎない、不変なものを意味しました。

2 しかし私たちの国では、芸術とはもともと自然とともに生きることの表現でした。生きて、うつろつていくもの、したがつて無常なもの、それが私たちの芸術の源でした。自然と文化は対立者同士でなくて、自然即文化なのです。

3 あなたのお国のヨーロッパでは、「自然」は人間の敵であり征服されるべきものでした。だからこそ、征服された自然界は保護領となり、温存される対象となつたのです。森林も、庭園も、野鳥たちも、本当のところはみな人工的に構成され、配置されたものではありませんか。

4 (A)そこがちがうのです、日本では。現代ビルは世界のトップレベルのがたちましたけれども、自然と文化が対立か一体かという「人間のレベル」の問題では、昔からの流れが今も流れているようです。そしてこれこそ、(B)すぐれて日本的な心のあり方らしく私には思えるのです。だから、「日本人らしい日本人たち」は自然の心でもって自分の生活の場をきずき、現代に即応させてきました。自然界は開発され、緑地は工業地と宅地にかわりました。現代の日本人が自然の心を失つたためにそうなのではなくして、まさに自然のままだからこそ、自然は放逐され、破壊され、あなた方にも私たちにも自然は見えなくなりつつあるわけです。

5 欧州の学者は私に握手をもとめた。そして私をみつめてこういった……明快によくわかりました。みことな論理の展開です、感心しました。そしてこの論理こそ、(C)ヨーロッパの思考法に属し、もっとも非日本的なのではないですか。

(広島大付)

問一 (A) 「そこがちがうのです、日本では」について、次の二つの問いに答えなさい。

この文の表現法を何とというか。漢字で書きなさい。

「そこ」の指す内容を整理して、十五字以内で書きなさい。

問二 (B) 「すぐれて日本的な心のあり方」とあるが、本文にとりあげている「自然」についてのどのような「あり方」をいうか。次のア～オから、最も適当なものを一つ選び、符号で答えなさい。

ア 人間として自覚を持ちつつけること。

イ 日本人として自然にとけこむこと。

ウ すべてをわけへだてなく愛すること。

エ 現実を分析してとらえないこと。

オ 文化と自然とを対立させないこと。

問三 (C) 「ヨーロッパの思考法」とは、どのような思考のすすめ方をいっているのか。本文1～4の論旨の展開をもとにして、三十字以内で書きなさい。(句読点も字数に数える。)

問四 欧州のある学者は、どのような問いかけをしたと考えられるか。問いかけのかたちで、三十字以内で書きなさい。(句読点も字数に数える。)

「解答」

問一 倒置法 自然と文化との関係のとらえ方

問二 オ

問三 物事を客観的にとらえて分析し、論理的に結論づけるすすめ方

問四 現代の日本の自然破壊は、日本人が自然の心を失ったからなのか。

【】(竹は、ヨーロッパの絵画にえがかれたことがない)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

竹は、ヨーロッパの絵画にえがかれたことがない。理由は簡単なことで、ヨーロッパには竹が(A)自生しないからである。

パリのブローニユの森に、私は一むらの竹林を知っていた。それは人工遊園の装飾として、フランス人の支那趣味が着想し植えた竹であった。私は時おりその竹林のそばを通るのだったが、カシワ、マロニエの巨樹の繁茂する池辺の一郭に、竹は遠慮がちな細い肩をよせあって、流瀆の生に耐えているかにみえた。日本のいたるところに、竹は旺盛な繁殖力を示して自生するので、竹の自生しない風土の厳然たるひろがり、私には謎めいてみえることがあった。日本にやってきたフランス人が竹やぶを自撃したときと蝉の鳴き声を聞いたときに発する、大仰な驚嘆の叫びが、たんに珍奇に接した喜びの表現ではなく、不安の表現であったことを、私はひるがえって理解したが、それは誤解だろうか。

われわれが竹の肌を気味悪くおもふことはないし、竹を「不自然」と受け取ることもない。あのなめらかさも、つやも、強靱さも、われわれにとっては、まさに自然のなめらかさであり、自然の強靱さなのだから、変形され変質した自然を竹に感じるいわれはない……「たとえ扇の骨になろうとも、箒の柄、篠笛、竹槍、下駄、線香立てになり変わった竹であるうとも。

この身近な自然は、われわれの感情構造を深く感化している。たとえばわれわれは、漆器を人工のつやのゆえに喜び好ましがるのではなく、漆器のつやに竹のつやとの同質を感じ、ために漆器を好ましくおもふ。周知のように、フランス・ルイ王朝の宮廷社会には、漆器がもてはやされ、模造漆器製造職さえ発生するが、フランス人は、漆器のつやに対応するものを自然のどこにも発見することができなかった。漆器は、あやしい底光を発する人工の職芸品として珍重されたのだ。だから、竹の自生しない風土の人々が孟宗竹をまぢかにながめたとき、かれらはその表皮が人工を模倣していることに奇異をおぼえ、かれらの珍重する漆塗りのつやを竹が盗用していることに、とまどつにちがいない。かれらは、さいこには特異な自然として竹を受け入れるにせよ、それには手間どるだらう。

問一 「流瀆の生に耐えている」とはどういう状態を言っているのか。次のア～オの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 風土に合わないのに今にも枯れそうだが、枯れないでいるさま。

イ 何度植えかえられても枯れないでいるさま。

ウ 異国の地に植えられてひっそり生えているさま。

エ 周りの巨樹に圧倒されながらも懸命に生えているさま。

オ フランス人の驚嘆の叫びをじっと受けとめているさま。

問二 フランス人が竹に対して「大仰な驚嘆の叫び」をあげたというのを、どうして「不安の表現であった」と言い表したのか。文中の語句を用いて「から。」（字数に数えない）で結ぶ七字で答えなさい。

問三 「とまどうにちがいない」とあるが、著者はどうしてそう判断したのか。次のア～オの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア かれらが竹を不自然と受け取っていたから。

イ かれらは、かれらの珍重する漆器のつやに対応するものを、自然のどこにも発見することができなかったから。

ウ かれらが漆器をあやしい底光を発する人工の職芸品として珍重していたから。

エ かれらが初めて孟宗竹をまぢかにながめたから。

オ かれらは、かれらの珍重する漆器のつやよりも竹のつやの方がすばらしいと感じるだらうから。

問四 「それ」は何をさすか。二十八字以内で書きなさい。

問五 文全体をまとめた題はどれがもっともよいか。次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。
ア 竹と風土 イ 竹とフランス ウ 竹と漆器
エ 竹のつや オ 竹の不思議

(慶應義塾高)

「解答」

問一 ウ

問二 気味悪くおもう(から)

問三 イ

問四 奇異な感じを持った竹を特異な自然のものとして受け入れる

問五 エ

【】(ことしも読書週間が始まった)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ことしも読書週間が始まった。(第一段落)

テレビと読書は、ある面で「」との関係に似ている。自動車は、急ぐとき、あるいは病人や体の不自由な人にとっては、大変便利である。(a)つまり、短い時間で楽に目的地へ着けるために、途中の道や橋や風景の印象が極めて薄い。(b)一方、自分の足で歩けば、道筋の家並みや家それぞれのたたずまい、道端の一木一草まで自分の目で確かめることができる。テレビも、大量の情報を即時につめこむには適しているが、一語一語文字を追いかけた読書に比べると、その記憶はひどく頼りない。(第二段落)

テレビドラマで主演級のある新劇俳優がこつこつ「連続テレビドラマで主演しているときは、銀座を歩くとすれ違った人がふり返る。だがドラマが終わって一週間もすれば、見たことがあるなという顔をするだけで、もうふり返らない。テレビの印象はそれほど強烈で、(c)また消えやすい。(第三段落)

自動車は便利だが、自動車に乗ってばかりいると足が弱る。病気で一週間もベッド暮らしをすれば、使わない足がどれだけやせおとろえるか、経験のある人も多いだろう。といって現代は自動車なしではすまない。だが自動車になれると、歩いて行けるところでもつい自動車に乗ってしまう。(第四段落)

自動車を利用する一方で、できるだけ歩くことを心がけるのが体の健康にとって必要なら、テレビをみることに読書とのバランスをどうとっていくか、が精神と頭脳の健康に欠かせない。(第五段落)

読書の効用は、知識を得ること以上に、物事を順序だてて考える訓練になることだ。情報化時代は、われわれに大量の情報を提供してくれるが、その情報が断片的である場合が多い。個々の情報の意味は何か。その背景はどのようなかを整理するには、読書に頼らざるを得ない。(第六段落)

それは本の著者の言い分をつのみにすることではない。著者が何をどう考え、どういつ結論に達したかという思考の流れをひとまとめにして知ることが、その著者の主張に賛成にしろ、反対にしろ、読者の脳細胞を刺激する。(第七段落)

読者を、著者が構築した一つの世界へ連れ出すということでは、読書はまた観劇の経験にも似ている。食事しながら、(d)あるいは家族と談笑しながらみるテレビは、極めて日常的で、暮らしの一部にさえなっている。日常生活から切り離された非日常的な

経験こそ、心を休め、精神の糧となり得ると思う。 (第八段落)

(青森県)

問一 「」にあてはまる語句を、同じ段落中の語を用いて書きなさい。

問二 (a) (b) (c) (d) の接続語のうち誤った使い方をしているものが一つある。その記号を書きなさい。また、それを正しい使い方に改めるとすると、次のどれが適当か。記号で答えなさい。

ア さて イ それゆえ ウ だが エ なぜなら

問三 「その」のさしている内容を書きなさい。

問四 第六段落の中心になっている文を一つ選び、その初めの五字を書きなさい。

問五 「著者の言い分をうのみにする」とはどういうことか。三十字以内で書きなさい。

問六 「非日常的な経験」とあるが、筆者がこの文章の中ですすめている非日常的な経験とは何か。文章中の二字の熟語を抜き出して書きなさい。

「解答」

問一 自動車と人間の足

問二 a う

問三 テレビの情報

問四 読書の効用

問五 著者の主張を何の批判もなしに受け入れること。

問六 読書

【】(私たち人間が知識を得る方法は)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たち人間が知識を得る方法は、広く言って二つある。一つは事物や他人の行動を直接観察し、体験的にものを知って行くやり方である。第二の方法は人の話を聞いて知識を得ることである。つまり他人によってことは化された他人の経験を、ことはを通して自分の知識とする手段が(A)これである。

「 B 」本を読む、新聞を見るといような活字を通しての知識の獲得は、本質的には他者の体験をことはを通して吸収するという第二のタイプに属することになる。ただ文字による知識の吸収は、(C)話しことばの持つ、時間空間的な制限から解放されるという非常な利点をさらに持っている。

人間という動物が、他の動物とはきわだった進歩発達を遂げることができたのも、他者の経験を、ことばという記号体系を通して自分のものにするという、知識の間接的な伝達と伝承が可能だったからであることは、いまさら言うまでもない。その上、この人間的特性は直ちに消え去る発話を文字化し、書物の形に固定することで、はかりしれない強化補強を受けることになったのである。

ところが物事すべてよいことばかりではない。文字化された発話である書物は、それがはじめ裏付けとして持っていた「 D 」的な状況から切り離されて、あたかもそれ自身が完結した情報であるかのように受けとめられるという傾向を持つようになる。

本に書いてあることは、ほんとは(E)そこに書いてないこととの対比と関連においてはじめて、元来意図された情報として正しく位置づけられるものであるのに、人はしばしばこれに気づかない。

何かを本の形に書くということは、さまざまな規準に基づく選択の結果である。たとえばだれでも知っていることと著者自身が思っていることは、普通わざわざ本には書かないものである。著者が珍しいと感じたこと、必要だと思つたことを書くのが通例である。それだから、書かれてあるものは、その著者があたりまえと思ひ、自明の前提としていることと、相互補完的な関係にあることを改めて認識する必要がある。

(千葉県)

問一 文章中の(A)「これ」は何を指示しているか。最も適当な部分を文章中から抜き出し、十四字で書きなさい。

問一 文章中の「B」には、どんなことが入るか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書きなさい。
ア なぜならば イ しかも ウ したがって エ ところが

問三 文章中の「C」話じことはの持つ、時間空間的な制限」とはどういうことか。次のア～エの説明のうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書きなさい。

ア ことが消えること イ ことが古いこと
ウ ことが生きていること エ ことが弱いこと

問四 文章中の「D」には、どんなことが入るか。次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書きなさい。
ア 抽象 イ 具体 ウ 主観 エ 印象

問五 文章中の「E」ここに書いてないこと」とは、つまりどんなことか。段落の内容にそって二十字以内で書きなさい。ただし、「皆」「著者」の二語を必ず入れ、「……こと」という形でまとめなさい。

問六 この文章で、筆者は話しことばが文字化されたことについての長所と短所をどのように考えているか。次のア～エのうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その符号を書きなさい。

(長所)

ア 総合的になる。 イ 作為的になる。

ウ 直接的になる。 エ 固定的になる。

(短所)

ア 完結的になる。 イ 解放的になる。

ウ 本質的になる。 エ 体験的になる。

「解答」

問一 人の話を聞いて知識を得ること

問二 ウ

問三 ア

問四 イ

問五 皆が知っている」と筆者自身が思っていること

問六 (長所)エ、(短所)ア

【】(読書は人生においてどのような位置を占めるであろうか)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読書は人生においてどのような位置を占めるであろうか。私は読書論をまず人生論として語ってみよう。読書の根本には、いうまでもなく我いかに生きべきかという欲求があるはずだ。この欲求が起るのは青春時代である。

私は青春時代を、人生の第二の誕生日として語ってきたが、つまり、はじめて「我」が自覚され、人間としての独立性があらわれる日という意味である。人間はただ母胎から生まれたというだけでは人間とはいえない。「我」の自覚、自分の生き方を自発的に問うことによって人間に形成されていく。これを生まれ変わりといってもよい。青春時代だけでなく、人間は生涯に幾たびも生まれ変わらなくては人間とはなれない。こうした生まれ変わりの衝動が、その人のいのちであり、精神はこうして形成されていくといつてよいだろう。その最初の徴候が即ち青春時代なのである。

ところで、どのようなかたちで第二の誕生日が行われるだろうか。それは、まず(A)疑問を抱くことである。人生とは何か、自分とはどういう人間であるか、神は存在するかどうか、愛とは何か、現代社会はどんな仕組みになっているか等々、人生と社会に向かつて次々と疑問を抱くようになる。この疑問こそ「我」が生まれるときの最初の陣痛といつていいだろう。しかし、これらの疑問はすべて大疑問で、簡単に答えの出でくるものは一つもない。一生考えて、体験して、それでも解決の与えられないようなものもある。われわれとして大切なのは、解決の与えられそうもない大疑問を抱くことだ。それは精神の大きさを保証するだろう。簡単に解決されるような問題を避けて、容易に見とおしのつかない難題に直面すること、これが精神を鍛えるのだ。たとえばスポーツと同じようで、障害物が大きければ大きいほど肉体が鍛えられるように「1」。

こうしてはじめて考えるということが始まる。考えるとは(B)疑問を背負うことである。青春時代が人生にとって大切な時期だといわれるのは、こうした大問題を素直に抱くからで、それは生涯を貫く一つの資質となるだろう。したがって迷いと苦痛は大きい。自分はどうのように生きるかについて思い惑う。疑問が大きければ大きいほど苦痛が大きいのは当然だ。青春の悩みといわれるものはすべて、とらえようもない問題を抱いたときの「2」にある。恋愛がそうで、青春時代は恋愛というとらえ難いすがたを確実にとらえようとして悶える時期といつてもよい。もっと広い意味で愛といつてもよい。大きな疑問を通して、愛の対象を求めていくのである。

読書が切実な問題となるのはかかるときである。自分の漠然たる悩みを先生や先輩や友人にうちあける場合もある。ちよつどそれと同じように、何かの書物に向かって自分の悩みをうちあけようとする衝動がある。書物は死せる印刷物ではなく一個の人間だ。少なくとも一個の人間の「ごとく、親しくわれわれに向かつてくる書物、それに出会う」とこそ人生の喜びといっていいたいだろう。

(大分県)

問一 「人生の第二の誕生日」の説明にあたる最も適当な部分はどこか、その部分のはじめとおわりの四字をそれぞれ書き出しなさい。

問二 「我」が生まれるときの最初の陣痛」の説明として、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア 世に生をつけ人間的に生きるための苦勞
- イ 青春時代に精神が形成されるとき苦惱
- ウ 生涯に何度も直面する難問解決への苦心
- エ 成長するために身体を鍛えるときの苦痛

問三 「 1」、 「障害物が大きければ大きいほど肉体が鍛えられるように」の表現のしかたにならって、文意が通るように、二十一字で補いなさい。ただし、「疑問」という語を必ず用いること。

問四 (A)「疑問を抱く」が(B)「疑問を背負う」の表現に変わっている。そこには、どのような意味のちがいが表れるるか、次のア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書きなさい。

ア ただ疑問をもつことより解決することが大切だと考えるようになる。

イ 単なる個人的な疑問にとどめずに社会的な拡大をめざすようになる。

ウ ただ疑問をもつだけではなくそれらについて思索し悩むようになる。
エ 単に小さな疑問をもつことから一つの大きな疑問をもつようになる。

問五 「 2 」に補う言葉として、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
ア おろかしさ イ はずかしさ ウ もどかしさ エ いとおしさ

問六 前の文章の趣旨にあわないものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
ア よき相談相手ともなるような良書との出会いは人生の喜びである。
イ 読書が切実な問題となるのは人生や社会の難問に悩むときである。
ウ 青春時代は人間の内面形成のうえからきわめて大切な時期である。
エ 青春時代は人生や社会に対する疑問を解決することが大切である。

「解答」

問一 はじめて〜われる日

問二 イ

問三 疑問が大きければ大きいほど精神が鍛えられる

問四 ウ

問五 ウ

問六 エ

【】(紐を結べない子どもがふえた)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 紐を結べない子どもがふえた。紐を用いた靴がなくなっているからだ。それでも以前はスキーをはじめる年ごろで、スキー靴の紐のために紐に慣れたものだけけど、いまはこれも止め金具でパチンとやる。だから、機会はずいにやっこない。鉛筆を削れない子、りんごの皮をむけない子も珍しくない。マッチのすれない子、これは、ガス器具の自動点火装置が普及しているせいと、子どもに火なぶりは危険だと考えて、マッチをとりあげるとおとなの安全第一主義の産物である。ご飯を薪でたけない子が多くなっても、驚くにはあたらない。

B 日常生活が便利で快適になること自体はいいことだ。だけれも、毎日、薪でご飯をたこうとは思わないし、早く鉛筆が削れば仕事の能率が上がる。私たちの毎日の生活は、この便利と快適さを地盤として、その上に築かれている。実際、多くの貴重な業績が、この土台の上に成り立ってもいる。

C 便利と快適さの例は、最近の住居にも見られる。冷房完備の高級住宅に住んでいる。ある建築家の話なのだが、生活はまことに快適なのに、あんまり現実の生活に「ひっかかり」がなさすぎて、たまらなくなる。週末にはどうしても野山に出かけて、わざとちめんどろくさい暮らしをして、生きているしをつかみたくなる。土曜日、日曜日だけでも、薪割りをする生活へもどってみるというのだ。

D 子どもにとっても、同じことが言えそうだ。現実の暮らしが便利で快適になることを、まるまる否定する必要はない。「」「、どこかで便利、快適さを否定する部分をつくらないと、肉体的、精神的に、ひ弱な人間ができあがってしまうのではないかと思う。

問一 「」「に入ることはとして次のア～エの中から適当なものを一つ選び、記号を書きなさい。

ア または ウ そうして イ けれども エ それとも

問二 「機会はずいにやっこない」とあるが、どついう「機会」か。十五字以内(句読点を含む)で書きなさい。

問三 「この」は何をさすか。文章中から的確に抜きだせ。

問四 「ある建築家の話」の内容はどこからどこまでか。文章中から初めと終わりの六字を抜きだせ。
(滋賀県)

「解答」

問一 イ

問二 紐を結べるようになる機会

問三 便利と快適さの

問四 生活はまことごとくまどつてみる

【】(「この数年の若者の間では)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 ここ数年の若者の間では、自我を確立する、つまり(A)これが自分だと決めつけることを、あえて避ける傾向がみられるようになりましだ。いったいこれはどうしてでしょうか。

2 現代の社会状況をみてみると、世の中は目まぐるしく変化を続け、常に動いています。技術が進歩し、社会環境がこれだけ大きく変わってきますと、自分たちの生活がこれから先、どんなに変わっていくのか見当もつかない、ファッションにしたっていつでも何が流行するのか全く分からない。そんな流動的な社会の中で、自分の考えや自分の生き方を決定すればどうなるでしょう。

3 自我とは、いわばホンネということす。自分なりの生きざまであり、人生観です。これを自分の中で確立させるといふことは、自分の生き方を窮屈に決めてしまうことなす。その決定した自分の生き方と、社会の進む方向とがみに一致すれば最高です。が、まあそんなことは滅多にありません。まして今日では一致しないのが当たり前。けれども、そう簡単に割り切れればいいけれども人間は社会的動物ですから「A」に、本能的な恐怖心を抱きます。

4 そこで、どんな社会が来てても対応してゆけるだけの柔軟な頭と、できるだけ多くの価値観を備えていたい。それが(イ)「一人の自分」を作り上げてしまうことを避ける若者が増えてきた、大きな要因だといえましよう。

5 まして、テレビや雑誌に見られる雑多情報の氾濫(はんらん)。いろんな分野で才能を持つ人たちがそれぞれこ数え切れなくらい紹介されています。それを見る読者なり視聴者は、あの程度でマスコミに出られるのだから自分だって・・・、などと思ひ込み、安易に自分の可能性を夢見るばかりで、現実を顧みようとしくなります。

6 こういつ考え方を持つ若者が増えますと、当然人間関係にも投影されてきます。つまり、(ウ)一人の人間とトコトン付き合い合ふよりも、なるべく多くの人間と付き合い合ふことを望む。要するに、自分の中に多くの価値観があつて、その中の一つがびったり合えばその人と付き合ふ。合わない部分は別の人でカバーする。広く浅くの人間関係がこうして生まれるのです。「最近の若者はケンカごしの討論をしない」とはよく聞くことですが、考えてみればフィーリングが合ふところではしか付き合っていないのですから、ケンカになるわけはありません。

7 「B」、自我を確立したくないという意識の裏に、実はもう一つの大切な心理が隠されています。それは「C」意識を持ちたく

ない、つまり責任をとりたくないという心理です。自分の生き方を自分で決定するということとは、その生き方に責任を持つことです。一人の人をトコトン愛するということとは、その人に責任を持つことです。その(エ)責任から逃避しようとする傾向が、とくに最近 は強くなってきています。

8 こう考えてくると、自我の確立を避ける現代においては、昔から言われる意味でのホッソというものは存在しないのかもしれない。

9 かと言って、あまりに社会の変化に適応しようとしてホッソなしに暮らしていれば、いつまで経っても自分の存在感が得られませんが。それどころか、焦燥感や無気力感にさえ襲われるのが関の山でしょう。たとえ今日と明日で考えが違ってもいい、せめて今はこれが自分の考えだ、これをやりたいんだ、という思いを持って、それを表現してみてもいいでしょう。それがあなた自身を育て、どのような時代にも処していける自信を生む、一つの生き方になると思うのですが……。

(神奈川県)

問一 「A」にあてはまる語句を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 社会に取り残されるといついつと
- イ 社会の改革を目指すといいついつと
- ウ 社会を安易に考えるといついつと
- エ 社会に適応していくといいついつと

問二 「こ」について考え方の内容を次の条件を満たして、句読点を含め二十字以上三十字以内の一文で書きなさい。

- (1) 「可能性のある自分」という語句で書きはじめること。(書き出しの部分は字数に入れない)
- (2) 「一つの価値観」という語句を必ず用いること。
- (3) 第四、第五段落の内容を参考にすること。

問三 「B」にあてはまることは次から選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ ところで ウ それなら エ おそらく

問四 「C」にあてはまる言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 傍観者 イ 被害者 ウ 支配者 エ 当事者

問五 「昔から言われる意味でのホンネ」とあるが、この内容にあてはまらないものを(ア)～(エ)から選び、記号で答えなさい。

問六 筆者が本文を通して述べている内容と一致するものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 目まぐるしく変化している現代社会の中では、自分の生き方を自分で決めてしまつと存在感が得られない。

イ マスコミで活躍する日がいつ来てもいいように、自分の才能を磨いておこつとする姿勢を持つ必要がある。

ウ 現代の若者は人間関係についても積極的になつていて、人とケンカしてまでも自分の意見を通そうとする。

エ 自我の確立しにくい社会状況ではあるが、自分を育てるためにもホンネというものはあつてもよいはずだ。

「解答」

問一 ア

問二 可能性のある自分が一つの価値観にしばられて生きていくことはつまらないことだ。

問三 イ

問四 エ

問五 エ

問六 エ

【】(何となく感じられることだが)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

何となく感じられることだが、今の学生たちは気骨があるというよりも、何となくスマートで、なめらかな人間だと思われる方がよいと考えているのではなからうか。

テレビで司会の役をするアナウンサー、あるいは、いろいろな会合の司会をする人たちを見ると、その態度は全くなめらかそのものという感じをつける。この態度を見よう見真似(まね)で受け入れている学生がずいぶん多い。「A」しかし私が偏屈なのかもしれないが、あまりなめらかさを心掛けた動きを見てみると、何となく、かすかな不愉快を私は感じる。なめらかさの中に、私を傷つけるものがある。「B」「一体これは何なのだろう。私はそこで「なめらか」という言葉について考えてみる。

日の射(さ)さない岩蔭(かげ)や流れの中の岩の上に、いつもぬるりぬるりとしてすべりやすい所がある。それを古くは「とこなめ」といった。この「なめ」から「なめらか」という言葉ができていく。「なめし皮」といえば、やわらかにすべるようにした皮である。「なめらか」は、「こつした」「なめ」「とこなめ」「なめす」などと仲間を作っている。

ところが、今は亡びたけれども、奈良時代・平安時代によく使われた「なめし」という別の言葉がある。貴人が都へ帰るとき、遊女が別れを惜しんで「わが振る袖(そで)をなめしと思うな」という歌を詠んでいる。

大和路は雲隠りたり

しかれどもわが振る袖をなめしと思ふな

という歌である。「大和へ行く路(みち)は雲に隠れてしまっています。しかし、私がここで振る袖を、どうか失礼だと、無礼だと思わないで下さい。」

この「なめし」「はやはり」とこなめ「の」「なめ」から分かれた言葉で、ぬるりぬるりとすべる感じだということである。それは決していい感じのものではない。ぬるぬるすべるといふ態度は、「a」「折目正しい態度に対して、何処(どこ)か、相手をないがしろにしたところがある。そこから失礼だ、無礼だ」という意味が生まれて来る。後にこの言葉は使われなくなったが、「c」「実際、私はテレビのあんまりなめらかな司会の仕方を見ておるときに、「なめ」から「なめし」が生まれてきた道筋がわかるような気がする。ことがときにある。「c」「学生が学校にいるつすから、あまりなめらかなばかりなのは果たしていいことがよくないことが。

「D」深い理解力などから、「b」生まれて来る質実な、しっかりした誠意のあらわれというようなものを、私は大切にしたいと思う。

問一 右の文には次の文が抜けている。「A」から「D」までのどこに入れるのが最も適切か、記号で答えなさい。
私にはうわべのなめらかさよりも、もっと大切なものがあるように思えてならない。

問二 a・bに入る語をそれぞれ選びなさい。

a ア きちんと イ さっぱりと ウ 悠然と

エ さわやかに オ あきらかに

b ア はつきりと イ ゆっくりと ウ おのずと

エ のどかに オ ゆたかに

問三 「」にはどの文が入るか、次から選び、記号で答えなさい。

ア それは後の世には、失礼・無礼の意味を表す、もっと適切な言葉が生まれたからである。

イ 昔の人も、私を感じたような不愉快さを、「なめらか」な態度の中に感じたことがあったのである。

ウ 言葉の形や意味が、時代とともに変化して行くという例がここにも見られるのである。

エ それは後の世の人々が、昔の人ほど「なめらか」な態度の中に不愉快を感じなくなったからである。

(青山学院高)

「解答」

問一 D

問二 a ア b ウ

問三 イ

【】（近ごろの観光旅行はたいそう便利になって）

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

近ごろの観光旅行はたいそう便利になって、前もって旅行業者に予定地と日数と予算をつたえておけば、あとは出発点にあつまりさえすればよい。デラックスなバスに席をとってもらうだけの手数をはらえば、古寺を見てまわるにも、高原や湖沼を見物するのに、すこしの足数もいらぬ。（第一段落）

しかし、ことはここで急転する。甘いキャッチフレーズに誘惑されてバスで観光旅行をしてまわったあと、どんな記憶のこったかというと、ぼんやりしていて実感が無い。こんなはずじゃなかった、せつかくあれだけたくさん見物してきたのだから、もっと印象がのこらなくてはかきがないと、もどかしくなる。それで、ながめてやきつけてきた風物を目の奥にもう一度思い浮かべようとすると、湖の光景や山のながめがダブルイメージになってかさなって出てきたり、思いつかんだ景観が、実は前から絵葉書でよく知っていた風景の複写ものだったりということになる。（第二段落）

バス旅行での観光気分の味気なさというもの、それがなにに由来するのかというと、次々と光景が変わるためによくおぼえきれないためだと、だれでも考えるが、本当の理由はまったく別のところにある。……バスに乗せられた自分は、同じところに、うごかずじっとしているままで、目に映る景色の方が横をながれて、視界にはいつてきてははずれて消えてゆく。この光景の流れは、まわる走馬燈と本姓同じで、実はまぼろしなのである。私の前にある風景が私にとってありありと実在するためには、自分の足で一歩一歩大地をふみながら前進しなくてはだめなのである。（第三段落）

バスにのっているからには、自分は車といっしょに動いているのだから、自分は前向きに進んでいるんじゃないか。だいいち、私が、この目でちゃんと見ているものがまぼろしだなど、とんでもない奇妙な考え方だ……と考えるのは型にはまった見方でしかない。

（第四段落）

私たちが自分から前進し、前進する私に抵抗する坂や岩や湿地があつてこそ、それは実在したのである。私をはばむ抵抗がなければ、それはただまぼろしであつて、そこに敵としてあつた実在物ではない。本姓の上からは私たちが見る「夢」と同じところさえある。つまり、夜見る夢の場合には、私はつづりかわる光景をただながめる受け手としての役しかもっていない。「A」、目がさめてからあと、夢の中身はつづれているのである。こくたまに、私たちは自分の中で役を演じる実感のこもつた夢を見ることが

あるが、こうした夢はあととまでよく記憶にのこる。夢といえは非實在にきまつているとだれでも思っつけれど、自分が能動的に動いて役を演じた実在感のある夢は、ちゃんと私たちの生の歴史にくみこまれるもので、それなりに本物である。決して非實在ではない。(第五段落)

修学旅行で、バスにつみこまれてまわった薬師寺や唐招提寺や法隆寺がどれも印象に残らず、もう一方で、京都に泊まった日、自由行動の時間に、仲のいい連中と街の探検にでかけて見た裏街のようすが、あざやかに記憶されているのは、まさに「B」「C」だったかどうかにかかっているのである。(第六段落)

問一 「……………」のこの場合の用い方は次のどれか。符号で答えなさい。

ア 前の文の内容に対して、反対のことを述べる。

イ 前の文の内容をふまえ、その例外を述べる。

ウ 前の文の内容を受けて、さらに詳しく述べる。

エ 前の文の内容を転じて、別の内容を述べる。

問二 「私をはばむ抵抗がなければ、それはただまぼろしであって、そこに敵としてあつた実在物ではない」とあるが、この文の内容を正しくとらえているのは次のどれか。符号で答えなさい。

ア 平凡な風景で印象に残るものがまったくなければ、自然の風景はまぼろしのようになんて忘れられてしまう。

イ いかにも美しくともそれと比較対照するものがなければ、自然の風景はまぼろしのようになんて忘れられてしまう。

ウ 人をまったく寄せつけないような秘境でなければ、風景は実感として感じとることができない。

エ 行く手にある障害を自分でのりこえて行かなければ、風景は実感として感じとることができない。

問三 「A」に入ることばは次のどれか。符号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ それに エ さらに

問四 「ちゃんと私たちの生の歴史のなかくみこまれる」とあるが、同じ意味を述べている部分を、同じ段落の中から、十五字以内（句読点はふくまない）で抜き出して書きなさい。

問五 右の文章の六つの段落のうち、「それまでの筆者の意見に対する反対意見を予想して述べ、その反対意見を否定している」段落は第何段落か。段落の番号で答えなさい。

問六 「B」に入ることばは次のどれか。文章全体をふまえて答えなさい。

ア 親友とともにした行為 イ 楽しんでした行為

ウ 自分からした行為 エ 制約されずにした行為

（栃木県）

「解答」

問一 ウ

問二 エ

問三 ア

問四 あとあとまでよく記憶に残る

問五 第四段落

問六 ウ

【】(かつて人類は純粹な「休日」とか余暇という概念を知らなかった)

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

かつて人類は純粹な「休日」とか余暇という概念を知らなかった。労働のない日は「A」、むしろ聖なる行事のために人間が忙しく働く一日であった。もちろん「ちそうも食べたし集まって舞踊も楽しんだが、それとてもけつして暇つぶしの余興ではなかった。それはまず、神をことほぐための共同体の行事であり、個人にとっては楽しかるうが、楽しくなかるうが、一定の規則に従ってはたさなければならぬ義務ですらあった。(1)

たぶん「休日」にもっとも近いのは西洋人の「日曜日」であるが、これにしても、キリスト教徒にとってはたんなる労働の余暇ではない。トルストイの童話などにも出て来る話だが、日曜日に働く人間は、神にたいする。冒流者として非難されるのが本来であった。なぜなら、この日は教会で祈り、残りの時間は静かに神を思うために設けられた一日であり、人間がどう使ってもよい自由な時間などではなかったからである。骨休めはこういう一日の結果として生まれるとしても、けつして()それが日曜日というものの目的ではなかった。そして、「このことは日本の村祭りや、盆や正月の伝統的な「休日」についてもあてはまることなのである。(2)ひと言でいって、本来の祭日は人間が何かを (aする・bしない) ために作った一日だが、これに対して、現代の休日は何かを (aする・bしない) ために設けられた日だといえる。祭日には目的もあれば、なすべきことのプログラムもあったが、われわれの休日はたんなる 時間にすぎない。目的といえば、せいぜい労働の疲れをいやすことであって、それ自体の積極的な意味というものを失ってしまったのである。考えて見ればスポーツにせよ、行楽にせよ、今日の人間が余暇にすることはたいいかつての祭日の行事から生まれている。表面だけを見れば似ているように見えるが、それをする人間の意気こみの違いは明らかであろう。昔の人はそれをするために労働を休んだのに対して、現代人はまず労働を休んで、そのうえで何かすることはないかと探し回っている始末だからである。(3)

「B」、スポーツや行楽から神聖な意味が失われたとき、人類はどうやらひそかな不安を感じ始めたらしい。どう使ってもよい自由な時間が増えたわけだが、裏返せば、それはどう過ごせばよいかわからない空白な時間の増加であった。いいかえれば、一日の行動を導く生活の様式がなくなつたわけで、人間はあたかも、道のない砂ばくに立たされたような不安を感じ始めたといえる。(4)そこで西洋人が発明したことは休日の生活に労働そのものの様式を移し入れることであつた。労働は技術によって導かれているが、

西洋人は休日の暇つぶしを徹底的に技術化しようとした。ゲームであれスポーツであれ、娯楽は記録や点数を争うものになり、そのための技術的な能力を競うものになった。労働もまた生産の量をめざすものであるから、これによって娯楽は一種の疑似的な労働に変わったといえる。疑似的とはいえ、労働はそのなかに一定の規律と法則を持っているから、人間は（ ）それを頼りに休日のな時間を律することができる。そこには、神聖な目的も現実の目的も実在しないのだが、少なくとも記録や点数は、人間に目的があるかのような錯覚をあたえることができるからである。（ 5 ）

「ア」、現代のように余暇の時間が爆発的にふえると、こうした疑似的な方法はしだいに行きつまりを見せるようになった。マシーンやゴルフに凝ってみても、時間が多くなれば点数の魔力も少しずつ色あせて見えるようになる。それにつれて、なんのためにという疑いも頭をもたげて、ついには休日の　な時間が耐えがたいものになるのである。（ 6 ）

目下のところ、大部分のひとびとはまだ、こうした不安を直接的なかたちでは感じていない。「イ」、人間の生活がまだ完全に労働を中心にしていて、成果を量的なかたちであげるといふことが、人間の精神のすみすみまで支配しているからである。広い意味での生産技術への信仰が生きており、なんであれ技術的な達成をめざすのはよいことだ、という感覚が生き残っているからである。「ウ」、生産第一主義の勤勉の価値を否定してひたすら余暇の拡大を主張する人は、皮肉なジレンマのうえに立っているといえる。「エ」、人間の精神から生産第一主義が残らず消えうせたら、当然それにつれて疑似的な労働の魅力も消えるはずで、そうなれば拡大された余暇はそれこそなんの様式もない、砂ばくのような時間になるのは明らかなのである。（ 7 ）

当面、なによりも急がなければならないのは、休日の生活に（ ）それ自体の独自の様式を作ることである。特定の信仰とも関係なく、現実的な目的とも無関係に、しかし一日を一定の規律とリズムを持って過ごす方法を考えなければならない。直接の参考にはならないとしても、その場合われわれは昔の日本人の知恵を思い出すことができる。（ 8 ）

問一 「A」をうめるのにふさわしいと思つものを次から選び、符号で答えなさい。

ア 「休日」でもあり、「祭日」でもあつて

イ 「休日」でも「祭日」でもなくて

ウ 「祭日」ではなく、「休日」であつて

エ 「休日」ではなく、「祭日」であつて

問二 「B」をうめるのにふさわしいと思つものを次から選び、符号で答えなさい。

ア 「祭日」や「休日」がしだいに少なくなり

イ 「祭日」や「休日」がしだいに増え

ウ 「祭日」がしだいに「休日」に変わり

エ 「休日」がしだいに「祭日」に変わり

問三 ・の(a)する・bしない(を、本文の内容にそつて考え、どちらか正しい方を選んで符号で答えなさい。

問四 本文中、三箇所の 　な時間の空白部分を、本文中の漢字二字からなる共通のことばでうめよ。

問五 ア、エをつめるのにふさわしいことばを次から選んで、符号で答えなさい。

ア したがつて 　　　　　イ もし

ウ というのは 　　　　　エ けれども

【】（最近、「手づくりの味」ということが盛んに評価されている）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

最近、「手づくりの味」ということが盛んに評価されている。文字どおり人間が素手で、せいぜい小道具を使う程度で、つまり大型の機械力を頼らずに作り出した製品についていわれるのが、この言葉である。かつては質素な日用品であり、今や趣味の対象と化した産物に対し、「民芸品」または「工芸品」という新しい呼称が付けられるようになった。手づくりの味と再評価とは、言い方をかえると、民芸品ブームということになる。（第一段落）

伝統保存のため作られているという薩摩さつまがすりの場合を考えると、必需品ではないまでも、日常の衣類として着ることが可能である。「A」現代社会において、実用品としての機能も、まだ保持しているわけである。ところがもっと極端になると、例えば自分たちで手づくりの「わらじ」をこしらえ、これを履いて楽しんでいるグループがある。わらじは、実用的意味を今ではほとんど持っていない。そういう非日常的な希少性だけが、その存在を支える価値だと言えよう。（第二段落）

民芸品と呼ばれる産物と、その昔の同種の製品とが似て非なるものであることは、製作された環境に目を向けた時、明らかになってくる。現在、そのような民芸品を職業として作っている人がいる。そういう人の数は多くないが、世間はこの人々のことを、「B」「よりも」「C」として待遇する。また、職業ではなく趣味として、手づくりに精出している人々もいる。作ること自体が楽しみになっている。生活に追われているだけでは、とてもできないことで、ある程度のゆとりがあれば「D」、そういう世界に浸れる。これは一種のせいいたくと言えるであろう。日曜大工にしても同様で、家計の補助にと、無理して作っている人もないことはないかもしれないが、それが主流とは考えられない。日曜大工のほとんどは、余暇の利用を兼ねた一石二鳥にちがいないのである。今の民芸品が日用品だったその昔、民衆が生活に追われ続けながら汗水たらして作っていたのである。（第三段落）

最近の「手づくり」への回顧趣味を見たとき、このあたりに根本的な誤解があるように感じられてならない。民芸品の独自の個性を愛好することは自由である。「E」、それはあくまでも民芸品であって、その昔の相似の製品とは別のものである。民芸品をながめ、「明治以前の日本人はこんなすばらしい技法を持っていたのに、今は全く顧みず、機械文明のあとばかり追っている。」と、したり顔に批判する現代人こそ、恐れを感じてしかるべきではあるまいか。かつてこれらの産物を作り出した民衆が、その境遇からの脱出をどれほど渴望し続けたことが、その中から生まれたものこそ、今の民芸品の原型だったのである。（第四段落）

(鳥取県)

問一 「素手で」は後のどのことばにかかっていくか。一文節をぬき出して書きなさい。

問二 「A」「E」にあてはまる最も適當なことはを次から選んで、記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ つまり エ むしろ

問三 「非日常的な希少性」という表現を、次のア、エのいずれかの形容詞の語幹に「さ」をつける形に置きかえて書きなさい。
ア なつかしい イ 楽しい ウ めずらしい エ うらやましい

問四 「B」「C」にあてはまる最も適當なことはを次から選んで、記号で答えなさい。

ア 芸人 イ 職人 ウ 研究者 エ 芸術家 オ 努力家

問五 「D」にあてはまる強意の助詞を、第四段落からぬき出して書きなさい。

問六 「一石二鳥」の「二鳥」にあたるものを、第三段落からぬき出して、それぞれ五字で書きなさい。

問七 「根本的な誤解」とあるが、誤解が生じる原因について、第三段落の中にある十二字のことばに「ないから」をつないで書きなさい。

問八 第三段落の性格について、最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 一・二段の話題を受け比較検討を進めている。
- イ 一・二段の実例を述べて主張を反復している。
- ウ 一・二段の実例を比較して批判を強めている。
- エ 一・二段の話題と対立する論を展開している。

問九 「したり顔に」とは、どのような様子か。最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 深刻な表情で
- イ 真剣な表情で
- ウ 得意の表情で
- エ 失望の表情で

問十 「その境遇」とは、どんな境遇か。第三段落の中から最も適当なことをぬき出して、三字で書きなさい。

問十一 筆者の心情が最も感動的に表現されている一文を、第四段落の中からぬき出して、はじめの三字を書きなさい。

問十二 筆者はこの文章で何を述べようとしているのか。最も適当なものを次から選んで、記号で答えなさい。

- ア 民芸品の作られた背景を常に考え、民芸品の個性を生かす作品を今後も製作していかねばならない。
- イ 手づくりの味を評価するだけでなく、民芸品が日用品として生まれた背景に目を向けねばならない。
- ウ 民衆が貧しい生活の中からうみ出した民芸品の技術は、現代の民芸品作家により受け継がれている。
- エ 民芸品に接していると、常に自分のおかれている境遇からの脱出を願う人間の姿が見えるものだ。

「解答」

問一 作り出した

問二 A ウ E ア

問三 めずらしさ

問四 B イ C エ

問五 こそ

問六 家計の補助 余暇の利用

問七 製作された環境に目を向けないから

問八 ア

問九 ウ

問十 貧しい

問十一 かつて

問十二 イ

【論説社会】

【】(若い日の友だちこそ生涯の友だ)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

若い日の友だちこそ生涯の友だ、よき友は若い日にこそ選べ、ということがよく言われる。わたしも深い実感をこめて、そうだとはいたい。若い日こそ打算のない純粹さで、人の値うちが見え、濁りのない気持ちで人を選べると思うからである。

ところで、若い日には、友を求める激しさから感傷的な色どりを添えて、友情の美しさにあこがれる時期がある。しかしわたしは、感傷的な期待は禁物だと思う。友情というものを、あまりにも美しく思い描きすぎることは、かえって友情を見失うことになり、友情に失望しなければならなくなることだと思う。

たとえば、親友どうしは、多くの共鳴を感じ合うことによつて、友人のすべてを完全に理解し合っていると錯覚したり、また、そうあらせたいと願いすぎたりすることがある。それを「**」**とすることはさしつかえない。しかし、現実にお互いの完全な理解が成り立つと考えることは、あまりに甘すぎるし、感傷的な期待だと、わたしは言いたい。(中略)

友情というものは、他人を自分と全く同じ気持ちの人間だと思つことの上になり立つのではなく、むしろ自分とは別の人である他人を、その人にその人なりの人間としての値うちを認めて、お互いにくく自然に尊敬し合うことができる、そういう人と人との巡り合いの中で生まれるもののように、わたしは思っている。認め、認められるということは、生きていく自分の人生にとって貴重な喜びであり、人間に自信を与えるたいせつな力でもある。しかしそれは、すべての完全な理解の一致というものではなく、お互いの人の生きていく立場をささえているたいせつな本質のその一面で、深い共鳴を感じ合ったことなのである。そして、励まし合いの情熱を感じ合うことが、友情というもののありがたさであり、美しさなのだ、わたしは思う。

しかし、この世の中には、その人のすべてを無条件に認めることのできる完全な人格の持ち主などというものはあり得ない。もしもあり得たら、そんな人間には、人間としての生きたおもしろみなどというものはまるでなく、近づく気にもなれないであろう。人間とは、弱点があり、弱点があることで、人間なのである。

したがって、その人の持っている値うちのたいせつな一面でその人を認め、尊敬を感じるといふことは、それによつて、その人の持っている弱点や欠点に寛大になれるということである。つまり、人間としての値うちを認めていることによつて、欠点を許すこと

のできるのが友情というものである。

(岩手県)

問一 「あまりにも美しく思い描きすぎること」と同じ内容のものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 打算のない純粹さで人間の値うちを見ること。

イ お互いの完全な理解が成り立つと考えること。

ウ 多くの共鳴を感じ合えると錯覚すること。

エ 若いうちに生涯の友を選ぼうと思ふこと。

問二 「」にあてはまることは次から選び、記号で答えなさい。

ア 理想 イ 根拠 ウ 手段 エ 対象

問三 「人間とは……人間なのである」とあるが、弱点も欠点もない人のことは、どう表現されているか。文章中から九字で抜き出して書きなさい。

問四 この文章では、友情についてどのように述べているか。次から選び、記号で答えなさい。

ア 友情とは、人間の本質的な部分である弱点や欠点に、お互いに多くの深い共鳴を感じ合うところに成り立つものである。

イ 友情とは、人間としてのおもしろみを相手の弱点や欠点に認め、打算のない純粹さで接するところに成り立つものである。

ウ 友情とは、自分とは別の存在である相手の値打ちを認めることにより、欠点を許すことができるところに成り立つものである。

エ 友情とは、お互いに相手を完全に理解し合おうとすることであり、人間としての欠点に寛大になるところに成り立つものである。

「解答」

問一 イ
問二 ア
問三 完全な人格の持ち主
問四 ウ

【】（人間どうしのつきあいは）

次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

人間どうしのつきあいは、いつも春風駉蕩はるかにたぎらというわけにはゆかない。ことに日本人のように緊張度の強い国民は、ともすれば殺気だってくる。それを緩めるのが機知とかユーモアとか呼ばれるものであるが、この二つは、それぞれに違っている。

例を挙げてみよう。アカデミー・フランセーズで、ある時、会員から頭割りに義援金を集めたことがあった。締め切つて勘定してみると、三十七人が六フラン銀貨を一枚ずつ拠金きんしたはずなのに、銀貨は三十六枚しかない。ところが会員の中に吝嗇しんしやくをもつて天下一に鳴り響いている男がいたので、みんなの視線はいっせいにその男の方に注がれた。しかしその会員は、「ぼくは確かに拠金したよ。」とがんばつて、一歩もひかない。そこで金を集めて歩いた会員は、「あの人が拠金するのをわたしは見なかったが、しかし信じることにするよ。」とつぶやいて不承不承納得したが、一座の空気がすっかり白けてしまった。するとフォントネルが大きな声で叫んだ。「ぼくはあの人が拠金するのを確認に見たよ。しかしどうも信じられん。」そこで一座の緊張がほぐれて、みんながホツとした、といつのである。

この場合、その吝嗇な会員が拠金しなかったことを、だれもが口に出して言いたかつたのであるが、それをはっきり言うことはその会員を傷つけることになる。フォントネルは、言い方をちよつと変えただけで、一座の人々の気持ちを代弁したのである。その吝嗇な会員は、心の中で、「こんちくしょう!」と思つたかもしれないが、怒るわけにはゆかない。こつこつを機知（フランス語でいうエスプリ）と呼ぶのである。フランス人のもつとも得意とするやつで、人の意表に出て言いたことを言うのである。

もう一つ例を挙げると、ある人がバーナード・ショーに、「金曜日結婚すると不幸が起るといふのはほんとうですか。」ときくと、彼は、「もちろんですとも。どうして金曜日だけ例外であることができましよう。」と答えたといふ話がある。「この場合は、話題の中心が、「A」から結婚そのものに移し変えられたわけで、アクセントの置き方で話の内容ががらりと変わったのである。こんな例を挙げるときりがないが、エスプリとは、相手の武器を逆に取つて相手をからかつたり、やつついたりする一種の自己防御と言つことができよう。これは相当頭の鋭い人でなければできないことで、下手にやると相手を傷つける場合が少なくない。

しかしユーモア、特にイギリス風のユーモアはその全く反対と言つてよからう。サミュエル・バトラーは、「人間に向かつて、彼のばからしさを示すに足るだけ十分に鋭くされたユーモアの感覚は、人間をあらゆる過失から救つてある。」と書いているが、ユ

「モアの本質は、人間の愚かさ、ばからしさを、自分自身を材料にして笑う点にある。もしエスプリが、「B」ということにあるとしたら、ユーモアは「C」ということにあると言えよう。

ここにひどく自尊心の強い男がいるとする。彼は自分がこの世の中の中心であり、いつさいの事が、彼を中心にして動いているように思い込んでいる。(い)「他人の目から見ればけっしてそうではない。その場合、その男が他人の目にどんなふうに映っているかを見せてやりたいと思うのは、だれしもの抑え難い欲求であろう。そのときその男に向かつて、「おまえはばかで滑稽だよ。」と言つかわりに、自分自身を材料にして、その男が他人の目にどんなふうに映っているかを見せて、思い知らせてやるのがユーモアというものである。

したがって、ユーモアを解する人、ユーモアの感覚を持っている人とは、他人が自分をながめているのと同じ目で、自分をながめることのできる勇氣と知恵を持っている人と言つことができよう。

「適切な時に、みんなが彼自身について言いたく思っていることを、自分の口から言つことのできる人間は、不意に一座の空気をより軽く、より呼吸しやすいものにする。彼の周りの人々は微笑し、上機嫌になる。」とアンドレーモロワが書いている。

イギリス人が戦争中でも、けっしてユーモアを失わなかったことは多くの人々の語るところであるが、例えばこんな話がある。今度の戦争の初期に、ロンドンが猛烈な爆撃を受けていた時、ある大きなデパートの一部が爆破されたことがあった。(三)「その翌日、デパートの入り口に大きなポスターがはられ、「本日より入り口を拡張致しました。」と書かれてあったということである。

自己自身を客観視して、それを辛辣しんせつにからかい、批判できるためには、強い自信を持っていなければならない。イギリス人が彼らのことを痛烈に風刺した外国人の書物を歓迎「D」のは、その自信の現れと言つことができよう。

こう考えてくると、人ときあう上で我々に欲しいのは、エスプリよりもユーモアであるように思われる。機知縦横で、他人の悪口に巧妙で、世相について毒舌を弄もよほする人は日本人の中にもけっして乏しくない。しかし彼らの毒舌は妙に人の心を冷たくする。他人の欠陥を突く目は実に鋭いが、自分自身に対してはひどく点が甘いから、聞いているうちに、本人の根性のケチ臭さがだんだん見え透みいてきてあさましくなってくる。他人の愚かさを笑う前に、(は)「自分の愚かさを笑うことから始めたら、我々のつきあいは、もっと和やかなものになるにちがいない。

問一 「(い)(は)にはいる最も適当なことはそれぞれ次のア～オから選び、符号で答えなさい。
ア ただ イ すると ウ しかし エ そして オ ます

問二 「ぼくはあの人が掘金するのを確かに見たよ。しかしどうも信じられん」という言い方がなぜエスプリであるのか。最も適当なものを次のア～エから選び、符号で答えなさい。

ア 掘金するのを見たと言って疑われている人をかばっているやさしさがあるから
イ 掘金するのを見たと言いながらも吝嗇だから疑われるのだと批判しているから
ウ 掘金するのを見たと言って一座の空気をなごやかにしたから
エ 掘金するのを見たと言いながらも信じられない自分を恥じているから

問三 「A」にはいることは文中から抜き出して答えなさい。

問四 「B」「C」のそれぞれにはいる文を次のア～エから一つずつ選び、符号で答えなさい。

ア 「おれはでくのぼつだ」
イ 「おれはでくのぼつではない」
ウ 「おまえはでくのぼつだ」
エ 「おまえはでくのぼつではない」

問五 「自己自身を客観視し」を、よりくわしく説明している部分をそのまま文中から抜き出して答えなさい。

問六 「D」にはいることは次のア～イから選び、符号で答えなさい。

ア する イ しない

「解答」

問一 (い)ウ (ろ)イ (は)オ

問二 イ

問三 金曜日

問四 B ウ C ア

問五 他人が自分をながめているのと同じ目で、自分をながめる。

問六 ア

【論説自然】

【】(少年のころの桜はもっと長く咲いていた感じたが)
次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

少年のころの桜はもっと長く咲いていた感じたが……と春と同じ思いを繰り返してきたが、ことしの桜は久しぶりに長かった。歩いて通勤できるようになって花を見る目のほつた、少年時代ののどかさをもどってきたせいにちがいない。

気象用語に「桜前線」というのがあるが、このことばはいただきかねる。季節感はやはり、「梅一輪一輪ほどの」とか「風の音にぞ」といった微小感覚のものであり、昔からある「花だより」のほつが、はるかに風情に富むのである。「しばみ臆らむ」「ちらほら咲き」「八分咲き」「散り初め」「散り果て」。花だよりのことばは、微小感覚を表し分けてまことに風情に富んでいる。

ところが散り初めのころのある日、枝を離れた花びらを見ていて、これが地面に達するまでの間の状態を、ぴたりと表すことばがないのがついた。風がいつせいに散らす花には、「花吹雪」「散り交う」ということばがある。だが一ひらまた一ひらと、自分の重みだけで木を離れ、てゆく花びらのありさまを言う動詞は簡単には見つからない。具体的に言えば、このを、「散る・落ちる・流れる・こぼれる」などで埋めてみてもびたりとはゆかないのである。

膚に感じるほどの風はなく、空は青く晴れわたっている。今しも枝離れた花びらは、空気がそこにあるのだということを感じさせる程度の支えを受けて、静かに漂つがごとくにしつ、しかし確かに地表へ降りてゆく。それは「漂つ」でもなく、もとより「降りる」でもない。

これと似たような光景を、私は秋の信州で見たことがある。落葉松の「まやかな葉が、同じように自分の重みだけで枝を離れ、金色の光をひるがえしながら、音もなく地表に降り積むのであった。落葉松というものを見るのがそもそも初めてであったから、私はその美しさと静寂に息をのみ、林の中にたたずみつくしたのを覚えている。そしてそれを日記に書「つ」として、「落葉松の葉が」とだけ書いてたちまちことばにつかえたものだ。青年時代の経験だが、今なおあの光景を表すことばを発見できないでいる。

桜の花びらと、落葉松の葉と、自然はついに言語の及び得ないものであるうか。何をそつめんどつな、「降る」でよいではないかとも思つのだが、雪よりも長く時間をかけて、浮かびながら降りてゆく一枚一枚の「A」が、「降る」には欠けていてもどかしい。

花だよりのいろいろのことは作り出し、育ててきた日本語だから、私のまだ知らないところに、あの美しさを表す美しいことばがあるのかもしれない。日本語になくはならぬことばのように思えるのだが。

問一 「季節感はやはり、「梅一輪一輪ほどの」「とか「風の音にぞ」といった微小感覚のものであり」の部分、
「梅一輪一輪ほどの暖かさ」の句や、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」の歌に表された季節の微小感覚について述べたものだが、このような季節の微小感覚が感じられる俳句を、次の1から7までのの中から二つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 五月雨さみだれや大河を前に家二軒
- 2 大根引き身を柔らかに伸ばしけり
- 3 くらがねの秋の風鈴ふうりん鳴りにけり
- 4 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる
- 5 われときて遊べや親のない雀すずめ
- 6 ねぎ白く洗ひたてたる寒さかな
- 7 菜の花や月は東に日は西に

問二 「あの光景」とあるが、それを具体的に表している一文の初めの五文字を書きなさい。

問三 「言語の及び得ない」とはどういうことか。次の二語を用いて書きなさい。

ことば、表現

問四 「A」の中に適當することは、次の1～5までの中から1つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 微妙な季節感
- 2 音もなく降り積むまでの時間
- 3 数量と重量についての微小感覚
- 4 桜の花びらと落葉松の葉の微小なちがい
- 5 葉が光をはねかえすようす

(山梨県)

〔解答〕

問一 3、6

問二 落葉松のこと

問三 言葉で表現しつくせない。

問四 3

【】(春が過ぎてから夏になり)

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「春が過ぎてから夏になり、夏がすんでしまつてから秋が来るのではない。春はまだ春の季節そのまま夏の間から早くも秋の気が通つており、秋は秋の季節のうちにそのまま寒くなり、冬は冬の季節の中に、小春びよりのような、ばかばかした春めいた日があつて、冬のままに草も青くなり、梅のつぼみもできてくる。

木の葉が落ちるのも、まず古い葉が落ちて、それから新しい芽が出るのではない。新しい芽が下から生まれてくるので、その押し出す力にたえきれないで、古い葉は落ちるのである。

こつこつと、新しく生まれたものを、迎える勢いが下に待ちかまえているので、それを待ちつけるとる順序は非常に早く、突然新しいものが生まれるように見えるのだ。」(徒然草一五五段)

この文章をゆっくり注意して読み返してください。

二十世紀の科学時代に生まれたばかりたちでも、つつかりすると、夏がすっかり終わつてから秋が来ると考えたり、古い木の葉が落ちてしまつてから、新しい芽ができると考えはしないでしょか。

枯れたような冬の木の枝には、もう若々しい新芽の準備ができていふことと、ぼくたちは見おとしていないでしょか。(ア)
古いものの中に新しいものが芽ばえているといふこと、新しいものは、そこからやつて来るのではなく、古いものの中から自然に生まれ、時とともに成長して行き、その生き生きした力が、古くしがみついているものを、はねのけて出てくるといふ考えかた、この考えかたこそ、自然にたいしても社会にたいしてもあてはまる、まったく「」的(イ)

自然科学などといふものもなく、学問といえ、宗教上のことか古いしきたりを暗記することぐらひにしか考えていなかった、中世のような時代に、これほどまでにすぐれたしいもの見かたを、うちたてることのできた兼好法師の「徒然草」は、まったくすばらしい思想の書物であるといわなければなりません。(ウ)

彼はその考えをさらにおしすすめて、「季節のうつりかわるといふことは、なにににつけても実におもむきの深い、あじわいのあるものだ。」(徒然草一九段)といふことは書きはじめた文章の中に、その気持をはっきり示しています。

この文章は、春のはじめの a のどかな日かげや鳥の声、青い草がもえ出して来て、気持が浮き立ってくることから、b しいに

青葉になって春がすみも深まり、折からの雨に花もあわただしく散り、cやがて山吹の花が美しく開き、藤の花房が心もとない姿でおぼろに咲きはじめると、dもう初夏がおとずれて来る。

そういつた季節のうつりかわりを、春から夏、夏から秋冬というふうには、動き行く風物としてとらえています。(H)

「枕草子」などが、自然をこまかく見ているのは、主として動く自然ではなく、静かな瞬間をきりとり、あざやかに見せてくれたのですが、兼好法師は自然の姿がどどんうつりかわって行く、その変化の中におもしろさを発見し、それを生き生きと描き出しているのです。

兼好は、この文章の中で、「こういつ書きかたは、みな昔の「源氏物語」や「枕草子」にいいふるされたことであるがなどと、少し「」のように遠慮していつているのですが、読みくらべてみると、「源氏物語」や「枕草子」のまねだとはいえず、自然の風物にたいして、兼好独自の新しい眼へめをそそぎ、新しい美しさを発見しているといつことができるのです。

問一 「」にいれるのに最も適当な語を、次のうちから選びなさい。

- ア 特徴 イ 具体 ウ 象徴 エ 科学

問二 「」にいれるのに最も適当な語を、次のうちから選びなさい。

- ア 気がきく イ 気がさす ウ 気が抜ける エ 気がつまる

問三 a「」のどかな、b「」しだいに「、c「」やがて、d「」もう「」のうち、形容動詞はどれか。

問四 「源氏物語」の作者はだれか。次のうちから選びなさい。

- ア 光源氏 イ 在原業平 ウ 清少納言 エ 紫式部

問五 次の文は、(ア)、(イ)、(ウ)、(エ)のいずれかの後にはいる。どの後に入れるのが最も適当か。

ところが兼好は、このような新しい考えかたを、ただ思想としてうちたてただけでなく、文学としても、新しいものの感じかたとしておし出しているのです。

問六 本文の要旨のまとめとして最も適切なものを、次のうちから選びなさい。

ア 自然の美しさは、静かに動かないかたちでも、あらわれるにちがいありませんが、事実、自然は動いてやまぬものですし、それが自然のほんとうの姿である以上、自然の真の美しさは、やはりうつり行く姿の中にこそ、はっきりとあらわれるはずのものです。

イ 兼好は、ものをこまかく観察し、表むぎのことでこまかさねず、また、ものを論理的に考えてゆき、そのようなことから、中世のような封建時代のひととしては、めずらしいくらい科学的に考えることのできたひとでした。

ウ よく科学と文学とは、まるで反対のもので縁のないもの、文学者に科学はいらないし、文学者に科学は役に立たないというひともあります。が、「徒然草」のばあいを見ても、この考えかたはあやまりだということができます。

エ 兼好は、ものごとをこまかく観察し、理づめに考えることができたために、自然にたいしてもゆきとどいた新しい味わいかた感じかたを身につけ、新しい美しさを見出すことができたのです。

(明治学院高)

問六 問五 問四 問三 問二 問一 「解答」
工 工 工 a イ 工

【】(人間は確かに万物の霊長である)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 人間は確かに万物の霊長である。人間には知恵があり高度の技術を持ち、詩を作り音楽を奏で芸術を創造する。「 」、自然は万物の霊長たる人間のためのみにあると思つのは大きい間違いだ。自然はあらゆる生物の貴重な共有物である。鳥も虫も魚もみんな自然の恵みを享有すべき分け前を持つている。波が寄せては返す干潟の砂や、雑草の茂る泥んこの湿原などは、人間にとって何の価値もないものかもしれぬ。だがそこに棲んでいるカニやアサリやカエルやメダカやゲンゴロウなど小さな生き物にとっては、かけがえない大事な生息地なのだ。彼らにとって完全舗装の高速道路もじゅうたんを敷きつめた高級住宅も何の値打ちもない。このささやかな分け前の自然に対して、人間はもっと思いやりを持ち寛容でなければなるまい。湖沼や海岸干潟が片っぱしから埋め立てられると、渡り鳥もだんだん来なくなる。鳥なんか来なくても、石油コンビナートや臨海工業地帯で経済が繁栄すればよいという人もある。だが渡り鳥に見捨てられるような国はろくな国ではない。鳥の次は人間の番だ。地球の自然は人間だけのものではない。みんなと平和共存してこそ、自然のハーモニーは保たれ、自然の生態系は秩序正しく順調に営まれ、微妙な摂理のなかに、人類も無事に生存し且つ栄えることができるのだ。

B 今の人間はいささか思いあがつていやしいか。科学と技術が高度に発達し、月旅行のアポロ宇宙船やスペース・シャトルなどどんな巨大なもので、どんな極微精緻なものでも造れる。ひよっとしたら人間は“第二の造物主”ではないかしらうなんて……。そんなに万能な人間様でも、ポウフラ一匹、ゴキブリ一匹、雑草の草っば一枚も作れない。やはり人間は自然に対して、もっとへりくだった気持ちになり、自然を尊重しなければなるまい。自然への謙虚さ、それが自然保護である。

(滋賀県)

問一 「」にあてはまることばを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ そして エ つまり

問二 「」のささやかな分け前の自然「」について具体的に述べた部分を、A段落中から二十五字で抜き出しなさい。

問三 「ひよっとしたら人間は”第二の造物主”ではないかしら？なんて……」には筆者のどんな気持ちがかめられているか。次から選び、記号で答えなさい。

- ア 敬意をこめた信頼
- イ 希望に満ちた賛美
- ウ 遠慮がちな失望
- エ 皮肉まじりの警告

問四 「そんなに万能な人間様でも、ボウフラ一匹、ゴキブリ一匹、雑草の草っぱ一枚も作れない」で筆者は、何を言おうとしているのか。「人間」「自然」「科学と技術」ということばを用いて、二十字以上三十字以内で書きなさい。(句読点も含む)

問五 A段落とB段落の関係を説明したものとして適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア A段落で、人間が自然と共存して生きることの大切さが具体例によって示され、それを受けてB段落で、筆者の主張が述べられている。

イ A段落で、自然保護の必要性が述べられ、それを受けてB段落で、具体的な方策が述べられている。

ウ A段落で、自然破壊の現状が具体例によって示され、それを受けてB段落で、修復の具体的な方策が述べられている。

問六 この文章で筆者の述べたいことが最もよく表されている一文を文章中から抜き出して書きなさい。

「解答」

問一 イ

問二 波が寄せては返す干潟の砂や、雑草の生い茂る泥んこの湿原

問三 エ

問四 人間の科学と技術が高度に発達しても、自然には及ばない。

問五 ア

問六 自然への謙虚さ、それが自然保護の原点である。

【】(人間を写生するとき)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間を写生するとき、誰でもまずその頭部から手をつける。頭部が終わると首になり胸になり、だんだん下におりてくるのが普通の順序のようである。草花の場合もまず花から、山ならその頂上から、家を描くときは屋根から……、私も長いあいだこの方法で写生してきたが、いつからともなく、これでは(A)自然のもつリズムがつかめないことに気づいた。

花一つとっても、大地に根をしっかりとおろして春に芽ぶき、成長してつぼみをもち、それが咲くという花のいのちの過程を、下部からだんだん上部へ向けて写しとっていくほうが自然のリズムに合っている。人間のからだでも、同じである。ときどき長い習慣の名残りで上から描くこともあるが、このころは大体下から写生するのが当たり前になってきた。

自然界に生きるものには、すべてこのようなリズムがあるのではないか。木から離れて地上に落ちた枯れ葉でも、それぞれ小さな空間をかかえて、わずかな風にも揺れ動く。その微妙なリズムが私を立ち止まらせる。

そびえ立つ一本の樹を見てみると、土中深く八方にめぐらせた根をもち、そこから上へ上へとびていく力強くたくましい生命の勢いが感じられる。遠く山頂に雪をいただく山をながめても、平地から隆起していく山塊がリズムをもって積み重なり、その上に個性のある頂がある。

(B) 写生する対象のもつリズムの流れの方向を見定めないと、単なる形の説明に終わってしまう。説明は知識の力を借りれば可能だが、説明の描写には対象と画家との対話がない。画家が心を動かされてそこにたたずみ、対象に問いかけ確かめ、返ってくる明確でない言葉を形に表現する、その対話の記録が写生の描写なのである。

華山は人を描くとき最もむずかしいのは、その(C)生色であるといった。たしかに生きているもののリズムを写しとることはなかなか(D)至難の業である。リズムは説明では描けず、対象と対話しながら表現するしかない。

私は一本の線を引くとき、上から下への場合と下から上への場合とで、後者の方が力が弱くいつも苦しむ。左から右に引くときと右から左に引くときでも、後者の力が劣っている。しかし、自然界の生きものは、上下左右おびただしい数の線によって構成されている。とくにいのちのリズムは下から上へ向かう線に特質が見られる。その線に弱いことは克服すべき(E)課題として、私の念頭から離れることがない。

(広島)

問一 (D) 「至難の業」とあるが、この語句は、どついう意味か。簡潔に書け。

問二 (B) 「写生する対象……終わってしまつ」とあるが、対象のもつリズムの流れの方向を見定めるためには、何が必要なか。文章中の適切な語句を用いて書け。

問三 (C) 「生色」とあるが、それは、どついう意味か。文章中の語句を用いて書け。

問四 (A) 自然のもつリズムとあるが、その「リズム」とは、どついう意味か。次のア、イ、エの中から、それと同じ意味で用いられているものを一つ選び、その記号を書け。

ア 花のいのち イ わずかな風 ウ 生命の勢い エ 流れの方向

問五 (E) 「課題」とあるが、課題の内容は何か。具体的に、六十字以内で、まとめて書け。

「解答」

問一 非常に難しいこと

問二 対象と画家との対話

問三 生きているものリズム

問四 ウ

問五 自然界には無数の線があるが、特にいのちのリズムは下から上へ向かう線に特質がある。その線に弱いことを克服すること。

【論説科学】

【】（私たちは科学というものに対して）

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちは科学というものに対して、無意識のうちに、それが合理的、論理的で、体系としての秩序をいやおうなく備えているものという印象を抱いていないだろうか。たしかに科学的な知識というものは、結果として私たちの前に提示されるときは、たいへんみことな体系性を備えているようにみえる。たとえば中学や高校の教科書をみれば、そこには人類が獲得した科学知識がよく整理され、まるで、その一覧表を見る思いがするであろう。そこに示されたすべての理論や公式は、疑問の余地もなく、証明され、相互に緊密に関連付けられていて、私たちはあたかも完璧な芸術作品に対したときのように、驚異と称賛の念でみつめるほかはない。「もともと、科学の体系性というものは、神話のように自己完結的な秩序をもつものではない。科学はたしかに完全無欠な体系への志向をもっているけれども、それはつねに不完全さや偶然による支配を宿命付けられた人間の営みであることを忘れてはならない。

既存の科学知識に完全さをみようとするとする習慣は、とくに私たち日本人に根強いように思われる。おそらくそれは、科学や科学史というものを長いあいだ理論を中心に考えてきたことによるものである。理論はそれ自体合理的に展開されるべきものであるが、それが実際につくられる過程はかならずしも合理的な要素だけでできているわけではない。完成された理論をビルディングにたとえるなら、それがつくられるにはかならず建築足場のようなものが必要だったはずである。その建築足場とは、不確実な仮説、誤った前提、未熟なアイデア、数多くの実験プランなどいろいろ必要な要素から成り立っているのだが、それらは最終的にひとつの理論が完成したあかつきには、人々の目にふれないようにすべて除去されてしまう。私たち日本人は科学知識を、いわば完成された建築物のようなものとして、欧米から受けとり、吸収しようと努めてきた。もちろんそれ自体は、日本の科学技術に大きな進歩をもたらしたであろうが、その反面、科学の知識や理論が生みだされてくる背景や具体的な試行錯誤のプロセスが抜けおちたかたちで科学やその歴史を理解することにつながっているのではないだろうか。たとえば、古代ギリシアのアルキメデス（前二八七〜前二一二頃）は幾何学でも偉大な足跡を残したが、彼は図形の重心や面積、体積などを求める場合、公理や定理にもとづいて論理的に解いていく前に、機械的技術的な方法であらかじめ答えを得ていたという。このエピソードは科学史家の平田寛氏が「科学の考古学」のなかで紹介している。それによると機械的技術的方法とは「素朴なたとえていえば、任意の平面図形の重心を求めようとするとき、あらかじめそ

の図形に等しい形を厚紙（または平板）でつくり、一本の針先で、その厚紙を支え、その厚紙が水平に釣り合う点を探しだせば「重心がえられる」というやりかたである。彼はこのようにしていったん重心の位置をえたあとで、みずからの著作「平面板の平衡」にある定理を用いて、純数学的に問題を解いたのだそうである。アルキメデスが数学の研究において、いまの小学生の紙工作のようなことをやっていたこと、そして「ついつい一見いいかげんにみえる手続きがあのみことな幾何学体系を築くうえで重要なファクターになっている」ということはたいへん興味のもたれる点である。なぜならば、このような非論理的で厳密さにかける操作や手続きは、いかなる科学知識の発見においても、かならずといってよいほど重要な役割をはたしているからである。

科学というものを考えるとき、私たちは完成された理論だけを見て、科学というものを理解してはならないだろう。知識や理論というものは、そのできあがった形とは離れて、意外に泥臭い背景やプロセスから生まれているものなのである。このことをも含めて科学を理解していくことが大切ではないかと、私には思われる。なぜならば、このような理解こそ、未来に向けて新しい科学をつくりだしていくこととするときに、私たちを支える原点になるからである。

（東京農大第一）

問一 「その」の指示する内容を書きなさい。

問二 「」にあてはまる文を次から選び、記号で答えなさい。

ア これはむしろ正しいみかたであって、同意する人も多い。

イ これははたして正しいみかたであるうか、私にはよくわからない。

ウ これは確かに正しいみかたであるう。誰も反論できるわけがない。

エ これははたして正しいみかたであるうか、私はそうは思わない。

問三 「アルキメデス」の例で筆者の言いたいことは何か。次から選び、記号で答えなさい。

ア アルキメデスもニュートンと同じように、幾何学の発見を通して科学に貢献した。

イ アルキメデスは、科学も芸術と同じように人間の情熱が根底にあることを、幾何学の分野で示した。
ウ アルキメデスは、科学の発見のプロセスには論理が重要なファクターになっていることを示した。
エ アルキメデスは科学の発見には非論理的な手続きが大切であることを示した。

問四 「意外に泥臭い背景やプロセス」とは何か。次から選び、記号で答えなさい。

ア 疑問の余地もなく証明され、相互に関連付けられたプロセスのこと。

イ 不確実な仮説、誤った前提、未熟なアイデア、数多くの実験プランのこと。

ウ アルキメデスの幾何学の体系のこと。

エ 人間の営みから生まれた完璧な芸術作品のこと。

問五 この文章の筆者の主張に合うものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 科学にとって必要なのは、合理的論理的な思考であり、それが科学を進展させる。

イ 科学は体系性を目指すがゆえに、そのプロセスにも不完全なものがあってはいけない。

ウ 科学のプロセスには意外に人間らしい泥臭い面もあるが、それは重要ではない。

エ 科学のプロセスには、不完全さや偶然といういいかげんなものが重要な要素になっている。

「解答」

問一 人類が獲得した科学知識

問二 エ

問三 エ

問四 イ

問五 エ

E 芸術では、それができないとはいえないにしても、おそらく困難なことなのである。

問一 「生まれたままの姿」とは、どのようなことを意味するか。2段中のことばを用いて、十字以内で説明しなさい。

問二 本文中の「A」に、最もよくあてはまることばを補え。ただし、五字以内とする。

問三 「児童に類する」の意味として、次のどれが最もよいか。記号で答えなさい。

A 子供の昔からのあそびのよつなものだ。

I 子供の幼稚なあそびのよつなものだ。

ウ 子供の空想的なあそびのよつなものだ。

問四 6段のA～Eの文は、文の順序が乱れている。文章全体の流れを考えて、正しい順序にし、その順序を記号で答えなさい。

問五 「科学には明らかに進歩があり」以前の表現の中で筆者は「科学における進歩」をどのようにとらえているか。最も具体的に述べている所を二十五字以内で書きなさい。

(広島大附高)

「解答」

問一 賢いということだけで

問二 過去がない

問三 イ

問四 E、D、B、A、C

問五 複数の人間が共同して歴史的にかたちづくってきたもの

【】(山崩れがあつて、人が死んだというような場合に)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

山崩れがあつて、人が死んだというような場合に、よく科学的な知識がなかったからといわれるが、これはかなりむずかしい問題なのである。ということは、たとえば大学で地盤や地質のことをよく研究した人、あるいは河川学の権威といわれるような学者が、その場所にいたら、そういう事故に遭つ心配は絶対になかったかといえ、必ずしもそうとはいえない。予期されない問題に対しては、科学は案外無力であるからである。(一段)

ただ科学の効果は、こつこつ予期されない問題についても、その範囲をだんだん狭めていくところにある。そういう意味では、非常に強力なものであつて、科学の力によつて災害を減らすことはできるが、それには統計の観念を常に持つてゐる必要がある。すなわち山崩れが起き得る条件になつた時に、仕事をやめて避難する。しかし起きない場合ももちろんある。その時に科学の悪口をいつてはいけなないのであつて、科学の力は統計的な面において発揮されるのである。(二段)

実際にある事件にぶつかつた場合、一万人中九千九百九十九人は無事だつたが、一人だけ死んだ場合、誤差は非常に小さいが、その誤差にあつた人自身にとつては、科学は全然役に立たなかつたわけである。台風がやつて来て、土砂崩れがあつたというような場合に、薫職の人などが、比喩的な言葉でいえば、筋肉で覚え込んだ知恵で、危機を逃れたというような例がよくあり、そういう場合には、頭に入れた知識はあまり役に立たないことが多い。それはともに科学の本質からくるものであつて、いわば当然のことである。科学は、洪水ならば洪水全体の問題を取り上げ、それに対して、どういつ対策を立てるべきかということには大いに役に立つ。「多数の例について全般的に見る場合には、科学は非常に強力なものである。しかし、全体の中の個の問題、あるいは予期されないことがただ一度起きたというような場合には、案外役に立たない。しかし、それは仕方がないのであつて、科学といつものは、本来そついつ性質の学問なのである。(三段)

(栃木県)

問一 「科学の力は統計的な面において発揮されるのである」と同じことを三十五字ぐらいで述べている部分を三段から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。(句読点は含まない)

問一 「筋肉で覚え込んだ」を言い換えるとする次のどれが適当か。記号で答えなさい。

ア 科学的な イ 実用的な ウ 基本的な エ 経験的な

問三 「それ」の指示内容を文章中から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。(句読点は含まない)

問四 「 」にあてはまることを次から選び、記号で答えなさい。

ア そのうえ イ すなわち ウ たとえば エ ところが

問五 「全体の中の個の問題、あるいは予期されないことがただ一度起きた」というような場合には、案外役に立たない「はどついうことについて述べたものか。文章全体の要旨も考えて、 の という形で書きなさい。

問六 この文章の論の展開の説明として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一段、二段、三段ともそれぞれ、全く同じ内容をくりかえし述べることよって、主張を強調している。

イ 一段と二段は対比的な角度から主張の一部を述べ、三段は具体例に基づいて総合的に主張を述べている。

ウ 一段では筆者と対立する意見を述べ、二段ではそれを否定し、三段では筆者の考える主張を述べている。

エ 一段では主張を述べ、二段ではその具体例を挙げて説明し、三段で再び一段の主張をくりかえしている。

「解答」

問一 多数の例は、ものである。

問二 エ

問三 実際にあることが多く

問四 イ

問五 科学の限界

問六 イ

【】（最近、中国の登山隊が）

次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

最近、中国の登山隊が、頂上に反射鏡を置いて高さを再測したと伝えられるので、あるいは少し変わるかもしれないが、エベレストの高さは、今のところ、八、八四八メートルとされている。あるとき、私は、この高さが圏界面の高さに近いことに、あらためて気づいた。圏界面とは、地面近くにある対流圏と、その上にある成層圏との境めで、地上から昇った空気は、ここでいちおう止められる。いわば、「A」である。その高さは、熱帯で高く、極で低く、季節によって変わる。エベレストのあたりでは、冬に約一万メートルの高さにある。最近のジャンボ・ジェットが飛ぶ高さである。

エベレストの高さ約九千メートル、圏界面の高さ約一万メートル、ざっと似た値である。だが、この二つを結びつけて考えた話は聞いたことがない。偶然の一致とかたづけることもできるが、いったん二つを結びつけると、私には、それが、「B」関係をもつように思えてきた。

例えば、こんな説明である。さきに書いたように、圏界面は地上からの空気が昇るいちおうの限界で、水蒸気が豊富なもの、ここまですである。だから、私が見た、エベレストから風下へのびる雲は、いわば雲の上限に近いものである。圏界面の上では、水蒸気が少なくなり、曇もないといってよい。そこで、エベレストに限らず、ヒマラヤの高峰の頂上に降り注ぐのは、雲にさえぎられることのない“裸の太陽光線”である。岩肌は、それで暖められる。だが、夜になると、岩の放射冷却をさえぎる曇も、また、ない。だから岩肌は急速に冷やされる。

「C」、昼と夜とで、加熱と冷却が激しく繰り返されると、岩石の風化が進行する。岩肌についた雪は、昼には溶けて割れめにしみ込み、この水が夜には凍ってふくらみ、割れめを拡大する。この作用は低地でも働くが、圏界面の近くでは、特に激しい可能性がある。

そこで、造山運動によって、じわじわと盛り上がってきたヒマラヤの高峰は、この圏界面付近の激しい風化作用で削られる。だから、エベレストは圏界面よりやや低く、八、八四八メートルなのではないか。もし「D」かもしれない。

問一 ウ 「解答」
問二 イ
問三 オ
問四 ウ

【】（動物のすみかは）

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

動物のすみかは、くつろぎの場としての快適さと同時に、外敵の侵入を防ぐ堅固さを兼ね備えたものでなければならぬ。活力を回復するために、あるいは、子育てを成功させるために、安心して休める場が（１）不可欠であるからだ。

だが、快適さを追求すれば、すみかは大きく、目立つものになってしまう、敵に発見され、侵入されやすくなる。（Ａ）安全性と快適さの追求は、しばしば矛盾するわけで、野生動物にとっての巣づくりの難しさは、（２）この矛盾の解決にあるといつてよい。

陸を生活の本拠としつつ水中に入って魚介類を捕食するという、いわば水陸をまたにかけた特殊な生活様式を確立したカワウソは、すみ場所の特性を巧みに利用して、安全かつ快適なすみかづくり成功している。

カワウソのすみかは、川岸や湖岸の土手に掘られた地中の巣で、基本的には一つの巣室と外界に通じるトンネルからできている。すみかの特徴の一つは、トンネルの出入口を水面下にもつけたことだろう。おかげで、カワウソは、水中で魚を追ったあと、敵に一瞬たりとも身をさらすことなく巣にもぐり込める。

イヌなどの敵のほうは、泳ぐことはできても、潜水して出入口を見つけ出すなどという離れ業はとつていけない。巣の出入口で待ち伏せして、出てきたところを襲うヤマメコ類の得意とする狩りの方法も、カワウソには通用しないわけだ。

また、水中の出入口から巣室までは、直径二五センチほどのトンネルで結ばれている。トンネルは、はじめ一メートルほど水平に進んだあと、斜め上方に向かい、水面から出て、土が十分乾燥してきたところで広がって巣室となっている。トンネルはかなり長く、最長一五メートルの記録がある。

巣室は、上下に偏平な球形で、広さは、高さ九〇センチ、直径一八〇センチくらいにもなる。尾をのぞく体長七〇センチ前後のカワウソにとって、これは十分すぎるほど余裕のある広さだといえる。カワウソのすみかは、ふつう何世代にもわたって使用され、たびたび改修されるから、このように広くなるわけだ。

巣室は、いつも水から上がってくるカワウソの巣にしては、よく乾燥が保たれている。水中から上がり、トンネルを通ってくる間に、体の水がふき取られるからである。つまり、このトンネルは、単なる通路ではない。たしかに、斜め上方に向かう長いトンネ

ルのおかげで、巢室はどのような増水からも安全な位置につくられているが、それだけのためなら、急角度で登るトンネルをつければ短くてすむことである。長いトンネルは、壁の土が一種の吸水用のマットとしてはたらき、カワウソの体について水を巢室に入るまでにふき取る役目を果たす、という意味で重要なのだ。

長いトンネルの土壁の吸水力は、恐らくたいしたものではないだろうが、カワウソにとっては必要十分な機能を果たしてくれるのである。そして、すみかの中心である巢室には、川岸に生えるアシなどを敷き詰め、快適なベッドをしっかりとらえてある。

問題は、出入口が水中にあるので空気の流通が遮断されることだ。だが、(3)この点でもカワウソは、なかなか用意周到な建築家である。

巢室から上方へ別の道が掘られ、外界に開いた換気孔となっている。換気孔は、出入口としてはけっして使われず、アシの茂みなど、目立たない場所に開いているから、敵に発見されることはまずない。大木の根元のほら穴から幹の中を通って外界に通じていた例もある。多くの場合、枯れ枝や落ち葉などが自然にふりつもって、うまくカムフラージュされているものである。

(埼玉県)

問一 (1) 「不可欠」の意味を書きなさい。

問二 (A) に、その前後の文の関係を示す語句を補うとしたら、どついう語句がよいか。次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ とはいふもの ウ ただし エ また

問三 (2) 「この矛盾」のさす内容が具体的に述べられている一文を文章中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問四 この文章全体の段落構成から考えて、動物のすみかについて、一般的なことがらを述べた部分と、具体的なことがらを述べた部分、との二つに大きく分けるとすると、どこで分けたらよいか。具体的なことがらを述べた部分に入る最初の段落の番号を書きなさい。

問五 カワウソは、自分のすみかをより安全なものにするために、巣づくりにどんな工夫をしているか。次から選び、記号で答えな

さい。

ア 川岸や湖岸の土手の池中に巣をつくっている。

イ トンネルの出入口を水面下にもうけている。

ウ 巣室をたびたび改修して十分広くしている。

エ 巣室までのトンネルを斜め上方に付けている。

問六 カワウソの巣室を乾いた状態にしておくために、きわめて大事な役割をしているものは何か。文章中から十字以内で抜き出して書きなさい。

問七 (3)は、具体的にどういついつとをいつているのか。そのことが最もよく表れている一文を文章中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。

「解答」

問一 欠くことのできないこと。

問二 ア

問三 だが、快適

問四

問五 イ

問六 長いトンネル

問七 換気孔は

【】(樹木は、切られたとき第一の生を断つが)
次の文章を読み、後の各問いに答えなさい。

樹木は、切られたとき第一の生を断つが、建物に使われると再び第二の生が始まって、その後何百年も生き続ける力を持っている。そしてこの第一の木のいのちは、ヒノキは優に千年を越える。

木は人間くさい材料である。千三百年たった法隆寺の古いヒノキの柱と、新しいヒノキの柱と、どちらが強いかと聞かれたら、それは新しいほうさと答えるにちがいない。だが、その答えは正しくない。なぜなら、木は切り倒されてから二、三百年までの間は、曲げ強さや硬度がじわじわ上がって、二割くらいも上昇する。この時期を過ぎてのち、全体は弱くなり始め、法隆寺材は、ちょうど新材と同じ強さになっているからである。

バイオリンは古くなると音がさえるというが、それはこの原理で証明できる。ただし、音がよくなるのはある時期までで、無限に続くと考えるのは錯覚だということもわかる。こうした木の強度の変化の経過は、いかにも生物的だ。「亀の甲より年の功」という言葉があるが、木はそれがあてはまる材料なのである。木の変化の経過は、人間の骨が年をとるにつれて硬くなり、やがてもろくなつていくのともよく似ているのは、興味深い。

木が人間くさいといえば、こういうこともある。バイオリンは背板はカエデ、腹板はトウヒでつくる。日本のヒノキは世界的に優秀な材だから、ある名人は、多年にわたってヒノキでバイオリンをつくることを試みたが、どうしても和風のひびきがするというのである。考えてみると、トウヒでバイオリンをつくって、それから洋楽が生まれたのだから、ほかの樹種では無理なこととはわかる。だが、ひのきが和風のひびきを持ち、トウヒがバタくさい音色がするというのは、おもしろい話である。

無機質の材料は、新しいときが一番強くて、年代の経過とともに弱くなるのが普通である。機械も同じで新しいときが一番性能がよい。こういうものの価値は、年代の経過とともに直線的に低下する。無機系の材料と生物系の材料とは、その特性曲線に大きなちがいがあるのは、興味あることである。

科学技術の急速な進歩で、われわれはすべての対象を物理的、化学的に分析すれば、それでことは足りると信じすぎてきたきらいがあった。だが、生命を持っていたものは、たとえ木のような単純な材料であっても、無機質のものとはちがって、もう一つの神秘的な面を持っているらしい。そうした見方をつけ加えることによって、いまの人間疎外といわれるこの環境は、もう少しうるおいのあるものになるのではないか、とわたしは思う。

木は人間と同じように生物で、細胞というかつて生命を持っていたものの遺体が無数に集まってできた材料がある。わたしはこう

したものを生物材料と呼ぶことにしているが、木綿も絹も木と同じく生物材料である。すべてこつこつという材料は、物理、化学試験の成績では最上位にならない。だが総合的にみて、一番優れた、人間に向く材料である。

人類学の話をするとき、バタくさい顔、日本人的な顔、のつべりした顔というと、たいへんよくわかる。だが、こつこつ文学的な表現では学問にはならない、という根強い風潮がある。そこで顔の骨を精密に測定して計算機をまわすことになるが、いくら計算機をまわしても、バタくささや日本人らしさは出てきそうもない。ということは、分析的手法には限界があるということである。したがって、材料を選択するときは、これまでの分析的な評価のほかに、もう一つなにか総合的な立場からの評価を加えなくてはならない。それは、とくにものを設計する立場に立ったとき、忘れてはならないことであるが、木は無言のうちにそのことを教えてくれる材料だという気がしてならない。

問一 この文章で、筆者が強く言いたいのはどんなことか。次のアからエまでのの中から、最も適当なものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 材料を選択するときは、分析的な評価のほかに、総合的な立場からの評価も加える必要がある。木は無言のうちにそのことを教えてくれている。

イ、生物材料は、無機質の材料にくらべ、物理的、化学的な分析結果でもわかるように、すべての面において一番優れた、人間に向く材料である。

ウ、無機系の材料と生物系の材料とは、それぞれによさがあるが、最近の科学技術の進歩によって、無機系の材料の持つよさがいっそう目立ってきた。

エ、バイオリンの材料には、トウヒは適するがヒノキは適さない。しかし、日本音楽の楽器の材料としては、やはりヒノキが一番よい。

問二 「興味深い」、「おもしろい話である」、「とあるが、筆者は、どういつとこるが「興味深い」、「おもしろい」と思っているのか。それを短く要約していることばを文章中からさがし、七字以内で書き抜きなさい。

- 問三 「風潮」の最も適当な意味を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。
- ア 昔からの風習。
- イ まちがった考え方。
- ウ 世間一般の傾向。
- エ 自分勝手な意見。

(埼玉県)

「解答」

問一 ア

問二 木は人間くさい

問三 ウ

【】(風の歴史をひもとくと)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

風の歴史をひもとくと、紀元前にさかのぼるといふ。それも、いまのように純粋な遊びではなく、敵状偵察や部族間のコミュニケーションの歴史をひもとくと、紀元前にさかのぼるといふ。それも、いまのように純粋な遊びではなく、敵状偵察や部族間のコミュニケーションのような実目的からはじまったものではなからうかと、もの本(たとえば幸田露伴の「日本の遊戯上の飛空の器」)には紹介されている。

だが、それはたまたま記録として残っている風の歴史であって、それよりもはるか以前に、この開かれた空のキャンパスに向かって、ほしいままに空想の翼を広げたイメージの時代があったことを、なおざりにするわけにはいかない。

恐らくそれは、大地に這いつくばっていた人類が、二本足で直立することを覚え、さらに空を仰いで、雲や鳥の飛翔を見、宇宙の彼方に思いをはせるようになったときの、願望からはじまる、といってもいいだろう。その思いの中から、イカルスの神話を生んだ古代人の夢や、託すべきメッセージを空に掲げたいという期待が生まれて、さまざまな人類の(a)シコウサクゴがはじまったのちにない。イカルスの神話の方は、やがて飛行機から気球、ロケットに及ぶ空中飛行の歴史につながって、現在に至るが、空をイメージの交歓の場とする夢は、風の発達に結びつき、宗教的な象徴から民俗的な行事、さらに純粋な遊びとしてのもう一つの系譜をつくり上げてきたのである。もちろん、いくら軽い物体でも、重力にさからって空中に(b)タイリユウさせるといふのは、かなりの知的作業が必要である。風に対して一定の仰角を与えて揚力をつけるといふ工夫が、いつのころに発見されたのか知るすべもないが、しかし、いったんその原理が分かってしまうと、それは風の祖型となってしまう、人はそれ以上技術的な飛躍を求めなくなってしまう。風がその変種を無限に広げ、世界中に多彩な風の文化を生み出しながら、基本的にはビジュアル・オブジェとしての性格を守り、飛行機のような実用機能に向かっていかなかったのは、本来の“空をキャンパス”としてみる願望の系譜を守り続けていたからに他なるまい。

ただ、ここ二十年くらいの間に、この風の歴史の中にも、幾つかの新しい変化が起こってきていることを、注目したい。

一つは、比較文化的な立場から、遊びとしての風、あるいは文化遺産としての風に世界的な関心が高まり、クロスカルチャー的な研究が進んだ結果、風のイメージの相互交配とも呼ぶべき現象が起こり、新しい“品種”の風が次々に生まれてきていることである。たとえば、日本の各地には、江戸時代に成熟した豊富な風の意匠が伝わっているが、欧米の風の作家たちはそのデザインをとり

入れて、より高く揚がるように合理的な改良を加えたりしているし、逆に日本の作家は欧米の立体風のアイデアをとり入れて、幾何学的な風の変種を追求したりしている。大げさにいえば、風は豊富な雑種を生みながら、次第に“進化”をはじめているのである。もう一つは、単なるイメージの変化だけではなくて、風のもっていたコンセプト自体が拡大しはじめていることである。それを予感させるのは、MITの高等視覚研究センターのオットー・ビーネらの主張している「スカイ・アート」の胎動であろう。

ビーネは、いままでの芸術の歴史の中で、人類が対象としてきた素材のほとんどが、絵画や彫刻のように地上に結びついたメディアであったことを反省して、目を空から宇宙へと向けることを提案する。そこに無限に豊かなキャンパスがあることを指摘して、新しいスカイ・アートの(c)モサクをはじめたのである。

一昨年ボストンで開かれた第一回スカイアート会議には、オットーの呼びかけに応じて、世界各国の作家たちが、作品を持ちよったが、その中にはまさに空に掲げる“ビジュアル・メッセージ”として、従来の風の持っていたコンセプトを超えるものがいくつが出現していたのである。

いささか牽強附会を承知でいうならば、かつて人類の祖先が空を仰いで空想の場を広げたときの原イメージが、その後の風や飛行機や宇宙船などの個別の進化史を経た末に、ふたたび宇宙なるキャンパス上に舞い降り、壮大なもう一つの“風”の夢へとふくらみはじめているといえるかもしれない。そして、その先には、あのNASAが試みようとしている太陽風を利用して(d)ワクセイ間の旅へと天がける“宇宙帆”のイメージにまで、重なり合っているのである。

(武蔵工大付属)

問一 (a) (d) のカタカナを漢字に直せ。

問二 「ほしいままに空想の翼を広げた“イメージの時代”」を筆者が考えているのは、風を考えた大昔の人間に大空を自由にとびまわりたいという何があったからか。文章中から二字の熟語で抜き出して書きなさい。

問三 「イカルスの神話を生んだ古代人の夢」と「託すべきメッセージを空に掲げたいという期待」のうち、実用性に結びつい

ていったのはどちらか。番号で答えなさい。

問四 「風のイメージの相互交配」について、具体的に述べている部分を文章中から一文で抜き出し、初めの六字を書きなさい。
(句読点も含む)

問五 「従来の風の持っていたコンセプトを超えるものがいくつか出現していた」のような動きを、筆者はまとめて何といているか。文章中から抜き出して書きなさい。

問六 「もっじっの『風』の夢」とあるが、すでに筆者がいつている何に対して、「もっじっ」あるといているのか。文章中より抜き出し、「」 関心」といつ答えになるようにせよ。

「解答」

問一 (a) 試行錯誤 (b) 滞留 (c) 模索 (d) 惑星

問二 願望

問三

問四 たとえば、日

問五 「スカイ・アート」の胎動

問六 比較文化的